

---

# TP - TC

小田中 慎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

TP - TC

### 【Nコード】

N8939H

### 【作者名】

小田中 慎

### 【あらすじ】

TP。<sup>タフイ</sup>国際協約時空保安庁。人員およそ5万名を誇る『歴史の番人』。<sup>タフイ</sup>TC。非合法にて『マシン』を駆り過去を侵害する時空犯罪者。24世紀前半に始まったタイムトラベルは、ごく一部だけに認められた特権だった。歴史と言う人類の遺産を守るために誕生して以来半世紀、TPは次から次へと現れるTCを追い続けている。そして今日も・・・実行犯逮捕を任務とするAD（紀元後）機動執行第4班。無口で伶俐な女班長、貴族出身の伊達男、ゲリラ上がりの陽気な青年の3名は、TC出没の通報を受けて出動する。目指すは

18世紀後半、独立戦争真只中のアメリカ東海岸、ペンシルベニア  
！【空想科学祭2009参加作品】

## Episode 01・狹霧のロンドン（前書き）

§登場人物（登場順／歴史上実在の人物はEpisode 07の「あとがき」へどうぞ）

ラザフォーン

TCと呼ばれる時空侵犯犯罪者。

スチュワート、セシル

TP捜査員。

ピエール・ド・ウインスラブ

TP作戦部中尉。30歳。19世紀・貴族出身の伊達男。『ウイン』。

マイクル・スペンサー

TP作戦部少尉。20歳。21世紀出身。『スペンド』。

シンディ・クロックフィールド

TP作戦部大尉。30歳。23世紀出身。AD機動執行第4班班長。『ブラックダイヤモンド』

クイーン

シンディのピッカー。女神の姿をしている。

ランスロット

ウインのピッカー。中世の騎士の姿をしている。

バズ

スペンドのピッカー。「昔の」宇宙飛行士の姿をしている。

ラバット

TP整備班長。身長2メートル体重150キロの巨漢。

ニー

TP整備班の名物娘。『ピッカー』の整備第一人者。18歳。

ガーバー少佐

TP作戦部機動執行第2中隊長。シンディたちの上司。

ロックウエル大尉

TP作戦部大尉。AD機動執行第7班班長。

クラン、コリンズ、エレノア

AD機動執行第7班班員。

ジョージ・ウオーカー

TP大尉。24歳。18世紀出身。長官直属。『ジョー』『タ

フィーズ・サン』

ニツク

TP作戦部長。

セルヒオ

アルゼンチンのサッカー少年。

セシル・ウオーカー

元TP捜査官。ジョージの義父。

マスケレイド中佐

TP情報部5世紀常駐隊指揮官。

アン

ジョーのピッカー。本来なら19世紀の英国少女の姿。

マリア・ウエハラ

元TP情報部の分析官。

ジョシュア・マーチン

元TP情報部捜査官。

長官

TP長官。

## Episode 01・狭霧のロンドン

§ イギリス・ロンドン 1780年11月（到達年月） 2350年09月（現在年月）

このような霧を地元の間人は『喉にまとわり付く霧』という。霧は石炭カスや煤煙を含んでいる。喉にいがらつばいのだ。

そんな名物の『黒い』霧に覆われた夜更け、三角帽子に黒のロングコート、握りのカットグラスが光る黒檀のステッキという完全装備の若い男性が、石畳をカツン、カツンと響かせて歩いていった。

馬車で送ろうというノース卿の申し出を断った。彼自身の馬車は車軸が欠けてだめになった。代わりに馬車を、と馬丁が一走りしようとしたが彼はそれも止め、いいから歩く、と言い張った。

「なに、ほんの1マイルですから」

彼はノース卿の愛娘に冗談めかして言う。彼の持つて生まれた武器の一つ、病弱故に透き通る白く理知的な顔を歪めて笑うと、令嬢は目を伏せて、お気を付けて、と言った。

美男子と呼べるだろう。健康だったら尚更だが、そればかりは仕方がない。

馬丁と卿が用心に、と付けた護衛の者2名は50ヤードほど後ろから付いてくる。元首相の次男で政界とケンブリッジの学閥に顔が広い前途洋々な若い貴族。しかも何か思索を巡らせながら歩いている。並んで、いや、数フィート後ろさえ憚れたからだ。

ほとんど闇に沈む街路。彼は手にした携行ランプを頼りに歩く。ノース卿の屋敷を出て20分、自身のロンドン邸まで半分ほど来た時、ふと何かに気を引かれ彼の歩みは緩くなり、やがて完全に止まってしまう。

(誰かが)

この先の闇の中。誰かがいる。目を細め闇を透かし見た時、その暗がりからするりと黒い塊が抜け出した。

それは遠方に見える窓の明かりをバツクに、彼同様の黒いコートに見たこともない奇妙な山の高い帽子の男性と見えた。

男がその珍奇な帽子の鍔つばにちよつと手を添え会釈したが、彼は相手が分かるまであいさつをするつもりはない。

「誰だ」

威厳を籠めた声音で問う。

「どうも今晚は、ウィリアム」

己の名前を告げられたことで警戒心は否応にも増す。含み笑いの呼び捨てに悪意も感じた。

「無礼な、名乗れ！」

「まあ、名乗ったところであなたには何も意味はない。気にするな」

「物盗りだな？止めた方がいい。連れがすぐに追い付く」

「連れだ？ほう、何処に？」

彼が怒りを込めて振り返ると、付いて来ているはずの3人が見えない。足音もしない。闇とはいえ主人が妙な男に絡まれている、それが見えないはずはないのだが。何かがおかしい。

「え？ウィリアム、一体どうしたね？え？」

男は実に楽しげだ。彼は初めて恐怖を感じた。

・・・と、その時。

闇が割れる。彼の目の前でざっくりと闇が裂け、零れるように光が差す。

闇に開いた傷口のような光は思わず手を翳すほどの目に痛い黄金で、まるで夜の裂け目から金色の太陽が差し込んだ様に見えた。裂け目は謎の男と彼のほぼ中間に開き、彼は眩しさにステッキを持つ手で目を庇い一歩二歩と後退する。するとその光の中から声がした。

「行け。逃げる」

それは有無を言わせぬ、先ほどの男とは違う男の声で、彼は一瞬迷ったが直ぐに踵を返し、早足に元来た道を引き返す。後ろから声が追う。

「振り返らず去れ」

無論そのつもり。彼は言われた通り振り返らず、威厳を保つぎりの早足でその場を立ち去る。と、突然目の前にノース卿、即ち首相が用心に付けた護衛の若者と彼の馬丁が姿を現した。

「何をしていた！」

安堵からか、普段の彼からは少しトーンの高い物言いで吐き出すと、3人は困惑の表情で、お互い顔を見廻す。

「申し訳ございません、旦那様。突然お姿が見えなくなり3人でお探ししていたところで・・・」

初老の馬丁はおずおずと言うと、2人の護衛も相槌を打つ。

「間違いございません。お姿は影に溶け込まれた様に見えなくなりました」

馬丁の言葉を繰り返す護衛に手を振って遮ると、

「お前、あれが見えないか」

振り返るなど言われた後ろを示すと・・・そこにはただ、闇があった。うつすらと浮かぶロンドンの街路、艶やかに続く石畳。彼は開けた口を閉じ、言おうとした言葉を飲み込んだ。

「・・・何が見えるのでしょうか？」

恐る恐る馬丁が尋ねる。しかし彼は、

「いや、何でも無い。勘違いであったようだ」

そう言うと彼は、天性のリーダーだけが持つ有無を言わせぬ命令調で、

「ゲンが悪い。道を変えるぞ。遠回りでも構わない、一人は先導して案内して貰いたい。残りは直ぐ後ろに付くことを許す」

即座に護衛の一人が振り向いて先を行き、挟む形でもう一人の護衛と馬丁が彼に続いた。彼は今一度振り返ると、動くもの何一つ見

えず静まり返った街路を見て、深く一息吸う。後は胸を張って無言で屋敷まで歩き通した。

不思議で不気味な出来事は、誰に話しても信じては貰えまい。それでもあくまで言い張れば人々は投票前の候補がナーバスになっている、いや、最悪精神に変調を来たしている、と噂しあうだろう。そんなことは出来るはずがない。それにしても・・・あれは一体何であつたのだろうか？

最後にそう思うと、それはきっぱり胸の奥にしまい込み、ウイリアム・ピット（小ピット）は独り心の内で差し迫った選挙での票読みに戻った。

もちろん彼は、TC（時間犯罪者）に襲われたのがこの時点までに8度目で、今回は彼が気付くほど際どい襲撃だったことなど想いも拠らなかつたのだが。

## § 同地・同年紀同時刻

「行つたか」

「ああ、物分りのいいお兄さんだ」

「まあね。あの若さで2年後この国の首相だから。『ゲームブック』に拠れば14歳でケンブリッジに入ったんだろう？頭の回転は並じやない」

男は肩を竦めると足元に這い蹲るマントの男に、

「おい、お前ラザフォーンだろ？知ってるんだよ、15世紀ではウチの若い者が世話になつたな。ジャンヌダルクの一件だ」

言いながら手にした『カーボンスティック』で男を小突く。マントの男は未だ殴られ転倒した際にぶつけた頭を摩りながら、

「知らないな、誰だそいつは」

「チツ。減らず口叩きやがって。立ちやがれ！」

更にスティックで胸をこじ上げるようにすると、男は観念したのかマントの埃を払うかのように叩きながら立ち上がり、

「シルクハットとバーバリーが台無しだ」

「この気障野郎！何言ってやがる、シルクハットはこの時代にはまだ作られていないしバーバリーは創業者ですら生まれてないのに。その格好が登場するには100年早いんだよ！」

捜査員は吐き捨てるように言い、スティックで男を指し示すと、

「お前、介入するだけでなく彼を拉致しようとしたな？亜空間に『ファンクションキ』歴史上人物』を誘い込みやがって。100年は喰らい込む覚悟をしるよ！」

そして男を睨み付け、

「ラザフォーン。本名は何と言うのか知らんが、お前を国際協約時空管理法第37条第2項、及び第65条により逮捕する。現代時・現時点からお前の発言・行動は記録され証拠として国際検察局に……」

捜査員が現行犯逮捕の宣言と容疑者の権利を読み上げる間、彼の相棒はロンドン名物の霧を眺めていた。が……

「おい、どうした」

権利を伝え終わり、『護送車』に容疑者を閉じ込めた捜査員が相棒の様子に気付く。相棒の男は擬似窓を左右に振りながら霧に沈む街路を探している。やがてぽつりと、

「赤ん坊だ」

「何？」

捜査員は画像を拡大する。街路の端、火事でもあったのか壁が焼け焦げ、漆喰が崩れ落ちた一軒の廃屋の前に、籐で編んだ籠が置いてある。紛れもなく赤ん坊の泣き声がその中から聞こえる。

「よせ！放っておけ」

相棒が擬似窓に何かを打ち込み、それが何を意味するかに気付いた捜査員が男の肩に手を掛ける。しかし相棒はその手を振り払い、

「スチユ、悪いが捨て置けない。この霧では朝まで持たない」

「おいセシル、やめろって！」

しかし捕まえる手は虚しく宙を掻き、相棒は目の前に開いた黄金色に輝く門の中へ、するりと入り込んでしまった。

## Episode 02 ; AD機動執行第4班

§アメリカ・ペンシルベニア 1777年09月(到達年月)

2374年04月(現在年月)

「勤務中は待機時間が」

ウインスラブは深いため息とともに遣る瀬無い想いを口にして、

「一番長いというのは軍隊もTP(24世紀ではタファイ、と発音する)も同じだな。今更ながらしみじみと感じるよ。」

立派な押出しと彫の深い顔立ち、齢30の彼は、現在年約400年前に某国の陸軍少尉だった。捲り上げたシャツの腕を摩りながら誰に言うともなく呟く。

「それも今回は保護対象が一勝負終わるまで待って言うのだからね。最初から見る必要などあったのかな？」

「まあ、旦那、そうばやくなって」

明るく合いの手を入れたのはスペンサー。

「もちろん世紀の一戦をビール片手に、って訳には行きませんがね。まだ旦那の曾爺さんだかなんだかは巻き込まれてないんでしょう？」

「ああ。あと2年ほど後だね、『わが祖国』が参戦するのは」

「じゃあ、気楽に待ちましようや。『ゲームブック』によると大陸軍が敗走するのは、もう30分以内ですぜ」

スペンサーは略帽を斜に被り直すとニヤリ笑って、

「旦那が鉄血宰相ヒスマルクの軍隊相手に、ヤケツパチの騎兵突撃を敢行した時よりはずっとマシな状況でしょうが。やったはいいが、その後敵中3日間も泥の中這いずり回って逃げ回ったとか」

「人聞き悪いね、『スペイン』。確かにそうとも言えるがね、君の言うヤケツパチだが、ウーラン(プロイセン竜騎兵)相手に7キロの前線突破は私の所属した騎兵連隊の輝かしい記録だよ？他の連隊

は壊滅状態だったんだ」

「それは大層なことで。庶民には7キロの突破なるシロモノがどんなもんだかよく判りませんがね」

まだ20になったばかりのスペンサー。深い栗色の髪と茶の瞳を持つ威丈夫で、歳にそぐわぬ口の軽さと当意即妙で仲間内からは『スペンド』と呼ばれる。一緒に『過ごして』楽しい奴だから、とか、待機所に行けば何時でも『入り浸って』いるから、などと言われるが名前のモジリなのは間違いない。

彼も24世紀の人間ではなく21世紀後半、『CO2戦争』と呼ばれた世界人口半減の第三次世界大戦末期、イギリスで孤児となり、浮浪児の仲間と共に凄惨なゲリラ戦を続けていたところを救出、スカウトされた。

「大層なシロモノだったのさ。翌日にナポレオン三世皇帝は降伏し帝政が崩れて、事実上フランスは負けたのだからな。一矢を報いた訳だ」

「悪足掻き、って言葉、知っていらっしやいますか？元・陸軍少尉殿」

ウインスラブはため息を吐いて、

「判った、判った、スペンド。庶民には理解不能と、そう言うことだな。所詮7キロは7キロに過ぎない。だが私にとってあの7キロは偉大だったんだ」

「戻りたい？ウイン」

横合いから声。それまで黙って前を見ていた女が前を向いたまま声を掛ける。

「あの時代に、かい？いいや。帰りたいとは思わんね。どうせその後どうなるか私は知ってしまった。君らもそうだろう？」

女は黙って頷く。スペンドはふと笑いを漏らすと、

「そのまま残れば虫けらのようにつまらない死に方をする、そんな可能性が高いって判っていて残る奴なんて居ませんよ。どうせ残るような奴は最初から候補にならない。俺たちは生まれた時からこう

なる運命だった」

「ほう、面白いことを言うね、スペンド君。それは因果律の存在肯定に聞こえるが」

「今の自分の存在が説明出来なくなる、ですかい？そういう小難しい理屈は学者連中カタブツに任せますよ。でも俺たちは確かにそういう星の下に居るんだ」

ウインは笑いながらも真剣な眼差しで、

「おい、スペンド。頼むからそういうのを少佐や警務課の人間の前で開陳するなよ、再教育だって煩いからね」

「承知してます、つて。独り言ですよ、独り言」

「来た」

女が短く警告する。

2人はすぐさま緊張し身構える。確かに『識別子マイカー』が赤紫色に輝き出している。TPタフイを示す識別子を含まない実体化因子を使う何者かが歴史に介入して来ている。それはTPなど国際機関以外持つことが許されない技術、時空実体化技術を持ち合わせていることになる。

この時点で時空侵犯の現行犯であり、これだけで歴史改竄未遂の大罪にあたる。国際協約時空管理法に拠れば軽くても5年の禁固、最近の判例、犯行に及ぶ直前TPの捜査員に逮捕された、エジソンを殺して電球の発明を自分の祖先に行なわせようと画策した技術者への判決では禁固80年の重罪である。

無論、余程の大物暗殺か地形が変わるほどの介入を行わない限り、歴史というものは一徹に同じ方向を目指して進むことが知られている。時間犯罪者・TC（24世紀の発音でタスイ）によって付けられた傷は、歴史の自然治癒力により最短期間で元の『軌道』に戻る。しかし、傷に伴う混乱は数年以上続く場合もあり、その間、下手をすれば数万人の無垢の者が犠牲、即ち早過ぎる死や正史とは異なる運命に晒される可能性が高い。これを以って歴史を改竄したと公

言するTC（時間犯罪者）が後を絶たない。

確かに歴史は過ぎ去った航跡のような、足跡のようなものと目される。しかし神ならぬ身としては、航跡と言えど人類の歴史そのものに手を加えるのは恐れ多い行為であり、たとえ現世界が改変されるようなことに繋がらないとしても、人間として犯してはならぬ行為には違いない。

そこに存在する人々は、過去が現在の『航跡』、残像に過ぎなくとも生きた人間であることに変わりはなく、因果律が否定された後も『先祖』を敬う気持ちが薄らぐ訳でもなかった。過去があり現在が存在する、それだけは変えようのない事実だったからだ。

古代の人々の純粋な信仰や生きる力から遺跡や文化財が残されたように、歴史もまた、貴重な化石や文化財と同じ、いや、それ以上の価値があるのではないか？それは過去から見れば未来人たる現代人に犯されるべきではない。たとえ望まれぬ歴史ですらサンクチュアリ of 動植物の連鎖のように手を触れられぬまま保存されるべきだ。24世紀の世界はそう考えた。

結果、彼らTPがここに居る。

「時空路開扉前兆確認。シュミット数、開扉係数と一致・・・今」  
女が呟くと、彼女らが臨む丘の下、マーカーによって彩色された実体化因子が燃え立つように輝き、そこから影が1つ、するりと抜け出す。と、またひとつ、ふたつ。

「・・・4・・・5・・・6・・・7。豪勢だなTCの諸君」

スペンドが無駄口を叩く中、7つの影は急速に消えて行く実体化因子の輝きと反比例するように実体化、7人の人間となった。

身体にフィットした戦闘服。頭部を密着型のヘルメットとフェイスガードで覆う。その全てが何色とも表現出来ないダークカラーだが、それはたちまち光学迷彩素材によるカメレオン効果で辺りの風景に溶け込んだ。手には長さ50センチほどの黒いカーボン製の棒

に見えるものを持ち、訓練された者だけが示す無駄のない動きで散開する。

「面白い。プロフェッショナルじゃないか」

スペンドは笑みを浮かべると、

「さ、ウインの旦那、腕の見せ所だぜ」

「任せろ。やるか、シンディ？」

傍らで片膝を折って見下ろしていた女は頷き、すると中空に向けて言い放つ。

「クイーン。本部に送信。本文。AD機動執行4班、TCを確認。

認定者シンディ・クロックフィールド4323210。TC員数7。

これより逮捕権を執行。現在地。現時刻。以上」

2人を振り返ると、

「交戦規則に変更なし。何時ものように。いい？」

「ロジャ」

2人の確認を受けるとシンディと呼ばれる女は再び中空に向け、

「クイーン。交戦規則デルタ。バックアップを」

ウインも中空に向け、

「ランスロット、聞いていたね？・・・よし。準備はいいか？」

同じくスペンド。

「バス。騎士と女神様に負けんなよ！」

シンディは暫しの間、丘の斜面で何かを始めたTCたちを見やっ  
たが、やがて、

「・・・了解。本部確認。執行許可」

「よし、行こう」

逸るスペンドにシンディは、

「ああ、本部より言伝うたが。特にマイクル・スペンサー少尉におい  
ては冷静沈着を旨として執行せよ」

噴出すウイン。顔を顰めるスペンド。シンディは声を張り、

「行くよ！クイーン、開扉スタンバイ、第一規制5m(分)00s  
(秒)でアラート・セット・・・了解、開扉と同時にAPC作動、

ピッカー3体のフォーメーションはA、指揮はクイーンが執る。第一目標、敵指揮官。第二目標、同指揮官周囲の3名。その後、敵ピッカーを処理せよ。よろしいか?・・・よし、20sからカウント。・・・始める」

すると中空から女性の声が降ってくる。

「19・・・18・・・17・・・16」

ウインが捲くつた袖を戻し、スペンドが首を左右に振ってコキツと鳴らす。

「・・・15・・・14・・・13・・・12」

シンディは中空に手を伸ばす、と、そこにTCたちが持つカーボンの棒と同じようなものが現れる。

「・・・11・・・10・・・9」

スペンドが背中に手を回し、さっと前に振ると同じカーボン棒が太刀のように現れる。

「・・・8・・・7・・・6・・・5」

ウインもカーボン棒を手品のように取り出すと、フェイスガードを下げ、身を屈める。

「・・・4・・・3」

スペンドが後ろに一步下がり、シンディは短距離走のスタート直前のように身を沈める。

「・・・2・・・1・・・GO!」

3人は一斉に、丘の上から斜面めがけ飛び降りた。

## § 同地・同年紀同時刻

TCは間もなくやって来るはずの『大陸軍』<sup>アメリカ</sup>の隊列を待ち伏せするために、低い丘と丘の谷間、街道に沿って空気焼夷弾を仕掛けていた。

およそ8千の軍勢がこの狭間を抜けてイギリス軍の追撃から逃げ  
て来る。歴史家は今まで彼らが戦っていた戦鬪を、その地を横切る  
川の名を採って『ブランドイワインの戦い』と呼んだが、もし、こ  
の地で『大陸軍』の本隊が消滅すればこの後独立戦争は史実通りに  
は展開しなくなる。奇妙な川の名は歴史の授業の脚注でのみ登場す  
る英軍勝利の小競り合いから、誰もが知る世界史に燦然と輝く名前  
に変わるvoudらろう。

その結果は重大だ。それにこの軍勢には、後にこの国の首都と州  
に名を残す大物が加わっている。

もちろん歴史はこの傷を何年掛かっても修復するだろうし首都も  
州名も彼の名が使われるはずだ。だがそれは、独立戦争で戦死した  
リーダーを祀る意味合いであり、その後の彼の頂点を記念するもの  
ではない。畢竟、その重みは軽くなるだろう。

しかもそれが産み出す結果は、24世紀の『正史』が知る世界で  
はなくなる。

この『傭兵』たちを雇ったグループの見積では、この十三州の独  
立は3年遅れるが、逆に本国はその分兵力を泥沼の独立戦に裂かね  
ばならないため、革命直後のフランスに対抗する軍隊も政策も史実  
より弱まるはずだという。世界は大きく変化するだろう。

(桜を切ったエピソードは語り継がれるのだろうか?)

TCの一人は斜面に『カーボンスティック』で穴を掘りながらふ  
と思う。その話、男が子供の頃『絵本』でも授業でも登場した。今  
では一牧師の創造とされるこの逸話は、まもなく誕生する『未来の』  
大国を象徴する話だ。だから作り出されるだろうし消えはしないだ  
ろう。そう考えると少し安心する。

彼は北米同盟の生まれだし正史の初代大統領を尊敬してもいた。  
その彼が当人を『抹殺』する仕事に加担する。そこに良心の呵責は  
ない。『本物』の初代大統領は既に歴史の舞台で大役を演じバラの  
香りに包まれて退場した。それは誰にも変えることが出来ない。彼

らが行うとしてしていることは、いわばその記録を汚すことだ。

初代大統領がそこに『生きています』にせよ、それは正史から見れば虚構に過ぎない。プロである彼は仕事と私情の区別は出来ている。しかもこの行動が、彼が最も敬愛するヨーロッパの偉人に対する間接援護にもなるという。その人物は今頃大西洋の東側、野心を胸に己の不運をかこっていることだろう。正史でもこの後、信じられぬような幸運が彼にもたらされるが、それは更に大きく、長く続くこととなる。彼はそう思い、笑みを浮かべた。

彼は腰に装着したケースから空気焼夷弾を一発取り出すと、カーボンスティックが放散する振動エネルギーが土や石くれを分子レベルに蒸発させて出来た穴に落とし込む。中空に開いた擬似窓数箇所をタッチすると、焼夷弾の後端に赤いサインが点った。

一発で周囲30立方メートルの空気を一点に圧縮後、爆散して酸素と付近の可燃物を燃焼し尽くすこのタイプの兵器は、セルロース系素材のケース共々全く後に何も残さない。24世紀では残酷な『過殺傷性』兵器として国際協約で禁止されている。

でも、ここは18世紀だ。

「こちらポインター。先陣が視界内に入った。急げ」

リーダーの声が耳元で囁く。およそ2キロに迫った、ということだ。彼は焼夷弾のケースから最後の1個を取り出し、穴に嵌めセーフティを解除する。

「ビーグル・ツー、完了」

彼が囁くと同時に数名から同じ報告が入り、一瞬遅れて更に数名が完了を告げる。全員が設置を終えるのを確認したリーダーが、全員亜空間に退避しようとした瞬間。

突然、リーダーの身体が浮かぶと、何か口を開く前にその姿は一瞬のうちに掻き消える。一番近くにいた部下もそれに気付き、さすがはプロ、考える前にカーボンスティックを構えた。だが、武器は構えた途端弾かれたように手元を離れ、宙をくるくると回転したか

と思えばこれも消え去る。次はその男の番で、消える前に男が言えたのは「敵襲！」との一言だけだった。

7人のTCのうち、最初の5秒で4人が捕縛されたが、残り3人は十分とは言えないまでも警告を与えられたため、最初の4人のように成す術もなく、という訳には行かなかった。

「おいスペンド！左だ、一名丘に向け走っている！」

「おうよ！任せろバズ。早く行け」

「大尉。3時、61メートル先、岩の陰、TC1名潜んでいます」

「了解」

「ウイン、11時の方向に敵1名、9時の方向へ撤退中」

「了解した、ランスロット。後は任せなさい」

丘から亜空間を飛び出した3人は、地面に降り立ち実体化すると同時に3人3様、3方向へ走り出した。残り4m(分) 46s(秒)

。残り4m42s。

ウインはカーボンスティックのモードを『ライフル』にし、立ち撃ちの模範姿勢で100メートル先の敵を狙う。

光学迷彩のバトルスーツも生体送受信素子を持つ者には意味がない。タグを通した熱線情報が視覚に伝えられ、相手の姿が輝いて見える。当然相手もタグ付き、こちらを視認出来るが、それでも光学迷彩スーツはお互いに使われる。ないよりはあった方がマシだからだ。

スペンドは『マシンガン』を選択、走るTCの先に電磁ビームをばら撒き、その男を遮蔽物の陰に飛び込ませる。

残 4 m 3 9 s。

ウインの放ったプラズマ状の球体弾は狙ったTCの肩先を掠め、反動でその男が転倒する。

残 4 m 3 5 s。

シンディは岩陰のTCに全身を晒し、ウインの結果を眺める。そのTCがチャンスとばかりスティックを岩で支え、ライフルモードで撃つ。

残 4 m 3 3 s。

シンディはTCが撃つと同時に身を翻し、プラズマ弾の熱風に略帽を焦がし伏せながらマシガンモードのスティックで岩陰を撃つ。スペンドは岩陰に隠れたTCを釘付けにするため、腰だめでスティックを連射<sup>バースト</sup>させながら接近する。

残 4 m 2 8 s。

シンディの撃ったビームにより、砕けた岩片に顔を断ち切られたTCがよろよろと岩陰から現れ、そのまま顔を両手で覆って崩折れる。ウインは自分の相手、転倒した男が四つん這いになって起き上がるうとした数メートル前方へ威嚇射撃をする。

残 4 m 2 2 s。

ウインの相手が手を上げ上半身を起こす。ウインはスティックを擬して男に手を上げさせたまま膝立ちをさせ、素早く周囲の状況を確認する。

残 4 m 2 0 s。

シンディは倒れた男の手足に電磁錠を嵌め、クイーンに収容させる。ウインは手を上げさせた男のボディチェックをランスロットに任せ、スペンドの応援に向かう。

残4m18s。

スペンドはTCから20メートル離れた窪みに身を投げ、間一髪、TCの放ったプラズマ弾を避ける。ウィンがすかさずライフルモードでプラズマ弾をTCに放ち、相手のTCは素早く身を隠す。

残4m13s。

スペンドの伏せる窪地の隣にウィンが身を投じる。2人はアイコンタクトと指先のモーションで打ち合わせ、カウント3で左右に走り出す。

その4s前。

ウインの放ったプラズマ弾が岩に当たり、溶解した破片が飛び散るのを伏せて避けたTC。彼は自身のパーソナル・コンピュータ・レイドロイド『ピッカー』が沈黙したことに苛立ち、自身の五感で対応しなければならぬ状況を嘆いた。

ピッカーが潰されたのならマシンも抑えられたに決まっている。とすれば彼に残された手段は緊急脱出シユーターを作動させることだけだが、それをやると、一体どこに飛ばされるのか分からない。

仕様では前後3年以内・距離500km以内だというのが、過去それをやった者は大洋に放り出されたり未開の地（過去にはそんな土地だらけだ）に孤立したりと散々な事例だらけ。ここは海岸に近いので大西洋に浮かぶ可能性は50%、内陸だとしても万が一西側なら500キロも離れれば植民地とは名ばかりのインディアン支配地域。リスクは今以上だと言える。

ならばTPだと思われるこの連中に降伏するしかないが・・・何れにせよ、彼の残り時間もあと1m30s、決めなくては・・・と、そこで敵の2名が左右に飛び出したのを視野の隅に捉え、咄嗟に左へ連射した。

残 4 m 0 2 s。

飛び出したスペンドは自分の方が的になったことに苦笑しながら数メートル先の草叢ブッシュに頭から突っ込む。鋭い痛みが肩を襲うがそれを無視し、枝先に頬を掻き切られながら匍匐した。

残 4 m 0 0 s。

T C がスペンドを狙ったことが分かったウインは手近の岩陰に走り込み、マシンガンモードのスティックを、危険域まで過熱するのにも構わずにフルバーストする。T C が再び岩陰に隠れた途端、ウインは先へと走り出した。

残 3 m 5 7 s。

ウインのフルバーストを耐えたT C は射撃が途切れて3カウントで岩陰を飛び出し、5メートル離れたブッシュに縁取られた窪地へ飛び込む。その後を追うようにウインの放ったフルバーストが彼の頭上を掠める。

残 3 m 4 9 s。

残り時間がほぼ1mとなろうとするT C は時間切れを狙って釘付けにする意図を見せ始めた敵を想い、捕まるよりは脱出シューターで僅かな可能性に賭けることにして擬似窓を開く。ピッカーがやられたためシューターはマニュアル起動せざるを得ない。手順は示されるが手入力で各数値を入れるのには敵に囲まれた中、非常な集中力を要した。そして彼が13項目の8つ目を入力した直後。

「手を上げる」

よく通る伶俐な女の声。T C の男はスティックを声の方に振ったがそれは無駄、途端に鋭い痛みが右腕に走り、呻きながらスティックを取り落とした。

「次は死ぬことになる、いいのか？」

冷たく言い放たれた声。窪地の縁から見下ろす褐色の肌をした小柄な女。上げたフェイスガードから覗く精悍な顔。

「お前、まさか・・・『ブラックダイヤモンド』か！」

TCの男は女の無表情と、きれいに貫通し組織が焼けたため一滴の血も出ない黒い穴となった傷口とを交互に見やり、漸く観念し傷の痛みにより口を歪めながら立ち上がる。

「あなた、伝説とばかり思っていたよ。まさか本当にいたとはね」

男は傷口を庇いながら手を上げる。残3m32s。

シンディは窪地に降り立つと男の手に電子錠を掛け、中空に声を掛ける。

「クイーン、いるか？」

「こちらに」

女の声は中空から降るように届くが、それは彼女にしか聞こえない。直後、彼女の2メートルほど後ろ、30センチほど浮遊した状態で背の高い『女神』が現れる。が、これも彼女にしか見えない。ギリシャやローマ神話、星座の世界で語られる女神を彷彿とさせる姿形。白い薄衣に黄金の甲冑、腰に剣を下けている。

「収容しろ。怪我の手当ても。急げ、後15s程で容疑者は時間切れだ」

「了解しました」

女神はTCの男を軽々と抱き上げて中空に持ち上げる。と、そこに光り輝く長方形が現れ、女神がその中に男を入れると、長方形と男の姿はたちまち消える。

「状況報告」

「容疑者の仕掛けた空気焼夷弾は18発、全て信管を無効にして回収しました。保護対象は1km先、後10m程度でここを通過します。史実との誤差、ほとんどありません。」

次に損害です。スペンサー少尉が左肩に裂傷を負いましたが命に別状はありません。ピッカーではランスロットが敵ピッカーとの戦いで一部防壁を焼かれましたが、これもたいしたことはありません。

他は全員無事です」

女、シンデイは頷き、

「容疑者たちは？」

「彼らのピッカーは全機能停止に追い込み、証拠品として貨物車カーゴに載せ、容疑者は全員護送車コンテナに入れてあります。負傷者が2名、あの男を入れて3名ですが応急処置を施してあります。逮捕の宣言はランスロットがしましたが、無論我らピッカーでは正規の宣言にはなりませんので、後で必ず追認願います。全員大人しくしていますよ」

「そうか、ご苦労様。では行こう」

女神が礼をして一步下がるとそのまま姿が消え去る。そのあとに輝くドア状の長方形が現れ、シンデイはそれに向けて歩き出し、長方形は彼女を迎えた途端、彼女諸共瞬きする間もなく消え去った。

彼らの実体化可能時間残り2分57秒。プロのTC傭兵7名の逮捕に要した時間がたったの2分というのは、さすがAD（紀元後）機動執行班でも1、2を争う先鋭の4班ならではのと言えた。

§ 時空走路ルート3

2374年04月（現在年月）

マシンに窓はないが、TC（時間犯罪者）のマシンはいざ知らず、TPのマシンは長時間の時空ドライブに乗員が閉所恐怖や息苦しさを感じないよう、全面スクリーンが擬似風景を映している。勿論風景だけでなく様々な映像を3次元で再生することが可能だ。

シンデイたち執行4班のいつもの光景は、3人3方向を向いてスクリーンを仲良く4等分、自分の前4分の1の画面を眺め、そこに思い思いの画像や映像を流し、残り4分の1にマシンの現況モニタを投影する、というもの。

今回は任務が18世紀後半だったので、片道僅か1時間半の航程、3人のうち2人はデフォルトのランダムな環境映像を流し、殆どスクリーンに目を向けていなかった。残り1名は20世紀に制作された2次元動画、『シネマ』を鑑賞中だ。

「皆様、この度はタフイ航空をご利用頂き真にありがとうございます。当機は定刻通りラ・ガーディア国際空港を離陸致しました。只今、当機は高度1万メートルまで上昇中です。シートベルト着用のサインが消えますまで、シートベルトをお外しにならないようお願い申し上げます。昔は良かったと思いませんか？」

アンダーシャツにスポーツトランクスと、かなりリラックスした格好のスペンドがご機嫌に呟く。頬2ヶ所と左肩にパッチを当てているが別段痛そうな素振りは見せない。

「可愛いアテナダントがにこやかに振舞う紙コップのソフトドリンクかコーヒー。最新号の文字通り紙で出来た週刊誌とニユースペーパー。化石燃料を使い力づくで飛ぶジェットプレーン。全てが環境破壊に繋がるのに誰も気にしなかった時代。でも、全てがリアルで触ることが出来、臭いや形、色、個性的で魅力的な日用品。擬似ではない本物の時代……」

「私は君の言うところの本物の、更にも上の時代に生まれたんだ。ジェットプレーンですら腰を抜かす代物だったよ」

幾分皮肉交じりにウィンが返す。何時ものように制服のシャツを腕捲りし、古風なボーンチャイナに注いだ本物のコーヒーを飲んでいた。

「俺もそうでしたよ。第一、スカウトはこのマシンに乗って来ているんだから。未来人は過去から見れば魔法使いも同然。夢に描くことと夢に住むこととは根本的に違いますからね」

「君は詩人になるといいよ。時々夢見る十代のように洒落たことを言うからね。まあ、夢に住む云々は良く分かるがね」

スペンドはウィンの物憂げな様子に肩を竦めると、  
「ウィンの旦那は本物の紳士だからね。19世紀のパリはさぞ楽し

かったでしよう？夜毎の乱痴気騒ぎ。シャンペンに夜の貴婦人たち。彷徨える正装の紳士たち」

するとウインの前のスクリーン片隅にロートレック描くところの夜のパリがスライドする。

「それはベルエポックだろ？私の時代はもうチョイ前の話さ。子供の時は街中引っくり返して模倣替えの最中だったし、出来上がったパリには昔の面影はなくなっていた。人間臭さが消えてやら気取った面白味のない街さ。まだシャイヨー宮もエツフェル塔もないからね」

「寂しい青春か、ご愁傷様で」

「その通り。下級貴族の三男坊は軍務一筋でしか存在を証明出来なかったのさ。色気の欠片もなかったよ」

ロートレックが消えると代わりに、バリケードの上に立ってライフル銃を振りかざす人々の2次元静止画像が現れる。

「旦那、パリ・コミュニケーションは見たんだっけ？」

「リアルでは見ていないし、任務でもあの時代のパリには行ったことがないからまだ見ていないよ。行きたくもないがね」

「残念だな、旦那が三色旗振って大見得切る姿を一瞬想像したんだけど。その腕捲りは似合いそうだし」

今度は三色旗を掲げて人々の方を振り返る女性の姿。

「それ、ドラクロアの自由の女神だろ？大体ドラクロアじゃ時代が違うし。コミュニケーションなら赤旗だろ？」

「まあ、旗の色は何でもよござんすがね、女神っていうのはいいなあ。そのお髭がチャームポイントだしね。」

女神が消え、その位置にセピア色の騎兵連隊少尉ウインスラブの画像が嵌めこまれ、ウインの呻き声が重なる。

「降参だ、スペンド、勘弁してくれよ」

宙に浮かぶ疑似ボードを叩いて報告書を作成していたシンディはふと手を休め、2人の掛け合いに半分耳を傾け、胸の内であざむきの端に微かに笑みが浮かぶが、彼らとは反対の方向を向いているか

から見られる心配はない。

彼女が笑うのを見た者は少ない。アイスシンディやらブラックダイヤモンドなどと陰口を叩かれるが気にしたことなど無い。

彼女は実力でこの地位、機動執行班長の地位を得た。現行犯逮捕を任務とするTP作戦部エリート中のエリートである。

執行班はAD担当とDC担当があり、それぞれ16班と6班編成、通常4人で一班だが、彼女の班のように変則的に3人や5人の班も存在する。総勢100名しかいない、作戦部員2万名憧れの部署だった。

彼女には謎が多い。そもそも、今や殆ど消え去った男女間の不均衡が、根強く最後まで残る軍や保安の実行部隊で、彼女が様々な障害を乗り越えたのは、いかなる偶然と彼女自身の努力が重ねられたのだろうか。

24世紀に至り、女性の地位は男性と互角かそれ以上の存在になりつつあった。

人間はあらゆる方面で自らの手を汚さずに、それまでは自から行っていた作業を自動化若しくは無人化していったが、今やヒトがマシンと人工頭脳に代行させないのは生殖行為だけ、などといわれるまでになっている。

下世話な者は、人工授精で生を受けた人口が全体比40%を超えたことを理由に、SEXすら機械に任せる人間、などと皮肉る世の中だ。自然、人は単純作業を行なわなくなり、人力を必要とすることも殆どなくなり、男性と女性の力関係も1世紀ほど前にほとんど均衡して、人は己の能力と素質のみで違いを示すようになった。

結果、事務方や企画、デザイン分野はもちろん、マシンの取り扱いや各種の工事、製造まで男女差はなく、ほぼ均等に労働力が行き渡った。そんな中、構成男女比2対1で推移する職業があった。軍隊と警察である。

一方、22世紀末。紆余曲折を経て世界が合従連捷を繰り返し、

大きく7つにまとまった時に誕生した北米同盟は、旧アメリカとカナダ、メキシコとカリブ海諸国、中米の数ヶ国が合併したもので、当然ながらアメリカの強いリーダーシップにて生まれた。

貧困と格差の解消。大国の属州ではなく、対等な同盟国民としての地位。謳い文句は晴れやかで、実際同盟は隅々まで目を凝らし対等なインフラや教育を施し、貧困層を救いに掛かったが、それは時間の掛かる絶望的な作業の繰り返しとなった。

現在、スラムは過去の遺物、と同盟は言うが、メキシコ南部からパナマにかけて、また、カリブの島嶼の一部では未だに餓死者も出している。

彼女、シンディ・クロックフィールドはそんな同盟が混乱の中、漸く前に進み出した23世紀初め、南米連邦の沖合に浮かぶ島からルイジアナの田舎町に移り住んだカリブ人を両親に生まれたのだ。

そんな彼女がTPにスカウトされたのは15の歳。

その頃、旧合衆国南部で多発した爆弾テロに巻き込まれて彼女の両親が死んだ。犯人は貧困層の妬みを力に成長したテロ組織で、革命を唱え、無差別テロを繰り返した。官憲は必死に組織を追及し撲滅を図ったが、この手の組織は中々潰せるものではない。幼少の頃から貧困層の悲哀を知り尽くし、無口で無表情な少女に育った彼女は、そんな官憲を尻目に、彼女なりに両親の仇をとり始めた。

その詳細を彼女は仲間に語ったことはなく、またTP側もその辺りの経歴を伏せたが、それが返って彼女の神秘性を高める事にもなった。

皆が噂や伝説の類として知っているのは、TPのスカウト班が彼女を收容した時、彼女はテロ組織のアジトの中にいて、十数人の血塗れのテロリストの遺体の中、たった一人の生きている人間だったということだけだ。

シンディは当初から作戦部に配属され、24世紀順応教育とTP捜査官初期教育を終えるや否や、重要ポイントに半駐在して網を張る情報部諜報班の護衛としてTPの人生を歩み始め、めきめきと頭

角を現した。

その後、作戦部機動捜査班を経て18歳で機動執行班に配属、21歳の時にTPの最年少記録でその班長に抜擢、それ以来、例外的な1、2の事例を除き彼女の評価が下がったことは無い。

彼女はウインと同じく今年で30歳。人生の半分をTP捜査官として過ごしたことになる。

公務を司る組織は古今東西どこでもそうだが、予算と人々からの支持獲得のため、存在と必要性をアピールする。TPも国際協約機関であり、国際エネルギー管理機構や国際宇宙開発計画など強力なライバルと存在を賭けて切磋琢磨しなくてはならない。成功例は良い宣伝であり、シンディ・クロックフィールドTP大尉はその成功例の最たるものだった。さすがに画像は伏せられるものの、彼女の2つ名前、ブラックダイヤモンドと共にこの活躍は意図的に、そして脚色されてまことしやかに流された。

もちろん彼女だけ特別扱いでは角が立つ。活躍に比べ昇進速度がそれほどでもないのも中央が意識してのことだ。このことと彼女に野心が無く、社交ベタで孤独を好むことが相俟って、部内の嫉妬は極力押さえられたが、これが宣伝好きの野心家だったら問題になっていたかもしれない。

シンディは昇進には興味が無かったが、自分が宣伝材料に使われることに関しては内心、苛立たしく思っていた。特にTP高官が国連や有力地域の高官との会食や会議に飾りとして彼女に同行を命じる時など、拒絶の言葉が喉から出掛かる時もあったが、TPには大きな借りがあると思っっている彼女は黙って付き従っていた。

とにかく、彼女の行動は内外共に注目の的になっている、ということだ。

当然、その榮譽もとばっちりも班員2名（1名欠員）に降り注いだり、上官に負けず劣らず、ウインもスペンドも野心や神経質とは無縁の男たち、他愛の無い陰口やおべっかなぞ鼻で笑って気にもかけない。

それでいて2人とも社交性が高く捜査員としての能力も高かった  
ので、彼らのチーム、4班はケチの付けようもないトップクラスに  
君臨することになっている。

シンディとのコンビもウインは4年来、若いスペンドも2年目に入  
った。5年前の『エリザベス事件』で組んでいたチームは最高だ  
ったが、彼女は今のチームを同等、否、それ以上に感じ始めていた。  
ウインスラブのことはもう知り尽くしている。彼が24世紀にや  
つて来たのは10年前。2年間情報部に所属した後、作戦部に転属  
し、4年前からはずっとシンディの部下としてやって来た。19世  
紀変動の時代に厳しく躰けられた准男爵は、誠実さと内に秘めた熱  
意、そして高い資質を合わせて得難い存在だ。

そしてスペンド。彼の存在も大きい。シンディは過去、幾人もの  
エキスパートの女たち、男たちを見て来たが、この若い行動派の奥  
深さには内心舌を巻いていた。

おしゃべりで軽薄、考えるより先に行動する短慮な落ち着きの無  
い男、との評価が定着しているが、その心の内で深慮と高い知能が  
働いているのを彼女は知っている。

誰も見ていない時にふと浮かべる、底知れぬ闇を連想させる横顔。  
それは彼の生まれと育ちに関連するのだろうか、そのダークサイド  
を伺わせない明るさ、これが人を欺いていた。スペンドは己の負の  
部分を強い意志で覆い隠しているのだ。相通じるものを持つ彼女は、  
スペンドもウイン同様、背後を任せても振り返らずに済む力強い『  
戦友』として接して来たのだった。

「大尉。後10分です」

クイーンの声に回想から覚めると、マシンは24世紀に『入り』、  
『減速』を始めている。結局、報告書は半分も出来なかった。全て  
が仮想化・自動化され、音声・思考・手入力と様々な方法でマシン  
類を操る24世紀においても、お役所仕事は変わらない。報告書は  
提出されねばならず、文書化してファイリングされなくてはならな

い。もちろん文書といっても紙ではないが。

有能なシンディでも苦手はあるが、報告書はそのひとつだった。彼女は擬似ボードをこれ幸いと閉じ、シートの傍らに脱ぎ捨てていた制服を拾う。

「皆様、当機はまもなくヒースロー国際空港に着陸致します。シートベルト着用のサインが出ましたらシートベルトをお締めください。ロンドンの天候は曇り、気温摂氏14度。お手洗いは今のうちにお済ませください、てね」

スペンドは制服を左袖だけ通し、その必要も無かったが右肩の負傷が見えるようにした。

「おやおや、名誉の負傷、かい？少尉。」

目聡いウインが茶化す。彼も腕捲りを下ろし、彼なりの帰還準備をする。

「まあ、せいぜいアピールしますよ。最近、少佐ドノは俺をスルースるんでね」

「頑張れよ。これで君も黄太線だろ？お祝いだな」

「お二方にはまだまだですからね、通過点ですよ。目標は金線3本だから」

TP作戦課の外勤組制服には、俗称「撃墜<sup>スコア</sup>マーク」なるものがある。制服左肩に線で逮捕件数が示されているのだ。

細い白の系線が1件、黄線が5件、白太線が10件を示し、50件で黄太線、皆がマジックと呼ぶ100件で金太線となる。ウインは金太線1に白太線2と系線3。シンディに至っては金太線2に黄太線1、白太線2と黄線1。現役最高件数だった。

ちなみに最高記録は5年前に引退したある少佐の金線3本。現役トップのシンディと、白太線3本差で続くライバルがいつその記録を抜くのか、TP本部内ではそろそろ話題になり始めている。

確かに、逮捕50件を超えたら、もうベテランと呼べる。まだ20歳でそれを達成したスペンドは表彰ものだが、TPの作戦課はそんなに浮かれた職場でもない。それにシンディがスペンドの歳には

金線直前だったと言う。<sup>マシツク</sup>

「金3本か。私には無理だね。まあ、せいぜい頑張りなさい」

「その頃には4本が目標だろうけどね」

スペインはシンデイに視線を流して不敵に笑う。案外、こいつは簡単にクリアしてしまうかもな。ウインはスペインを見て目を細めていた。

STP本部・マシン発着場

2374年04月（現在年月）

TP『タファイ』と呼ばれる機関は国際協約、今や形骸化するもの  
の目上必要として存在する国際連合加盟『地区』総意により成立  
する機関の一つで、国際協約時空管理法を根拠に半世紀ほど前、設  
立された。正式名称は国際協約・時空保安庁。その本部は旧ブラジ  
ル、24世紀の現在では南米連邦ブラジル北西の奥地、マナウスか  
ら200kmほど離れたアマゾン流域にある。

何故こんな辺鄙な場所にあるのか、それは『マシン』がまだ『行  
き』と『帰り』両方必要だった時代があり、それも100kmほど  
の直線コースを要したからだ。その遺構は記念として本部の地下  
深くに眠っている。現在のようにマシンが大型軍用車両並みになっ  
てから先、この地にいる必要性は少なくなっただが、地球上に殆どな  
くなくなったといっても良い地域的秘匿性があり、未だに保護されてい  
る少数民族のサンクチュアリにも近いこの場所を機関が離れること  
は無かった。

AD機動執行第4班の往還マシンが、呆れるほど巨大な地下発着  
場に到達したのは現地時間でその日の夜、9時を少し回った時間だ  
った。往還の際の年記誤差を完璧に正すための修正時間分<sup>タイムラグ</sup>、マシン  
は実体化せずに亜空間上に構築された修正エリア<sup>ラグ</sup>に留め置かれる。

今回の任務は600年ほど遡っただけであり、修正に要した時間

は20分ほど。9時半にはマシンは実体化し、後ろに連結された貨物車と護送車もステイクを手に取り囲んだ保安要員の見守る中で実体化、即座に開けられた。

カーゴの中身は何体かの人型ロボットで、損傷の激しさが見て取れ、全て機能停止させられている。黄色い作業防護服姿の十数名により、素早く浮上式台車に積まれ、何処かに運び去られて行く。

コンテナからは数珠繋ぎに容疑者が降り立ち、それぞれ怪我人もそうでない者も一様に拘束具で固められ、自走式の護送パツクに載せられ、保安課員に固められて去って行く。

何時ものように、最後にマシン本体のハッチが開き、4班がシンデイを先頭に発着場に降り立った。

「大尉。ご苦労様です、無事のご帰還、おめでとございます」

「ありがとうございます、ラバット」

作業着姿の2メートル、150キロはあるかと思える髭面の巨漢が身長160センチのシンデイに敬礼し恭しく語り掛ける姿に、ウインは内心吐息を吐く。整備班長がボスに敬礼するこの光景が、帰って来たと実感させる最たるものだった。

「何かありますか？」

「いいえ、マシンは快調だった。今回はマシン自体戦闘に巻き込まれていないし、あちらでも実体化していないから、特に言うべきことはないわ」

「了解しました。後はお任せください」

「ご苦労様です。任せます」

「スペンド！おつかえりー！」

こちらでも帰還の常景が繰り広げられている。これ見よがしに右肩の「掠り傷」を見せびらかせてハッチを潜って出て来たスペンドに、黄金色の髪がキャップから覗く長身の少女が抱き付いた。

「バカ！任務完了報告前だつちゅーの！それにお前に抱き付かれるほど俺はお前と親しい仲じゃないぜ？」

「あれ？怪我したの？どうしたの、大丈夫？」

「人の話を聞けって、ニー。オイオイ！」

スペンドの慌てぶりは滑稽で、整備班や警備の者から苦笑が漏れる。スペンドに付き纏う少女は整備班の名物娘で、ニーと呼ばれる18歳。ある整備班長の娘で、3歳の時分には整備場を遊び場にして、10歳で非正規ながら整備班員の雑用からスタートしたメカニックだった。

「少佐。只今戻りました」

やや声を張ってシンディが中年の男性に声を掛ける。ニーはそれを見て渋々スペンドを開放した。中年の男は咳払いを一つすると、

「ご苦労様でした。どうでしたか？」

「毎度のことながら情報部の検証を待たねばなりません、ほぼ完全に達成したものと評価致します」

「それは良かった。報告書は明日1000までに貰いましょう。任を解きます、ゆっくり休みなさい」

幾分形式的に敬礼を交換すると、シンディの受け答えも待たずに少佐は副官を連れ、その場を外す。

「さあ、ランスロット、出て来なさい。怪我したんだって？」

少佐の退場を待っていたニーが、シンディの後ろに直立していたウインに向けて言うと、ウインの2メートルほど後ろに突然、中世の騎士が現れる。イタリアやスペインの宮廷画家が拳って描いたような様相と腰のサーベル。現れるや否や、深々と腰を折り、羽飾りの帽子を取って挨拶した。

「これはこれは、ニー様。何のこれしき、掠り傷ですよ」

「いいえ、ランスロット。それは私が判断するの、いい？こっち来なさい」

騎士は再び恭しく頭を下げると彼女の脇に来て膝を折る。ニーが騎士の首筋、肩との付け根辺りに手をやると、中世の騎士の姿は消え、そこにはメタルが鈍く光る人型のロボットがいた。ニーは暫くそのロボットのあちこちをつつくような素振りをした後、

「ほづらね、こことここ。防壁が1層だめになってる。まとも  
に防壁破り喰らったでしょう？こういうのは掠り傷とは言わないの。ウ  
インさん、ランスロット、2日ほど預かるわよ」

「了解だ、お嬢さん。しっかり直してくれ」

「任せといて。それから・・・バズ！」

と、今度はスペンドに向けて、

「何ココソやってんの！シークレットモードにしてたって私は全  
て見えるんだからね、知ってるでしょう？」

すると今度は、スペンドの後ろに時代掛かった宇宙服を身に着け  
た宇宙飛行士が現れる。顔のバイザーを開くと、

「別に隠れちゃいないよ、ニー。俺は元気だぜ、スペンドが証明し  
てくれるさ」

役者も顔負けの気障なセリフにニーは、

「あのね、別にスペンドが証明しなくてもいいの、あんだ、今回の  
出撃でフルメンテから15回目、定期検査対象なのよ？知ってるわ  
よね、今、逃げようとしたもの」

「ニー、それは言い掛かりだぜ、逃げようとなんかしてないって・・・  
」

「じゃあ、あんだも付いて来なさい。スペンド、相棒借りるわね。

明日遅くには返すから」

「はいよ、好きにしていから、早く連れて行けって」

ニーは人型汎用思考端末パーソナル・コンピュータ・レイドロイ  
ド、製品名ピッカーのオーソリテイだった。知識とメンテナンスの  
腕も作戦課のメカニックの中ではこの歳で既にトップクラスだ。

ピッカーは通常、ID保有者のみ音声・映像が視聴可能だが、彼  
女は作戦課保有のピッカー全てにアクセス権があり、200体にも  
及ぶ全てを把握していた。

「さあ、ご主人様から許可を貰ったよ、2人とも付いて来なさい」

ニーは2体のピッカーを従えると、

「それじゃあ、又ね。時間があつたら覗くから」

「覗くつて、何を」

「あれ？スペンド、今日ので黄線でしょ？お祝いじゃないの？」  
スペンドは肩を竦め、

「単なる通過点だって。俺は金3本目指してんだから」

「大きく出たわね。まあ、いいわ。待機所覗いてごらん」

ニーは手を振ると2体を載せたホバーに飛び乗り走り去った。

「全く騒々しい娘つ子だよな、バズ・・・」

スペンドが何時もの癖でバズに話し掛けたが、そのバズはたった今ニーに連れて行かれたばかり。遣る瀬無く肩を竦めた途端。

「3番ゲートにいる総員、次が来る！至急場所を開ける！お前たちだけが仕事をしている訳ではないぞ！」

管制官の声が場内に響く。その場にいた者誰もが蜘蛛の子を散らすかのようにいなくなった。本部の発着場は1日に平均200余りの発着を捌いている。プレーン発着場やスペースステーションと違い、タイムラグの調整と実体化という厄介なものがあるのでその管制は複雑だ。管制官も必然、指示と変更を叫びっ放しとなる。

「ほら、行くよ」

あつという間に3人だけ残され、シンディはウィンとスペンドに声を掛け、彼女らに用意されていたホバーに飛び乗る。シンディ自ら運転して待機所へ向かった。

その後ろでは新たなチームが実体化していた。後ろ向きに荷台に腰掛けたウィンとスペンドの目の前で、先程の彼らと同じ手順が繰り返される。スペンドがシンディに尋ねる声は妙に平板だった。

「隊長、ちよつくら停めて頂いてもいいですかね？」

するとシンディはブレーキを踏んで右に急ハンドルを切り、見事なドリフトを見せて走路の脇にホバーを止めると、無言でスペンドの顔を見つめる。

その時には既にウィンが軍用デジタル双眼鏡を取り出し、300メートルほど離れた発着場ゲート3でのやり取りを見ていた。

「やはりね。7班の連中だ」

シンディもスペンドも自身の双眼鏡を取り出した。  
「多いな、TC（容疑者）が13・・・おっとロツクウエル隊長の登場だ」

彼らが見守る中、実体化したAD機動執行7班に彼らの整備班長が歩み寄り、指示を受ける。両手を離しても宙に浮いて保持出来るこのタイプの双眼鏡は、300メートルほどなら聴音も出来る。見守る3人の内2人は音声も拾い、熱心に会話を聞いた。それは内規違反に取られても仕方無い行為だったが3人は気にしなかった。  
「ほう、少佐は何かご機嫌だな。ウチ等とは大違いだ」

確かに彼らの上司、機動執行第2中隊を率いるガーバー少佐は満面の笑顔で7班班長に歩み寄ると握手までして、相手の肩を親しげに叩いた。対するロツクウエル大尉も白い歯を見せながら身振り手振りが忙しい。

「けつ。またぞろ歯が浮くようなお世辞の応酬か・・・何時もの事ながらよくもまああんなセリフがぼんぼんと飛び出して来るよなあ」  
盗み聞きしているスペンドは、手品のように思考制御タブレットを取り出し口に放り込む。一世紀以上昔に禁止されたシガーに代わって登場した精神安定作用のある嗜好品だが、身体に良いとの評判は聞かない。

「それより、ピッカーたちだ。ニーが何しているか見えるかい？」  
ウインが注意を促すと、2人は走路の外れで4体のピッカーを並べているニーに双眼鏡を向ける。スペンドは浮遊する筆箱のように見える双眼鏡の側面を調整して、忙しくピッカーを検査するニーが何を話しているのかを聞こうとする。

「・・・だめだ、ノイズが多くて聞こえない」  
「4体ともかなりのダメージだ。相当の戦闘だったようだな」  
「クランもやられていますよ」

ちょうどハッチからホバーストレッチャーが出て来るところで、医療班に囲まれた台の上には20代の青年が寝かされている。パッチが頭半分と剥き出しにされた左足を覆い、かなりの重傷に見えた。

「全治1ヶ月つてどこか。おい、スペンド、コリンズとエレノアが何を話しているか聞こえるか？私のは調子が悪いのか聞こえないんだ」

「あいつらヒソヒソ話してやがるから、この距離では生聞きは無理だって。俺はさつきから録ってる・・・おっと、だめになった。再生しますよ」

スペンドが宙に浮く『筆箱』を弄ると、シンディとウインの耳に今しがた7班の2人が交わした雑談が流れる。聞き取り難いがノイズと他音源を自動カットしているので何とか内容は伝わる。

『いや、久々にしんどかったな・・・』

『3倍のTC相手だもの。簡単にはいかないわ』

『クランは？』

『1ヶ月の加療だそうよ』

『全く、ピツカーたちも全台・・・これじゃあ1ヶ月は休業だ』

『休暇だと思えばいいじゃない。それにね、こいつは表彰ものよ』

『まあ、その価値は十分つてやつか。なにせ我々4人がバリーフオージの冬を守ったのだからね』

『そう思う？そう、ギリギリだね。もしもサラトガでバーゴインのイギリス軍が降伏しなかったら、いくらワシントンが生きていても冬営中に民兵を立て直す暇などないだろうからね』

『では、こいつは？』

『どこのどいつだか知らないけれど、この騒動を仕掛けた馬鹿者が考えていた本命はこっちだったってことね。4班が出動したブランデイワインは陽動でしょうね』

『いやはや・・・ワシントンを囮にするとは』

『私たちの前座にされてシンディがどんな顔するか、見ものね』

『いいや。気付いていたって顔色一つ変えないよ、あの人は。それに・・・オイ、秘話にするぞ』

会話はそこでブツリと途切れた。

反応は3人3様。共通したのは言葉を発しなかったことだが、その意味は違う。ウインは文字通り苦虫を噛み潰していたし、スペンドは表層の彼しか知らない人間が見たら凍り付くような目をしていった。シンディは眉一つ動かさず、運転席に戻る。ゆっくりと構内を走るホバーではもう、待機所に着くまでは誰も口を開かなかった。

## Episode 03・凍結湖畔の死闘

§スウェーデン王国 1920年11月(到達年月) 2374  
年05月(現在年月)

3人は完全に凍結した湖面を風速15メートルの雪嵐が駆け抜けて行くのを見守っていた。

針葉樹ばかりの鬱蒼とした森と細長い湖、全てが白く閉ざされ人を、動物を拒んでいる。僅かに生活を思わせるものは、湖から直ぐに斜面を成して自然の造った畝となる丘の上に建てられた城館と、それを越えた麓にある小さな集落だけだった。しかしそれも今は時折視界が0となる雪嵐に沈み、人の動きは見えない。僅かに城館の狭間から覗く灯りだけが白と黒の中、生き物の存在の証となっていた。

「しかし、あいつを狙って何の得があるかなあ」

スペンドは目の前の光景に顔を顰めていた。寒いのが大の苦手なのだ。

「私も詳しくは勉強していないが、彼は20年後にドイツの命運を担うのだろうか？今でもそれなりに有名人だが、数年先にはもっと有名になり人目に付く。だからTCの奴らはこんな場所で狙うのではないかな」

「正義漢ぶるなら、あのオデブさんより先に片付けなきゃならないのがあるでしょうに、今頃ミュンヘンでスパイの真似事をしている御仁が」

「ちょびヒゲの男のことかい？まあ、あつちは常駐巡回がばつちり監視しているし、それをTCも知っているだろうからね。それにあの男を殺したってこの時の情勢では第2、第3の独裁者が現れるはずだって教えられたがね。それに、オカルトに属する話もあるよ。」

君は経験がないかも知れないが、私はあの男を救うミッションに3回ほど参加した。妙なことに我々が何かする前に何故かTCの連中にトラブルが発生する」

「聞いたことがあるよ、旦那。仕掛けた爆弾が機能不全になる、保護対象が突然『ゲームブック』と違う道順で移動する、マシンが作動不良を起こす、ピッカーが暴走する・・・」

「そういうことだ。何もあの男に限らない。私の先輩、ナポレオンもそうだし、そうそう、エンリケ航海王子など、狙う機会は星の数なのに一度として成功しないそうじゃないか。こちらが間に合わないタイミングで駆けつけたら勝手にTCがのびていた、何てこともあつたらしい」

スペンドは吐息を吐くと、

「そういうのも歴史の修復効果の一環なんですかねえ。先行して直す、とか。それにしてもそういう運のある奴に限って悪役だ、っていうのもどうだかな」

「歴史の防衛効果、と呼んだ方が近いのかな？それとスペンド君、ドサクサ紛れにナポレオンまで悪役にしないでくれたまえ」

「あれ？悪役じゃないの？ヨーロッパ全体から見たら彼のやったことはちよびヒゲの男と変わらないよ？」

「しかし、英雄と呼ばれているだろう？誰もヒトラーを英雄とは呼ばないだろう？」

「『英雄、人を欺く』ってね」

「中国の詩人だったか、そんなもの引つ張り出さなくても・・・」

「じゃ、これなんかどう？『悪にかけても善にかけても英雄がいるま』。これは旦那の先輩の言葉だよ」

「ロシュフーコーだろ？分かったよ、君には叶わない」

ウィンは両掌を上に向けてお手上げのジェスチャーをすると、これはシンディに、

「で、『ゲームブック』の予測ではそろそろだが、本部はまだ何も言っ来ないんだね？」

「ああ、まだだ」

シンディは相変わらず独り離れた場所において、荒涼とした湖の様子を伺っている。この何処かにTCがいて、彼女たちと同じく保護対象（TCにとってはターゲット）を待っているはずなのだ。しかし実体化前の捕捉は海原の針一本の例え同様に不可能と言って良い。だからこうして相手が動き出すまで待つしかない。それに今回のミッションは緊急出動ではなく・・・

「ソースは明かせないが、ある人物が狙われている、こちらの指示通り行動して貰いたい」

スペンドは彼らに指示をしたある上官の口真似をして、

「ワシントンの時もそうだった。ったく、上の連中、一体何考えているんだか・・・」

「おっと、スペンド。口を慎むんだね。それ以上言うと抗命ととられても仕方がない」

両手で抑えて・抑えて、とやるウインを睨み付けると、スペンドは何時ものように指先に思考制御タブレットを挟むと口に放り込み、バリバリ音を立てて噛みしだく。

「今回は『ゲームブック』も完璧じゃないし、予測不能の因子つてのが多過ぎる。大体、保護対象Bの素姓すらはつきりしてないじゃないか？」

「私に怒っても始まんよ、スペンド。それにあの男の『正史』には不明な部分が多い。特に大戦が終わってからミュンヘンに現れるまでは空白だらけじゃないか？情報部を攻めちゃいかんよ。彼らも精一杯仕事をしているのだからね」

作戦部一筋のスペンドと違い、ウインは情報部で2年ほどデスクワークを経験している。膨大な真偽様々の情報から『正史』を取り出す仕事の困難さを彼は知っていた。

『ゲームブック』とは過去の様々なソースと独自の「現地調査」で得た事実を積み重ねた正史の記述だ。主にライブラリー用に作ら

れた年毎に編纂した年記分冊と、史上の重要人物、TPで言うところの『ファンクションキー』毎に纏められた人物伝記がある。

重要ポイントに配置される情報部の駐在、半常駐の捜査員エージェンツからの至急報や、TPとは別の国際協約機関、時空監視センターからの亜空間侵入警報などから出動することが多い彼ら機動執行班が頼りにするのは自分たちの忠実な相棒、ピッカーとこの人物伝記ゲームブックだった。

そこには保護対象の歴史が記載されている。とは言うものの、判明している細部は漏らさず記載されているが、自ずと限界はある。何年何月何日、何時何分何十秒と、分かっている範囲では対象のトイレの回数まで記録があるが、分からなければ、最も可能性の高い行動予測や信用性が比較的高いと思われる風評が載っているだけ。つまりは、保護対象の大体の行動は分かるが後は現地で臨機応変、これが機動執行班に求められているのだ。

もう一つタブレットを口に放り込んで黙り込んだスペンドを見てウィンモ口を閉じる。スペンドは1ヶ月前の『ワシントン救出』の一件以来どこか機嫌が悪い。別に当り散らす訳ではなく、口数が多少少ないのと上層部批判が増えた位だが、普段、我関せずの態度からは大きな違いだ。

あの日はあれから待機室でスペンドの黄太線（逮捕執行50回）祝いのサプライズパーティーが開かれ、機動執行課で仲の良い隊員や整備や総務の人間に囲まれ、楽しい一時だったのだが、お開きになるとスペンドは珍しく早めに自室に帰り、それ以来、何か考え事をする様子が垣間見える。

その日から今日まで出動は4回。全て待機中の緊急出動で、内3回は観光目当てのブラックツーストだったり、TPに察知されたのに気付いたのか相手が出現しなかったりと楽な任務。ごく平穏な毎日だったと言えるのだが、それが却ってスペンドに考えさせる時間を与え、何時までも引き摺ることになったようだ。

そろそろ何とかしないといけない。シンディはそんなスペンドの

様子を横目で見て眉を顰める。どこかに心を置いていると、僅か5から10分程度の実体可能時間でケリを付けなくてはならない彼女たちの仕事では大きなミスに繋がりがかねない。それは自分の安全だけでなくチーム全体の問題でもある。

それに・・・この2週間ほど4班には休みがなかった。

4班と同じ日に出動し、正史的にはその8日後に現着、第一次サラトガの戦い（フリーマン農場の戦い）に介入しようとしたTC傭兵と死闘を演じた7班はまだ一線に復帰していない。

しかも年に2度の長期休暇リフレッシュに当たる6班と11班、そして大掛かりな組織的時空侵犯事件を引き起こした首謀者がマシンを操って逃亡中のため、5つの班が情報部のエージェントと共に専従追跡活動をしていて、今や16班あるAD機動執行班は半減の8班しか動いていない。中でも4班はエース中のエースとして常に当てにされる存在で、待機所詰めも通常の倍近くに伸びていた。

この2日ほどはTCの出没が頻繁になっていた18世紀巡回警備班ヘレンタルされ、慣れないパトロールをさせられている。今回の出動も緊急要請で19世紀から直接急行して来たのだ。

これらが精神的にも肉体的にも負担にならない訳がない。もちろん精神疲労も肉体疲労も薬で対処出来る。医療班から疲労回復に優れた効果のある各種タブレットやアンブルが出ているし、長時間待機を強いられた後はリラクゼーション施設と強制睡眠療法で精神疲労を回復してはいる。だが、たとえ医療や健康推進で効果が実証されようとも、彼女たちも生身の人間である。健常でいられる時間は確実に短くなり疲れやすく睡眠不足になり勝ちな状態に陥っていた。

「スペンド」

「・・・何ですか？」

シンディから声が掛かるのは任務中といえども珍しい。それで一瞬返答に間があったスペンドだった。

「あなた、これが終わったら2週間休みなさい」

「え？何のこと？」

「休暇を申請する。私かね」

シンディは呆気に獲られたスペンドの目を捉え、

「班長チーフが休養中、班は自動的に休業する。規則にはそうあったと思っただが？」

「そうだな。その通りだ」

ウィンは考え込むように腕を組んで、

「こここのところ、ちょっとばかり忙しかったからな。来週には11班が休暇明けだ。代わって貰えばいい」

「しかし」

「しかしは、なしだスペンド」

シンディはにべもない。

「理由は自分自身が一番よく知っているはずじゃないか。それに・・」

スペンドは我が目を疑う。反論しかけた言葉が消えた。

「本当は私が休みたいのさ。ここ2年、ほとんど何も考えずに仕事をして来たからね。総務が休めと煩かったから反対はされないだろうよ」

よく話すシンディは珍しい。しかしそれ以上にスペンドにとって珍しかったのは、微笑とはいえ笑顔のシンディだった。陰口の通り彼女の笑顔は一緒に行動する彼ですら殆んど見たことがなかったのだ。が、それも長くは続かなかった。その顔が吹き消される口ウソクの炎のように無表情に変化する。

「見ろ！」

シンディの指差す先。降りしきる雪の中、黒い森の中に輝くものが見える。

「来たな」

思わずスペンドが腰を浮かす。実体化因子の輝きは赤味掛かっている。まるで沈む夕陽のようだ。

「2名。少ないな」

「シンディ？」

と、これはウイン。どうする？と問い掛けている。

「事前偵察に見える。様子を窺った方がいいけれど・・・」

「賢明だね。後から少なくとも2、3人は・・・シンディ？どうした」

シンディの顔は例の無表情。だが、彼女の眉間に微かに現れる皺を認めたウインが問うと、

「・・・本部からだ。実体化し、様子を見て拘束せよ」

「なんだって！」

スペンドはほとんど驚きの表情でシンディの顔を見つめる。ウインも腕組みを解いたのは不服と言えないまでも「意外」の表明だ。

「残りのTCが見ているかも知れないのに姿を晒すんですか？」

「スペンド」

シンディは驚いた顔に穏やかに声を返す。

「命令。実体化し、偵察、後にTCを拘束する」

暫く視線と視線が絡み合う。4つの目が感情を伺わせない焦茶色の目を見つめるが、直ぐに、

「了解」

と、これはウイン。スペンドは目を伏せてから目の前の湖を見やり、やや遅れてロジャ、と呟く。シンディは表情を動かさずに頷くと、

「距離およそ300、か・・・ここなら相手から見えないな」

彼女たちが見下ろしているのは、丘に向かつてうねる様な起伏が上って行く林の中。窪地の陰で実体化すれば相手からは見えないだろう。

「クイーン。ポイントはここでいい、開扉用意。タイマーを第二規制10m00sに設定。アラートもセット」

「了解しました」

彼女は『天』からの声に頷くと2人に、

「いいかい？」

「何時でも」「いいですよ」

並ぶ返事に答える代わりに、彼女は声を張る。  
「クイーン、開扉しろ！」

§ 同地・同年紀同日 19 分後

仄かに藍色の光が感じられるだけで、そこは穴倉のような場所だ。

気を失っていたのはほんの数分間だったようだ。気が付くと目の前にバズが佇んでいた。しかしそれはスペンドの見慣れたバズの姿ではない。3次元擬装を停止して、無骨なメタルの身体を晒している。その身体も無数の打痕や擦過痕と焦げ痕だらけ。脚は両方とも亀裂から迸った潤滑液が流血のような跡を付け、右腕に至っては肘から先が切断されている。

「おい、大丈夫か？」

バズが身体を軋ませ、彼の横たわるシートを少し起こした。

「・・・大丈夫かって・・・お前こそ無様だな」

「ああ、ちよつとな・・・スペンド、こいつを。さっきの人が応急手当はしたが、直ぐに痛みが戻ってくるからな」

バズは左手で持っていた鎮痛剤のアンプルを、片手で器用に千切ってスペンドの鼻の前へ持って行く。スペンドは顔を顰めながらも深呼吸を4、5回、気化した薬液を吸い込んだ。

「痛みなど判らないくせに・・・まあいい、ありがとう」

スペンドは次第に身体に染込む吸入アンプル剤の効果を、武者震いのような震えで感じ取る。目を瞑り、暫し頭を整理すると、まるで数時間前のように感じるが僅か10m前までの出来事が浮かび上がる。

(シット！酷いもんだ・・・皆はどうしただろう?)

スペンドは鈍く痛み出した脇腹や脚を無視する。間もなく鎮痛剤

が効いて来るはず。それにしても・・・  
(・・・あれは誰だ?)

§ 同地・同年紀同日 19 分前

実体化因子輝くゲートをすり抜けた3人は、吹き付ける雪に顔を顰め、フェイスガードをきっちり当て直すとカーボンステイクを構え、油断なく森の中を進み始めた。窪地の縁からそつと覗くと、程なくTCを視認する。2名のTCは光学迷彩スーツで見え難いものの、生体送受信チップ(マイクログ)を通して熱線感知センサーが追尾する情報が視覚化され、その姿は白い雪の中、淡く輝く亡霊のように映っている。ゆっくりと湖畔に向かって歩いていく。

雪はそれほど深くなく凍て付いていて、踏んでも表層のパウダースノーだけが剥げ落ちる。音を立てぬよう気を付けながら歩くが、滑り難い擬似ゴム素材で出来たブーツの底でも足元が覚束なくなりそうだった。

対象Aこと元ドイツ帝国陸軍の飛行将校、ヘルマン・ゲーリング大尉がまもなく緊急着陸することになる湖。ゲームブックによると、彼はこの雪嵐で機位を失い、燃料も乏しくなったため目的地に向かうのを断念、緊急着陸が出来そうな場所を探しこの湖を見つける。完全に凍結していて長さも十分、軽い曲芸飛行仕様のハンザ・ブランデンブルグ機なら簡単に着陸出来るこの自然が造った滑走路に降り立つこととなる。

それにしても、とスペンドは思う。こんな結構な天候に、帆布と木材をワイヤーで括っただけの代物で空に飛び発つとは余程の阿呆だ。勇気がこんな馬鹿げたことで示される時代とはいえ、直前の戦争を生き残ったと言うのにオメデタイこと甚だしい。

(いや、いつその事、ここで死んで貰った方が世界のためだな)

スペンドは上司たちが聞いたら卒倒しそうな不遜なことを考え、弄ぶ。大体、この後ナチスのナンバー2に上り詰めることが分かっているファッティ（デブ）を何故助けなくてはならないのか？

もちろん、スペンドはその答えを知っているし、理解もしている。例えば心情的にどうであれ、そう、無垢の人々が、それも数百万単位で死ぬことになる原因の一端を担う男であろうとも手を触れてはならないことを。

彼は幸いにもこれまではそんな『げんなりする』任務に就いた試しがなかった。だが、その運も今日で終わつたと見える。逆の見方をすれば、それだけに信用されているとも言えるが、そればかりはどうしても『信用』出来ないでいるスペンドだった。

シンディはTCが湖畔に近い倒木の陰に消えると手を挙げて2人を止め、振り返って指のサインでウインを左手、スペンドを右手へと分ける。そうしておいて右手を示し、5本の指を立てると握つて下に引き下ろし、自身はその場に伏せた。意味を読み取つたスペンドは右手の森、針葉樹の枝が重なり折れて吹き溜まりになった場所に腹這いとなる。ほぼ同時に左手20メートルほど離れたウインも身体を沈め、彼の視野から消える。

「確認する。TCは前方150メートル、7時の方向から湖に向かって伸びる倒木の辺り。2名」

マイクロタグを通してシンディの声が耳元で囁く。開発当初はテレパシーの実現と賞賛されたこの技術も、既に1世紀前の技術だった。

「何か意見は？」

「特になし」

と、これはウイン。

「ここで待つんですかね？」

と、これはスペンド。

「だろうな。クイーン、本部に送信。本文。TC2名は対象Aの上陸ポイント付近にて待機の模様。以後の指示を・・・回避しろ！」

最後の指示はピツカーを含む全ての者に発した警告だった。全てが一瞬の内に始まった。

スペンドは本能とも呼ぶべき判断でスティックをマシンガンモードにし、後方90度の扇状にビームを拡散、『敵』の動きを封じようとした。しかし相手の方が先手を取った分2秒は早く、彼がスティックを向けた時にはプラズマ弾がスペンドの左50センチの樹木に当たり、木片と熱風が彼を襲っていた。

しかし、彼は絶望的な状況で幾度も自分の命を賭つて来た男。普通の人間なら怪我を恐れて思わずたじろぐところ、咄嗟に硬い地面へ身を投げ、熱風と木片の大半をやり過ごす。

「バズ！」

しかし相棒からの返事は無い。バズはバズでピツカー同士の戦いをしているのだ。彼らはそれぞれの相手と単独で戦うしかない。

(バズ。やられるなよ)

彼は貴重な一瞬バズに思いを馳せると、すぐさま身を起こし走り出した。状況を確認しようにも、次から次へと彼を狙うプラズマ弾に対処するのが精一杯、伏せるのを諦め、全速で木々の間を走り抜けることにしたのだ。

(どこかで形勢を立て直さないと直にやられる。ほんの一瞬でもいい、状況を見極める時間を得なくては。スティックを構える時間もないのは、まずいな。やはりピツカーがいるといたいのでは・・・) 次々に浮かぶ雑念。それは彼をこの窮地から生まれる敗北の予感、諦めと絶望感から遠ざける。

彼を狙う敵、それは紛うことなくTCだが、総勢10名は下らないであろう彼らの内、スペンドを追って来たその数は3。彼を中央、シンデイの方向へ追いやろうと向かって左側に射線を集中したのはプロの仕業。普通はそんなことをしなくとも3人集まろうとウインは左、スペンドは右と中央に寄ってシンデイと合流したはず。左を狙いシンデイとの連絡を可能とし隙が出来た、そこには何か意味が

ある。スペンドは咄嗟に逆らい射線が集中した左へワザと走ったのだが、木々を抜ける間に追いかけるプラズマ弾も激しさを増し、遂には連射のビームに変化、これは敵の焦りを意味しないか？ならば、敵は逆を突かれたのだ。

その時、彼は漸く『ひと息を付ける場所』を見つけた。彼の走る方向30メートルやや左前方に大地の切れ込みが見えて来る。密生する針葉樹がそこで途切れ、それは湖へ流れ込むか流れ出すかは分からないが小川のはずで、正に自然が形作る塹壕だった。この季節では凍結するか涸れているはず。激しさを増すビームに左右の木々が焼かれ、焦げくさい臭いが漂い出している。

(TCの奴ら、お構いなしだな)

射撃に容赦は感じられない。プラズマ弾は出力を可変出来るが、この様子では最大出力、<sup>フルスベック</sup>当たれば致命傷を負いかねない。フルスベックはTPでは禁じられている。TCの連中は彼を殺す気でいるのだ。これは非常に珍しい。

『過去』では双方動員は限られ、実体化も様々な要因で制限されるため、TPとTCが本気で殺し合うことなど滅多にない。大体、戦争ではないのだ、殺しあうことが目的でもなく、何の意味もない。TCにすれば少しの時間(実体化可能な僅かに最長10分間)TPの動きを止めればいいのだ、殺すことにより厄介事が増えはしても彼らの仕事が楽になどならない。

TPが活動を始めておよそ半世紀が過ぎたが、その間、事故を除く殉職が十数人だ、ということが普通の犯罪者と警察・公安との関係との違いを表す。TCにしてもTPにより止む無く殺害されたのはたった8人に過ぎない。ただしこれらの数字は24世紀の高度に発達した医療抜きには語れないが・・・

スペンドは小川に辿り着くとその岸に倒れていた朽木を飛び越え、短い斜面を滑り落ちた。そして漸く全てが仕掛けられていたことに気付く。

(シット！なんて愚かな・・・)

小川は想像通り涸れていて雪に覆われていた。しかし、そこに歓迎されざる者たちが待っていたのは想定外だった。TCは最初からこれを狙っていた。

わざとセオリーに逆らえばスペンドは深読みし、シンデイへ向かうのではなく逆に離れること、分散することで各個に対処しようとする、そしてその先に遮蔽物があれば迷うことなく飛び込むこと、飛んで火に入る夏の・・・

「ステイックを離せ、手を上げる」

小川は湖に向けて緩やかに下っている。彼はその真ん中に立っていたがその左手、10メートルほど小川の上流に光学迷彩スーツを着た男が2人。そのうち一人が手を差し伸べている。フェイスガードで顔は伺えないが、声は明瞭に届く。

「さあ、余計なことを考えるなよ、囲んでいるからな」

全くその通り。右手の湖側にも2人、向かい側の斜面の上から見下ろす1人、そして後ろから追い付いた3人。当然見えないがピッカーもいるはず、どう考えようが全く勝ち目はない。

「ないはずなのだが・・・」

「ほら、急げよ、そんなに時間もないからな」

そう、相手側にも時間がない。間もなく対象が現れるし実体化時間も限られる。こちらの実体化時間。残り・・・4m58、57・・・  
・スペンドはゆっくりと屈み込む。スペンドの動作は正にステイックを置くかに見えた。TCが僅かに構えたステイックを下げた瞬間。

「馬鹿な！」

思わずTCの一人が叫ぶ。

スペンドが思い切りジャンプ、向かい側の斜面に取り付く。と、足を滑らせるが踏ん張り、そこを駆け上がる。TCは不意を突かれた一瞬、手を拱いたがすぐさまプラズマ弾を発射する。しかし、スペンドにはその1秒が貴重だった。

「この野郎！」

スペンドは叫びながら向かい側斜面の上から見下ろしていたTCに飛び掛る。周りでプラズマ弾が掠め、炸裂し、熱風や土塊、木片などを浴びせるが無視、スティックを警棒のように使い、構えた相手の腕を薙ぎ払う。

スペンドが味方との格闘に持ち込んだため、TCはスティックを撃つことが出来ず、2人が倒れ込む斜面の上へ殺到する。

（ありがたい、ピッカーが介入して来ないな、まだ連中同士で遣り合っているのか。こいつを振り払って、この先へ。あと3mほど逃げ延びれば制限時間、アラートを設定したので実体化は緊急解除され、俺はマシンに強制収用される・・・なんとかこいつを倒して先へ・・・）

次の瞬間、彼の動きが一瞬弱まる。ほんの0.01秒の躊躇。

（こいつ女か）

途端に肩へ激しい一撃。咄嗟に女を放し、回転して地面を蹴る。そこへさらに一撃。追い付いた2名のTCが代わる代わるスティックを打ち下ろす。

痛みに顔を歪め、スティックで相手のスティックを受け流す。鋭く高い、刀が打ち合う時のような金属音。中世期の日本の戦闘の如く、立ち上がったスペンドはスティックを振り上げ、薙ぎ払う。腕に伝わる鈍い衝撃と共に相手のスティックが宙を舞い、空かさず相手の鳩尾目掛けスティックで突く。相手は妙な声を上げるともんどりうつて倒れた。その瞬間。

眩い光と衝撃音、そして信じられないほどの痛みが左足を走る。勢いで1メートルほど飛ばされた彼は空を見る。まるで宙に浮いていて、灰白色で深く低く、手を伸ばせば触れられそうな・・・そこを雪が舞う。そして、黒く大きく猛禽のような・・・

（ザマはないな、奴ら間に合わない）

咳き込むようなエンジン音がか細く聞こえ、原始的な飛行機械が今一度旋回してくる。降りられるかどうかを確かめる前大戦のエンジニアが身を乗り出して下を見ているのがほんの一瞬見え、再び視野が

ら消える。身体全体が痺れているようで、だるい。目を閉じ浅く呼吸を繰り返す自分を感じる。

(これで奴らの計画はむちゃくちゃだ・・・それにしても俺は何でのんびり空なんか見ているんだ？それに奴らはどうした？どうして止めを刺しに・・・)

「おい、大丈夫か？」

落ち着いた若い男の声だった。歳は彼と幾ばくも離れていないだろう。直ぐに彼の視野にフェイスガードが現れる。

「ああ、見えているね、意識はあるか。アラートは解除させてもらった、手当てが先だ。心配するなよ、直ぐに収容するからね」

重くなりつつある頭を傾げると、2名のTCが折り重なるように倒れている。他のTCもこの男一人で倒したのか？男の顔はフェイスガードに邪魔されて分からない、が身に着けた防寒光学迷彩スーツは彼が着用しているものと同じTPのもの。階級章が・・・大尉・・・所属・・・『00 023』。

(・・・00、だと?)

「・・・あいつ等を・・・」

「喋るな、酷くやられているからね・・・おい、悪いが少し痛いぞ」  
男は彼の足と肩にパッチを当て、左腕を取るとバトルスーツの上から救急キットの増血剤と安定剤のスピンドルを打ち込む。急速に身体へ浸透する薬剤の衝撃的な痛みにスペンドは何かを叫んだと思つた瞬間、気を失った。

§ 同地・同年紀同日25分後

彼は左足の裂けて千切れた防寒バトルスーツから覗くパッチに顔を顰める。鎮痛剤のアンブルは嗅いだか、この傷だ、数時間で効果は切れるだろう。パッチを貼られる際に見ていたが、プラズマ弾が

掠った後は肉がごっそりと剥ぎ取られ、黒く焼け焦げている。白い骨が見える位だが、ありがたいことに折れてはいない。後は左わき腹が吊ったようになっていたが、これも骨は折れていない様子。無数の打ち身や裂傷は無視する。

「だから何度も防護インナーを装着しろ、って言ってるのにな、スペンド」

すぐ隣から声がある。皮を剥いだ金属製の人体模型、といった感じでバズが直立している。

「次にあんなことが起きたら俺は保障出来ないぜ」

「何ほざいてやがる、バズ。お前になんか保障して貰わなかつて・・・それにお前も同じようなザマじゃないか」

スペンドは拳を振り上げ、左隣の空を殴るが、わき腹に鈍い痛みを感じ、それ以上大きく動くことはなかった。感覚を鋭敏に残したまま痛覚だけを麻痺させる吸入アンプル剤を使ってもこの痛みだ。やはりわき腹の筋も傷付けたらしい。

「あれはこの厚着の下に付けると締め付けがきつくて動き辛いんだよ・・・」

スペンドの声は語尾が掠れて消えた。

「ほら、寝ているって。どうせ救助されるまでする事がない」

「バカいうな。皆がどうなったのか知らなくちゃならない」

バズの声は少し怒っているように変化する。

「そのままお返しするぜ、オオバカ野郎、大人しくしてないと殴つても寝かしつけるぞ！」

「この・・・おせっかい焼きのピッカー野郎が・・・」

しかし言葉とは裏腹に、スペンドは大人しくシートに凭れ目を瞑る。バズの言う通り、今は何も出来はしないのだ。それにしても・・・

「バズ、お前はもうしたんだ？」

「話せば長いぞ？まあ、時間はあるか・・・」

バズはどこかの接続回転軸でも歪めたのか、動く度に金属の擦れ

る軋み音を立てる。泣く事が出来ないバズの泣き声か……。鎮痛剤は判断力を鈍らせないタイプのはずだが、スペンドは目を開けると何か感傷的にバズを見つめた。そんなスペンドを知ってか知らずか、バズは感情の表れない擬態の抜けた機械の顔で語り始める。

「敵TCは18名ほど、ピツカーは10体いた。ボスが警告しなかつたら完全にやられていただろうな。済まなかったが事前に察知出来なかった。アンチ・ピツカード・サイクルAPCを仕掛けやがって。あいつらがそんなもの使うなんて初めてじゃないのか？お陰で少々手こずったが……」

「TCがAPCだって？」

「ああ、何時仕入れたんだ奴らは？俺たちの専売特許じゃなかったのか？まともにAPCを喰らったのは体験学習以来だったな。全く胸糞が悪くなるぜ、全身麻痺状態で一方的にやられるんだからな」

「俺たちは何時もその手でTCに対して来ただろ？そろそろ相手も同じ玩具を<sup>ガジェット</sup>用意したっておかしくない。今まで相手のピツカーはお前と同じ想いだったろうよ。それにしても、よくその程度で助かったな？」

バズは機械の身体で肩を竦めると、

「最初の一撃を喰らったところで、クイーンが自壊モードにして束縛から抜けた。全く恐れ入るぜ、勇氣あるよな、彼女は。そうしておいてこちらからもAPCを発動したのさ」

仰向けにシートに横たわるスペンドに、バズはピツカーたちの戦いを語った。

APCを伝播されるとおよそ20分、仕掛けられた側のピツカーたちは実体化出来ず、動けない。亜空間での亡霊状態ゴーストのままです。そこを相手側の亜空間に侵入したピツカーが物理的な方法、たとえばバズのようなTP仕様のピツカーなら両腕に仕込んであるカーボンスティックを使ってプラズマやビーム状態の電磁波を浴びせる、ストレートに殴る、蹴るなどの方法で意のままにする。

ところが、そうなる直前にクイーンが自壊モードを作動させ、自

らの身体を破壊するという奇策に出たのだ。クイーンは『脳幹』と『身体』を切り離し、単なる『人工電脳』<sup>コンピュータ</sup>の拠点として敵と渡り合おうとした。身体を捨てたことにより『呪縛』が解け、自動的にキヤッシュをリセットし再起動された電脳はAPCの支配から外れた。そこでクイーンも相手に対しAPCを発動し、互角へ持ち込んだのだ。

クイーンらの亜空間に侵入していたTCのピッカーたちもその状態でフリーズ、『彼ら』もゴーストのままその場で戦わざるを得なくなる。

勿論、ゴーストと化し動けなくても相手を『視認』し『攻撃』出来る。僅かに機能維持のためAPC発動下でも働き続ける電脳の一部を使い、いわゆる電脳戦を仕掛けるのだ。

こうしたゴースト同士の戦いは21世紀初期の古いゲームのように、お互いの思考の中、擬似3次元空間を偽像<sup>アイコン</sup>として移動しながら微弱電流を武器として相手の脳幹や身体を狙う。通信回路や遠隔制御回路のポートを通して相手側に致命的な量の弱電流を注ぎ込み、電脳や諸機能を焼き切ろうとするのだ。

クイーンは敵から真っ先に狙われる。先ほどAPCを発動したため、体内には最低量のバッテリー残量しかない。こうなると脳幹にある非常用のマイクロバッテリーは機能維持活動以外に振り向けることは出来ない。本来、ピッカーの無制約な活動を保障する水素発電ターミナルはクイーン自身が壊離した『腰』にあるからだ。

スクラップと化したコンピュータと言ったところのクイーンを、バズやランスロットが敵の攻撃から守った。弱電とはいえ、ゴースト状態では何万ボルトの高圧電流に匹敵する威力を有する。防壁を破られれば軸や筋を吹き飛ばされ、焼き切られることになる。

「クイーンやランスロットはどうしたんだ？」

「判らない。さっきも言ったが俺はクイーンの脇でTCの攻撃を防ごうとした。先手を取られているから防御一辺倒だったが・・・3

体ほど防壁を焼き切つてやったところでこつちも腕を吹っ飛ばされてね。どうやら同時に脳幹に侵入されたらしい。どうもその後のことは覚えていないんだ。ああ、俺の頭を調べたってだめだぜ。記憶野にも何も残つてないからな。スペンド、あんたと一緒だよ、気付いたらあの人がいた」

「あの入？」

「あんたも助けられたんだろう？本部の大尉さんだよ」<sup>ゼロゼロ</sup>

落ちていた若い男の声。彼のアラートを解除し、重傷を負つたままマシンに強制収用されないようにした。歳は彼と同じ位・・・階級章・・・大尉・・・所属、00 023。

「そうだ、彼はどうした？」

「知らない。俺は気が付いたらあの大尉さんの『<sup>アイコン</sup>偽像』が見下ろしていて、その時には回りには誰もいなかった。APCも解けていて、マシンへ行け、そこにあんたがいる、つてね。大尉さんは俺に、任す、と言つて消えたよ」

「そうか・・・大尉は確かに00、だつたんだよな？」

「所属か？3次元映像の『吹き出し（キャプション）』に『00 023』と出ていたな」

スペンドはうんうん、と熱心に頷くと、

「あの人の右肩横にそいつを見た気がするんだな・・・00は長官の取り巻きだつて言うのは知ってるが・・・教えてくれ、お前さんのその素晴らしいオツムで。00 023つて言うのは何処だ？」

するとバズは、

「いいのか？腰を抜かすぞ」

「見ての通りもうとつくに腰は抜かしてるよ、悪いがな。さあ、何処だよ」

「長官直属・特別査察官」

「023が？」

「09 224が俺たちだ、というのと同じ位に正確にな」

「たまげたな。00の連中を見たのも初めてなのに。なんでそんな

人間がこんな現場に？」

「それを俺に聞くかな？一介のロボットに過ぎない俺に？」

「都合のいい時だけ人形になりやがって・・・まあいいさ、面白くなつて来たじゃないか？」

§ 同地・同年紀同日24分前

「だろつな。クイーン、本部に送信。本文。TC2名は対象Aの上陸ポイント付近にて待機の模様。以後の指示を・・・回避しろ！」

シンデイの警告と同時にプラズマ弾が彼の背後から4、5発。

熱風が伏せたウインの被る略帽を焦がす。炸裂と何かの破片。再び熱風。うまくかわしたはずがこの熱量。相手はTCだろつがなんだろうが知らないが、ステイックのエネルギーゲインをフルスペックにしている。ステイックは普通、ウインたちTPのようにミドルスペックにして火傷か破裂の際のエネルギー放出で吹き飛ばすくらいを狙う。フルスペックで当れば身体はプラズマごと持って行かれるか、当たり所によっては松明のように燃え上がること必至。

(おいおい、本気か?)

ウインは歯を剥き出す。瞬間、そのまま6時へ、シンデイの方へと走る。ボワツ、ボワツ。間違いようのないステイックのプラズマ発射音。複数。ウインは雪と泥で得体の知れぬぬかるみとなった地面に滑り込みながら、横目で敵を見る。掠めるプラズマは4つ。最低4人の敵。上等じゃないか。

「ランスロット！」

返事はない。敵のピッカーとの戦いが始まったのだろつ。シンデイが応射するのが見える。大胆に立ち上がりフルバーストのビームで叶う限りの範囲をなぎ払う。ありがたい、敵の頭を抑え、ウインやスペンドが近くに寄る時間を稼ごうというのだ。早速利用させて

もらおう。迷うことなく立ち上がると中腰で木々を縫い、シンデイのところへ、10メートルほど先の窪地へ。

敵が撃つ。シンデイは危ういところで窪地に伏せる。追い駆けるように撃つ敵の数が増え、走るウインの左右両側にも着弾する。

一発が彼の直後に着弾し、破裂の風圧でウインの身体が浮く。素早くスティックを負い皮で腕に引っ掛け、身体を丸めて一回転、大柄の身体からは信じられない猫のような身軽さで両足を踏ん張って着地、滑るブーツから泥がきれいな放物線を描いて弾かれる。

そのまま窪地へスライディング、背中へ回ったスティックを引き寄せ、シンデイの脇に倒れ込みながらプラズマを1発、最も発射焔の多い真正面へ放つ。

「お待たせ」

シンデイの横で何時もの調子で話し掛ける。視線は敵の動向を探るのに忙しい。

「スペンドは？」

「いや」

ウインは了解、とだけ言って、敵の射撃に隙が出来たのを幸い、もう1発プラズマを撃つ。

「そこまでにしよう、様子を見る」

タグを通してシンデイの声が耳に届き、ウインは身を伏せ、敵の挟射を上方にやり過ぐす。

「確かに、寄せて来ないな」

「我々の頭を抑えるだけのようだ」

とつくに交互援護で押し寄せて来ても良いはず。こちらは今の所2人、敵は最低でも8人。ここに釘付けを狙っているのか、はたまた増援を待っているのか。前者だとしたらプラズマのフルスペックはエネルギーの無駄使い、後者としたら4対1のくせに随分慎重だ。それともこちらが「ブラックダイヤモンド」だと知っての行動か？  
光荣じゃないか。しかし、何かがおかしい。

「時間まで抑えて追い払う気か？」

「さあな」

その時、何処かで破裂音が複数。こちらと対峙する敵ではない。となると、スペンドが一人、この近くで戦っているのだ。

「スペンドの奴」

「ああ」

今はお互いそれだけ。どうしようもない。

(死ぬなよ、スペンド)

「後・・・4m15。本部は何と？」

「クイーンが使えなかった。敵襲、とだけ伝えたと思うが確証はない」

「ではミッションを放棄して撤退かい？」

するとシンディの苦笑する声。今日の彼女は珍しく人間味に溢れている。

「そうするしかあるまいが・・・しかし、敵も無理だな」

相変わらず同じ位置からプラズマをシンディたちの頭上に放つだけの敵。プラズマ弾の破裂音の間、最初は途切れ途切れに、やがて連続した甲高いエンジン音が響く。ウインが仰ぎ見る。最初は横殴りの雪に紛れ見えなかったが、風のいたずらで空の一角からほんの一時雪が消えると、白い空を背景に黒い無骨な飛行物体が掠めた。

「来たか」

対象Aことゲーリングは、曲がりなりにも戦争を生き抜いた男だ。それも22機撃墜のエースとして。地上に見える交戦の様子など飽きるほど見ているはず。ならば、事情が判らずとも、触らぬ神に祟りなし、戦闘の気配が見て取れるこんな場所に降りようとはしないだろう。

「しかし、奴さんが降りて来ないとすると、正史通りでなくなる・・・奴はここに不時着し、対象Bこと将来の夫人、カリンと出会う、あの城館で・・・それを阻止するのが奴らの目的かな？この状態を演出し奴さんが降りて来られないようにして」

「そのはずはないよ、ウイン、手間が掛かり過ぎだ。あいまいな要

素が多過ぎる」

シンディも眉を顰め考える。全く何かがおかしい。彼女らの持ち時間も3分を切った。空に行くゲーリングが降りて来るとしたら、もうシンディたちには助ける時間がない。もしもあの男がそこまで愚かならば、だが・・・しかし、そのままかが起きようとしていた。「シンディ！」

「ああ。分かっている」

エンジン音が咳き込むように途切れ、再び唸っては消える。ゲーリングの乗る曲芸仕様のハンザ・ブランデンブルグ機は極端までに装備を外し軽量化を図っているはず。何か機体に損傷を受けたのかも知れないし、この雪嵐でエンジンがいかれたのかも知れない。

2人が仰ぎ見る中、不安定に吹いては止み、左から流れたと思ったら右からと、方位を目まぐるしく変える風雪にふらふらと煽られつつ、帆布と華奢な木材で出来た原始的な飛行機械が高度を下げる。上空より湖面の方が気流が安定していないのか、着陸の態勢に入っては複葉が弾かれるように上下動、翼端が凍結した湖面にあわや触れるか、と思うようなヒヤツとする瞬間もあって、ようやく機は湖面に滑り降りる。

シンディは一瞬、アラートを解除するかどうかで悩む。

後20秒で彼女たちは強制的に実体化を解除され、マシンに転送されてしまう。一度実体化を解くと、再度実体化が可能となるまでに最低でも3分掛かる。戻って来た時には、対象・ゲーリングが殺されているかも知れないし拉致されている可能性が高い。ならばアラートを停めると、今度は実体化可能限界の残り10分間、亜空間へ戻ることは出来ない。

実体化時間は『第一規制』5分、『第2規制』の10分、そして『限界時間』20分と定められており、20分以上連続で同年紀に存在することは出来ない。それ以上の滞在は歴史の浄化・修復作用が始まるとされているため厳禁されていた。これは大抵のTCも守るタイムトラベラー全体の掟のようなものだった。

これだけ派手な歴史介入ではたとえ限界20分以内でも危険、死を意味するかも知れない。今は牽制するだけのTCが、残ることに決めた2人を見て、殲滅するために動き出す、その可能性もある。

5・4・3。シンディはちらつとウインを見る。ほんの0.5秒程度。ウインの目が語っている。その目は落ち着いていて温和ですらある。

・・・。彼女が空を払うような仕草をすると目の前に擬似窓が開き、赤いボタンが現れる。彼女はそれを拳で叩く。

「アラートが解除されました。以降、強制解除時間まで解除は出来ません。強制解除まで、後9m52・51・50」

マシンオペレーターの自動音声か2人にだけ流れる。と、同時にTCが一斉射撃を行い、窪地に伏せた2人に、熱風と溶けた氷雪や泥を浴びせた。

「奴ら、気付いたか？」

しかしウインの問いにシンディは答えなかった。じつと虚空を睨んでいる。ウインが彼女を見やったその時。

「シンディ、逃げろ！」

ウインは視野を掠めて飛んで来た物体に反応し、彼女に注意を与えると自らは窪地の隅に向かってダイブ、重なって横たわる朽木の陰に飛び込んだ。その直後。

爆発と閃光。出来るだけ地面に密着するように伏せたつもりがウインだったが、気圧の急激な変化と酸素の燃焼により局所的な爆発を引き起こす空気手榴弾は強烈で、泥濘に半分埋もれていたにも拘らず身体が浮き上がり、叩き付けられる。

吸い込んだ空気が全て肺から押出され、強い衝撃に空気を吸い込むのもままならない。鼓膜を破られないために口を開け耳を両手で塞ぎ、その格好のまま肘を耳朶に押し付けて頭部を隠していた彼。口に得体の知れぬ泥濘が入り込み苦味と嫌悪を与えるが、かろうじて焦げ臭い空気を貪った彼はそのままじつと動かなかった。

案の定、2発目。再び浮揚感と肋骨に響く衝撃と塞いだ耳にも響く破裂音。

それをやり過ぎすと、彼は驚くほど素早く立ち上がりスティックを構え、最初に飛び込んで来た光学迷彩スーツとフェイスガードの影に向け、容赦なくプラズマ弾を放つ。

そのTCが弾かれたように吹き飛ぶと続けて2発。後に続いた2名のTCが視野から飛び去る。

次。一瞬の間を置いて、僅かに角度を変えた前方に2人、本能的にその方向へスティックを構えた瞬間、実戦を経験し九死に一生を得た兵士だけが持つている第6感、敵を目前にした元フランス陸軍騎兵少尉ウインスラブは強いて振り返る。

そこには今や彼を狙い撃つ寸前のTCが2人、振り返り様の連射その2名はかるうじて伏せるが、ウインにはそれ以上相手をする余裕はない。もう一度振り返った時には前の2名がプラズマを放つ寸前だった。

時が止まる一瞬。緩慢にすら見えるTCの動きに魅せられたように止まるウイン。もう、何をすることも間に合わなかった。

プラズマがそれぞれのスティックの先から鈍いオレンジに輝いて膨れ、正に離れようと・・・当たればただで済まないが、距離は僅か5メートル、外れることはあり得ない。

(19世紀に生まれ24世紀に生きて20世紀に死ぬ。何て壮大な人生だ・・・)

しかし、彼はまだ死ぬ運命にはなかった。

ウインの目の前でTCがもんどり打って倒れる。最後の最後でスティックの角度が変わりプラズマはあらぬ方向へと飛び去る。その後、思わず目を覆いたくなるような眩い光、あれは・・・

実体化因子。TPのそれは燃え立つように黄金色に輝く。存在を誇示するそのマーカーを目にしたウインの口から深いため息が漏れ

た。

光はアーチ状のドアの形、中から黒いシルエットが一人、また一人。都合10名を吐き出すと輝くドアは瞬時に消え去る。

「大丈夫か？」

光学迷彩を施したフェイスガードに防寒光学迷彩バトルスーツ。ステイツクを片手で保持し、右手をウインに差し出した。左袖に黄色や白の線。右肩に07 2015とステンシル文字。

「これは、これは隊長殿。騎兵隊のお出ました、という奴ですね」  
ウインの受け答えに幾分皮肉が混じるのは致し方ないかもしれない。それだけ際どいタイミングだった。

「それでも急いだんだ。済まない、少々手間取ってね」

「ウチの若いのが一人、逸れている、そっちを、」

「判っている、そっちはある人に任せたよ。さ、後始末を付けなくてはならん。ここで大人しくしているんだな」

男はウインを片手で引き起こすと仲間を追って窪地を飛び出して行った。至るところで破裂音や何かが倒れる音、裂ける木の音等が繰り返されている。

（後始末を付ける・・・何かこちらがドジった、とでも言いたいかよ・・・）

ウインは首を振って口の中に残っていた泥を吐き出す。と、辺りを見回し、シンディを探した。いた。窪地の先、湖側の一本の木に寄り掛かっている。

「無事だったか・・・」

「ほっとしながら彼女に近寄る。」

「ああ」

生死の境目を越えた同士の再開にしてはそっけない挨拶だったが、ウインにとってはその方がシンディらしく、思わず笑みがこぼれた。  
「巡回警備班の隊長だったね」

「ああ」

気のない返事に彼女の視線の先を追うと、かのゲーリングが自分

の機を後に、湖面を反対方向へ走って行くところがかるうじて見える。ウインが見やった直後、その姿は雪の渦に消えた。

「保護対象A、危険を脱する、か。反対側にもTCがないことを祈るよ」

ウインはフランス人らしく大きさに肩を竦めると、

「どうする？」

「待つしかないな」

「・・・後4m・・・時間切れまでかい？」

「ああ、仕方がないね」

2人は並んで、何事もなかったかのように雪に沈む北欧の湖を見つめていた。

**Episode 3・凍結湖畔の死闘（後書き）**

出典

十李攀龍攀 「唐詩選 序」

キヲ・ロシユフーコー 「道德的反省」

## Episode 04: Quartette (カルテット)

STP本部第3会議室 4日後 2374年05月(現在年月)

「20世紀常駐隊の救援が遅れた点につきましては、組織的欠陥と問責されても致し方ないと思われます。以前もこの問題に付き検討し、改善を図って来たところではありますが・・・」

検証課長は咳払いをし、ボトルからグラスに水を注ぎゆっくりと飲む。触れたくない問題を語っている時に間を取って、聞く者の意識を分散させる。見え透いた常套手段だ。

「この点については、今後、最重点課題として関係各部諸氏の意見を取りまとめ、若しくは評議委員会に付託し、方針を速やかに提出することを勧告致します」

(やれやれ。お前さんたちは以前も勧告しただろうに・・・)

実際現場では、作戦部の管轄である現行犯の逮捕執行に情報部の管轄下にある世紀常駐巡回警備隊は手を出さない、という不文律が出来上がっている。それでなくとも作戦部と情報部は表面上仲良くやっているようだが、テーブルの下では足を蹴り合っている。これを正すのは一苦労だが、そろそろなんとかしないと現場に犠牲が出る。

(本気で取り掛かった方がいいのは分かっているのだが・・・)

そう思った男は暫し目を瞑る。欠伸が漏れそうになり、かみ殺す。長々と御託を聞いて来たせいだ。深呼吸を一つ、二つ、目を開け向かい側を見ると、一部の隙もなく制服を着込んだ男が茶番の仕上げに掛かるところだった。

「・・・これらの検証結果から、TCの行動を亜空間からの監視に留まらず、実体化して偵察せよ、と命じたことは作戦の常道としての確であった、と認めます」

1人2人わざとらしい咳払いをする。

「検証課の結論として、今回作戦部が4班に対して行なった命令・指導は全て順当である、と結論します。」

最後に声を張って検証課長の話が終わった。

「ありがとう。これで少し肩の荷が下りたよ」

作戦部長が大げさに肩を竦めた。

(相変わらずの茶番だな)

男は会議室の隅、部課長職が並ぶ列の反対側に陣取っている。その男が見つめる中、情報部長は横の作戦部長と何か話した後で、

「結局、TCの目的は何だったんだね？」

作戦部刑事課長が苦々しげに口を開く。

「まだ取り調べの最中だが、インターポリスの時空犯罪取締局が早く引き渡せとしつこくてね。詳細はあちらが調べるだろうよ」

課長の話によると結局捕まったTCが知っていたのは、あのタイミングでTPを待つこと、TPを発見次第攻撃し、ゲーリングがTPに保護拘束されることを防ぐこと、ゲーリングには手を出さないこと、という不可思議な指示だけだ。相手はTPに過去痛い目に合わされて意趣返しをしたかったのかも知れない、と刑事課長は付け加えた。

TPが保護対象を一時的にせよ拘束することはまずありえない。歴史不介入という、いわゆる不磨の大典がある。尋問した捜査官がそれを指摘すると、ある男は、そんなことは知ったことじゃない、指示されたことをやり遂げるのがTC傭兵だ、と嘯うそいていたという。その指示を出したはずの依頼人については、毎度の事ながら特定にまでは至らなかった。

TC側の損害は、重傷9名に軽傷5名、10体全てのピッカーを破壊された。

TP側は4班3名のうちスペンサー少尉が重傷、残り2名も軽傷を負い、ピッカーは1体が全壊廃棄処分、残り2体も大修理を要する損傷を受けた。応援に掛け付けた巡回警備班は10名中2名が軽傷

を負い、ピツカーも数体が軽度な損害を受ける。

「今回のTC傭兵は全てヨーロッパ連合出身者で、よく訓練され連携が取れていたようだね。20世紀前半部常駐隊の報告では、制圧に第1規制時間の5分を使い切っても全員を逮捕出来なかったようだ。2人ほど取り逃がしているが、これは緊急脱出シューターを使ったと考えられる。奴らがバルト海で溺死しなかったことを祈るよ」

刑事課長のジョークに笑う者はいなかった。

「まあ、このTCに不意打ちを受けたにも拘らず、6対1の不利な戦いを互角以上に戦い抜いた4班には敬意を表したいものだ」

これには神妙に頷く者が多かった。

「班員の1名は重傷、もう1名は軽傷だが無理せず安静にするほうが良い、との医師の判断だそうだ。班長のクロックフィールド大尉にも同じ診断が下ったが、既に退院している」

情報部長はそう言うと言葉を切り、反対側に座る面々の一角を見やり、

「ジョージ。君の報告は見たが、何か付け加えることはあるかね？ 全員がややだらしく座る大尉の制服を着た男を見やる。」

男、ジョージは冷ややかと言っていていいほどの態度でざっと辺りを一瞥すると、

「特に何も。報告の通りですよ」

「特別査察の君が何故あそこにいたか、などとは聞いてはいけないのだからね？」

「ええ、申し訳ないですが」

(長官の犬が)

情報部長は胸の内ですを打ったがそれを表情に表すようなことはなかった。勿論、古狸が、と思ったジョージも面白がるような表情は変わらない。

「まあ、ジョージ君たちには彼らの任務がある。そんな中、イレギユラーでウチの部員を助けて頂いたことを感謝する」

何か取り成すように作戦部長はそう言うと言った頭を下げた。

「いえ、たまたま居合わせただけで。彼が命に別状がなくてよかったですよ」

作戦部長は大きく頷くと、

「他に何かあるかね？」

皆、何も言わなかった。わざわざ午前11時という忙しい時間に召集している、皆、自分の仕事のことを気に掛けるか、そうでない者はランチを何にするか迷っていることだろう。

「よろしい。ご苦労さまでした。散会する」

ジョージは皆が立ち上がる中、僅かに肩を落とし、椅子の背に身体を押し付け、頭上に白く輝く有機照明壁を見つめる。

TP・時空保安庁が『公正』であるために、疑義が生じた事例が発生した場合、自主的に開くと規定されている検討会。何時ものように茶番を見せ付けられることになった。結局身内の『溝』を覗く時は目を瞑り鼻をつまむ、そういう事だ。

とはいうものの、ずっと見て見ぬ振りを続ければ、何れ組織は淘汰される。組織の膿を出してしまいたいと考える人間も少なくないはず。また、部課長職はなんとか現状維持で当たらず触らず、取りまとめたいと考えている。このギクシャクとした関係がTPを弱め歪めて行くと言つのに。

(さて、どうする?・・・ひとつ酔狂と言われてみるか)

ジョージは立ち上がり、出て行こうとしていた作戦部長を引き止める。

「ニックおじさん、一つお願いがあるんですがね」

作戦部長はたちまち警戒の顔色を浮かべる。

「なんだね、ジョー。お前さんが馴れ馴れしくする時にはガキの時から無理難題を吹っかける時だって決まっているが」

「まあ、そう言わないで、一つかわいい後輩のお願いを聞いて頂けませんかね?」

「シット！」

ガラスが壁に当たり砕ける音。ドサリ、と椅子に座り込む音。テーブルに脚を投げ出す音。誰も何も言わなかった。

その時まで待機所にはB C 3班のメンバーもいたのだが、彼らは目線で頷くと部屋を出て行く。悪意ではなく、居たたまれなくなり気も使ったのだが、残された3名にはそれすら彼らを避けているように思えてしまう。しかし、その感想を言う者もない。

三人三様。彼らはいつでもそうだった。任務の時でも非番の時でも、それは変わらない。無口で感情表現の乏しい女リーダー。生まれも育ちも紳士だが熱血漢でもあるセカンド。若さと明るさで騒々しいがその実複雑な性質のサード。それが最も良く表れるのが、こうした組織に対する不満を感じる時だった。

「俺が一番頭に来るのは」

スペンドはバーカウンターに寄り掛かり、そこにきちんと磨かれて重ねられたカットグラスをひとつ取り上げ弄んでいる。

「目に見えない誰かさんの思惑で明らかにおかしい命令を告げられ、人形のように動かされたことだ」

彼はその透明なグラスに何か素晴らしい模様でも描かれているかのように眺める。

「任務は仕方がない。理不尽なこともやる。例え歴史に汚点を残したような輩を救うためにも全力を尽くさねばならない、何故ならばそれがT Pの存在理由だから」

弄ぶグラスを今度は右手で放り上げキャッチする。左手は肩から

脇に掛けて大きなパッチで覆われ、手首から先しか動かせない。

「俺の初期順応指導教官殿はそうのたまったもんさ。更に曰く。善だろつが悪だろつが、正史は動かしようがない。だから過去の歴史をいくら弄くつても現代を変えることは出来ない。TPはその変えられない歴史の記憶を守るために存在する。文化財保護官のように。自然環境保護地区の監視員のように」

医務官は浮上車椅子といった感のあるミニムホバーの利用を薦めたがスペンドは断り、古風な松葉杖を使うと言い張った。左足の再生治療には負担が大きいからお勧め出来ないと再度ホバーを薦める医務官に、ここに書き記すことが出来ないような罵詈雑言をぶつけた。ならば、と医務官は軽いパッチでの手当てを止め、部厚い包帯で左脛から膝下までをぐるぐる巻きにして固めてしまった。

「TCは変えられない現在という前提があるのに、何故過去に介入するのか」

彼は松葉杖を手が届く場所に立て掛け、カウンターに体重を預けている。

「それはそれが商売になるからだ。表面上戦争の消えた現代。刺激を求める一心で、一部の好事家が求める過去の改竄。もちろん、収益を現在に持ち帰ることは出来ないが、現在の知識を使い賭け事などで利益を得る不当収得。持ち帰れなくとも過去では使えるのだ。自分だけが観察する過去の改竄という楽しみに数億UNI<sup>ユニ</sup>支払う鬼畜もいるという」

最早スペンドは熱心に講義する教官と化している。

「過去は単なる現在の航跡、足跡などではなく、それはそれで連鎖し連続再現する現代正史の存在証明、そこに存在する生物は間違いなく生きていて、歴史を改竄することはその過去の積み重ねを否定することとなり、それは人間として不可侵の領域にあたる。この過去の在り様により因果律と未来は否定され、それにより神の存在すら否定される向きがあるが、それは行き過ぎというもので、因果律も後ろ向き、過去に対しては成立するし神も哲学、精神論や神学的

には存在を否定出来ない。それを踏まえるのであれば、TCが行なおうとする過去改竄は神をも恐れぬ凶悪犯罪といえる」

ワインはスピンドの講義をソファに沈み込み、テーブルに足を投げ出す、という普段の彼が示す規範から外れた少々行儀の悪い格好で聞いていた。手にはスピンドと同じくカットグラスを持っているが、琥珀色の液体が半分ほど入っている。

「・・・俺の指導教官はね、作戦部で20年、情報部で20年叩き上げて補給支援部スカウト課で10年、俺のような奴らを引っ張って来たそうさ。何でも知っている博識のおっさんでさ。でも、そのおっさんも内部の上下関係やらお役所的体質やら派閥抗争みたいなことは一つも教えてくれなかった。こんな訳の判らない状況で危険に晒されるなんて事もね！」

右手のスナップを利かせて投げられたグラスは直線に飛んで壁に当たり華々しく砕け散る。

「おいおい、4つ目だけ。いい加減にしときな」

顎をオトガイに付けるまで沈み込んだワインが物憂げに言うが、スピンドは答えず、

「一体、何なんだ、こいつは」  
再び砕け散るグラス。

「5つ目。給仕がやってくる前に片付けるよ」

まだ太陽が高い。酒を飲むには早い時間なので、待機所のリラクゼーション区域はセルフサービス時間となっている。

「お代は俺に付けてくれ、ってな」

6個目のグラスが散った。

(まずいな)

シンディはワインの座るソファの左、一人分の間を空けて座っていた。他の2名が制服の上着を脱いでシャツ姿なのに対し、彼女は制服をきちんと着たままだった。

(まずいな)

再び彼女は思う。別にスペンドの態度やウインの様子を思っていることではない。彼らは彼らで、いわゆるガス抜きを行なっている最中というだけだ。まあ、スペンドはマックスゲージを示しアラームがしつこく鳴っている、といった状態ではあるが・・・人間である以上、いた仕方がないことであるし、こちらが気を付けてケアを入れるよう心掛ければいい。

ただし・・・この状況は、まずい。TPを直接攻撃するTCが出て来たと言うの上は・・・

あの日。

彼女たちは最近TCの出没が多い警戒年紀である18世紀後半、そう、あのアメリカ独立戦争やフランス革命期の世界へパトロールに出かけていた。機動執行はそもそもパトロールをしないものだが、駐在や捜査班だけでは対処し切れない、また、機動執行への出勤要請が間に合わないケースが連続し、巡回警備班の補強として任に就いたのだった。

パトロールは、最初からTCとの遭遇が決まっている逮捕執行の出勤と違い、実体化することも少なくTCと鉢合わせすることなど減多にない。年間5、600件ほどの検挙を行なうTPで、8割は機動執行班が挙げたもの、残り2割の内、昨年を例に取れば巡回警備班が挙げた件数は20件に満たない。しかし彼らは6から10名を一班とする巡回警備班を300前後揃え、作戦部で一番大きな勢力となっている。実際彼らの活動によりTCは迂闊に歴史に介入することが出来ずにいるのだ。的確な情報網と地道な活動でTCの計画を察知する情報部の常駐員や機動捜査員と共に、神出鬼没の巡回警備はTCたちに圧力を掛け続けている。

機動執行の人間が巡回警備を手伝うことは、ない訳ではないが珍しい。これは機動執行が作戦部のエリート的存在であり、精鋭であることと無縁ではない。本庁捜査一課のエリートが所轄署捜査本部

へ手伝いに行くようなものだ、お互いの感情を考えてもごく普通の管理職なら出来るだけ避けようとするだろう。だが、最近のTPは少し普通の状態ではなかった。

「いやあ、助かるなあ、あの有名な『ブラックダイヤモンド』が我々『地回り』をお手伝い頂けるとはね、しかも5日間も。正に夢のようだねえ」

18世紀を担当し常駐する責任者の中佐は3名を前にして、おベつかとも皮肉とも取れる態度で握手を求めた。それは事前の不安が的中した瞬間でもあった。

3名はエリートTP捜査官ならそうであろうと誰もが考える態度無表情の直立不動で握手を受け、担当時空域とタイムスケジュールを受け取ると、直ちに18世紀後半のヨーロッパ、中世から急速に近代へ向かう大きな歴史の中へ踏み込んで行った。

シンディたちが緊急通信を受けたのはパトロールを始めて2日目、フランス革命直前のフランスを見て回っていた最中のこと。

それは作戦部作戦企画課の中佐からのタキオン通信だった。通信は別系統で同時に18世紀巡回警備班にも回され、シンディたちが突然持つて行かれることに、ほら、見たことか、と諦めとも妬みとも取れる反応が起きていた。

企画課の中佐はシンディたちとは初対面だった。彼女たちとの秘話通信に切り替え命令を伝え終わると、時間差の影響で黎明期の2次元通信映像のようにコマ落ちのする画面上の中佐は愛想よく彼女に語りかける。

「以上が概要だ。保護対象のゲームブックは直ちにそちらのライブラリーへ転送するよ。もちろん、作戦詳細もだ。具体的な質問は移動中にそれを読んでからして貰いたい。何かあるかい？」

「ひとつだけ。どうやら執行時の命令はそちらから出るようですが、ミッションコンプリートの条件を示して頂けますか？万が一の時の判断基準にしたいので」

「いい質問だね。残念だがそれは今示せない。現着したら指示するよ。申し訳ないがこれは上の指示だ」

中佐は、それでは幸運を祈る、と喋って通信を切った。

「やれやれ、あっちこっちと人気者なこと」

スペンドが吐息混じりに肩を竦める。ウィンも首を振りながら、「あちらの冬は寒いね。ここの集積所に余分な冬季防寒戦闘スーツなんてあるのかな？もちろんサイズも合わない」と

「もうバズに連絡させてるよ。寒いのはどんな時代も一緒だからあるはずだ」

スペンドはそう言うと、目を細め、ポツリ、と続ける。

「俺は命令の後に『幸運を祈る』と言う人間は信用しないことにしている」

シンディは無言で移動手順のファーストフェイズを始めた・・・

ドアが開く。

無意識に爪を噛みながら物思いに耽っていたシンディが顔を上げると、中肉中背、瑠璃色の瞳を持つ若い男がリラクゼーション区域バールームのドア口に立っていた。彼女はそれが誰であるかを認めると、微かに眉を顰める。

「お邪魔かな？」

明るい空色の制服は卸し立てのように折り目がきちんと見える。

古風な儀礼用の制服だった。肩章からシンディたち同様実行部隊の大尉だと知れるが所属を示す右肩のナンバーはなく左肩の『撃墜マ  
スコア  
ーク』もない。

「いいえ。そちらさえよろしければ」

ウィンが試すかのようにゆっくりと返す。

「ここは少々、騒々しいですがね、大尉どの」  
と、これはスペンド。

「ありがとう。では、お邪魔させて頂くよ」

男は制帽を脱ぐとふわりと放り投げ、マチの高い制帽はスペンド

の寄り掛かるカウターの<sup>上</sup>へ見事に着地する。短く刈り詰めた金色の髪が露わになった。彼は3人が注視する中、ひよいとバーカウターを跳び越え、並ぶボトルを眺めると10世紀も頑固に同じ製法で造られるアイラのモルトを選ぶ。慣れた様子でショットグラスを取り出すとスコッチをツーフィンガー分注ぎ、スペンドの横から彼が6個無駄にしたカットグラスを取って、冷蔵庫からミネラルウォーターを取り出すとみなみと注ぎ、一口含む。

「さて、まずは皆さんの健康に」

男はスコッチのグラスを掲げると一気に呷った。

この声、まさか！・・・スペンドの目が見る見る大きくなり、口がぼかんと丸くなる。まるで驚く人間を模<sup>かたど</sup>ったマネキンのように固まってしまった。

大尉という階級の割に男は若い。どう見ても25は越えていないだろう。であるのに、その態度物腰は15は上のもの、気障に思える行動も、絶やさな<sup>い</sup>微笑みや澀刺とした仕草により嫌味には感じない。それは人を惹き付ける何か、カリスマに近いものに思えた。

「その後、どうだね？その分だと元気は取り戻したようだな」

男はショットグラスに再びスコッチを注ぎながら何気にスペンドへ話しかける。やはり『あの声』だった。

「おかげさまで。あの時はありがとうございました」

神妙に、そして慎重にスペンドが返す。

「それはよかった。しかし、松葉杖か。医者に叱られたらどう？」

「ええ、まあ」

男は笑う。幅広い年齢層の女性に好感を与えるであろう柔らかい笑いだった。

「意地を張るのは根性を示すの<sup>に</sup>いい方法なんだけどね、きつちりと早く直すことの方がプロとしては及第点を貰える。あんまり無理をするものじゃない」

「・・・肝に銘じます」

「うん、いい返事だね。やっぱりスペンド君は唯の跳ねっ返りじゃなさそうだ」

「失礼ですが、大尉殿。スペンサー少尉とは顔見知りのご様子ですが、本官もご挨拶させて頂いてよろしいでしょうか？」

ウィンが立ち上がりつつ敬礼する。

「私はピエール・ド・ウインスラブTP中尉であります。こちらは私の上司、AD機動執行第4班班長、シンディ・クロックフィールドTP大尉です」

シンディも立ち上がり敬礼する。男は慌てたようにグラスを置き、再びカウンターを跳び越えると居住まいを正して見事に答礼する。

「これは無作法をしました。申し訳ない」

そして再びあの笑顔を浮かべると、

「私はジョージ・ウォーカー。TP大尉を任じられている」

「ウォーカー？で、ではあの『ファイブ・サン』・ウォーカー大尉殿でありますか？」

19世紀の騎兵将校を演じていたウインは途端に24世紀のウインに戻り、驚きの声を上げた。

「その渾名は余り好きじゃないし、陰での通り名だからね、中尉。出来たらジョーと呼んで欲しい。こちらウインと呼ばせて頂きたい」

「ご随意に・・・ジョー」

「ありがとう、ウイン」

そしてそこまで一言も口を訊かないシンディに、

「随分と暫くだね、シンディ。私のこと、忘れた訳じゃないよね？」

5年振り、『エリザベス事件』以来・・・かな？」

「そうね、ジョー。何度か本部でお見掛けしたけれど、何時でもお忙しそうで声を掛けられる様子じゃなかったわね。変わらずお元気そうで」

「それは大変失礼した。こんな私でもそれなりに忙しい時があって、

・・・」

「ウイン。彼は一体、何者なんだ？」

2人のやり取りを眺めながらスペンドがマイクロタグを通して秘話で尋ねる。『タフィーズ・サン』を知らなかったスペンドを責めるかのように、ウインは言葉少なくずばり正体を教える。スペンドは言葉を失った。

「ああ、そうだった。大事なことを片付けよう」

ジョーは改めて敬礼すると、右手人差し指で空に四角を描く。するとそこに擬似窓が開いて通達命令書が映る

「私、ジョージ・ウォーカーTP大尉は本日付で長官直属から異動、作戦部機動執行課AD機動執行第2中隊第4班に『欠員補充』として配属となりました。なお、指揮命令権は従来通りシンディ・クロックフィールドTP大尉にあり、私は只今よりあなたの指揮下にあります。以後、よろしく、皆さん」

彼が擬似窓を『投げる』とそれは空を切ってシンディの前へ飛んで来る。彼女は右手で受け止め、一瞥した後、指で何かを書き込む仕草をしてから『畳む』と、それは一瞬で消えた。

「受領しました。大尉、ようこそ。こちらこそよろしく」

「しかし・・・」 「何だってウチに・・・」

異口同音とはこのことで、ウインとスペンドは啞然として2人を交互に見やる。ジョーは困った、といった心配そうな顔付きで2人に、

「私では役不足かな？これでも一応作戦Aクラス担任の資格はあるし、3年前には作戦部でTCを追っ駆けていたこともある。と言っても、機動執行ナンバーワンの君たちと肩を並べるのは、やはりおこがましいかな・・・本部のデスクワーカーが何しているんだ、ってことになる前に十分訓練を積んでおくよ」

「いいえ、滅相にない。たい、いえ、ジョーの噂は聞いていますか

ら・・・逆に光栄ですよ・・・でも、なんだって現場へ？」

ウインは赤ら顔だが酔いも醒めてしまった様子で困惑しながら尋ねた。

「さあ、何でだろう。私は好奇心旺盛な男でね。子供の頃からよく言われたもんだ、ジョーが覗かない所はない、ってね」

謎めいた笑顔で煙に巻くと、カウンターに置いたショットグラスを取り上げスペンドに乾杯の仕草で上げて見せると、

「そちらも、よろしくな、スペンド。君とは馬が合いそうな予感がしているんだ」

「あ・・・ええ、まあ。こちらこそ」

スペンドは何故か浮かない顔をして曖昧に返事をする。と、何か思い出したようにジョーへ、

「大尉は上層部を良くご存知なんですよね？それにこの間、私を助けて頂いた。この間の茶番は一体何だったのか説明願えませんか？」

するとジョーは含み笑いをし、手にしたグラスを一気に煽るとコトリ、とカウンターに置くやそのままひよいとカウンターへ飛び上がり腰を下ろした。儀礼用の硬い制服を着用しながらもその動きは、猫のようにしなやかで流れるようだった。

「君が知りたいのは・・・ああ、いや、ちゃんと説明した方がいいね」

ジョーは微笑を崩さずにじつとスペンドを見つめ、つとシンディの方へ視線を流す。

「君らはこう疑っただろうね。突然の転進命令。作戦目的も知らされない慌しい移動。TCが見つめている前での実体化命令。案の定の乱戦。これ全て仕組まれたのではないかと」

ジョーは口を噤むと首を傾げ、どうだい？とでも言いたげな様子でスペンドを見る。しかしスペンドは無表情にその目を臆せずに見つめ返すだけだ。

「まあ、最前線でTCを追う君たちには余りにも申し訳ない話だ。

今回の作戦企画課の命令に関しては、場当たりので焦り過ぎの稚拙

さが見え隠れしていたことは否めない。

私はね、ある数名の作戦部中枢に籍を置く若手が手柄を焦った、と見ている。情報部のアナリストが出した報告、通信傍受が捉えたTCの気配、常駐隊からの情報・・・正直な話、そこに陰謀や陥穽は見当たらない。それは私が保証するよ」

ジョーは再びシンディを見やると、

「本当に済まないと思う。こんな下らないことで君たちが窮地に陥るほどTPは官僚主義に毒されているんだ。シンディ、君は覚えていただろうが、少し前まではこんなことはなかった。一握りのプロフェッショナルが続々と発生する様々な形の時間犯罪に立ち向かい、自分たちは時間と歴史の番人であると胸を張って答えることが出来た。しかし、今は・・・」

ジョーは自身の右手をつと、眉間に持って行き鼻梁を軽く揉むようにする。

「情けないお話だな。しかし、その責任は私たちにある。だから最前線にいる君たちが2度とこのような危険な目に会わないよう、何とかして行かなくてはならない」

そしてジョーはカウンターを降りると、スペンドの前を過ぎてシンディの真向かいに立つ。

「私はそのヒントを知りたい。随分と現場の空気を吸ってないからね・・・こうしてお邪魔させてもらう訳だ。まあ、気に入ったらそのまま居付くのもいい、と思っているよ」

シンディは黙って頷く。ジョーが歩み寄って手を差し出す。シンディは一瞬待ってから手を差し伸べ、握手はほんの数秒だった。ジョーは笑顔だが、シンディは無表情を貫いた。

ジョーは続いてウインと、これはがっちりと握手をし、最後にカウンターに寄り、スペンドの前へ行く。差し出される手にちらりと目をやると、スペンドはすっと手を出し、軽く握手して自ら離れた。ジョーはこれにも笑いながら、

「まあ、ゆっくりお互いを知ろう、スペンド。歳は4歳私が兄貴だ。

出身は18世紀末イギリスはロンドン、つてことになっている。私の異動早々、明日からこの班は再建と休養の長期休暇リフレッシュだろ？君はただどこで過ごすのか滞在地申請が出ていない。一体どこで過ごすんだい？」

「どこにも旅する予定はないですよ」

「そうか・・・シンデイは大陸の南へ、ウインは月、か・・・スペンド、君さえよければ私の別荘に何日か寄らないか？それとも一緒に火星見物にでも行くか？」

「・・・任せますよ。どうせやることもない」

「決まりだ。じゃあ、何か考えよう」

「ジョーはそこで満面の笑顔になる。」

「さあ、これでトリオがカルテットだね。4班は最強になったんじゃないかな？」

この漲る自信と明るさはどこから出るのだろう。本物だろうか？ウインは完全に氷が溶けてしまったウイスキーの水割りを嚙りながら、値踏みをするかのようにジョーを盗み見る。シンデイは例の無表情なまま、何の感情も窺わせず、ただ静かに立っていた。

## Episode 05: Holiday (リフレッシュ)

§ 南米連邦・アルゼンチン・サンタクルス州 2374年06月  
(現在年月)

まるで酸漿ほおすきのような太陽が西へ傾く。鈍く赤いオレンジの真円が放射状に薄く棚引く帯状の筋雲を朱に染め、それは思わず立ち止るほどの美しさと怪しさだ。

何もない、との表現が一番しっくりとする。乾燥した風が常に吹き抜ける広大な平原。西風は太平洋からチリとの境、アンデス山脈を越えてやって来る。東風はアフリカに端を発してマルビナス（フオー克蘭ド）を経て大西洋から、南風は南極とホーン岬を経てフエゴから、北風はパンパを越え、そのどれもが痺れるほど冷たいのだ。

今は西風が吹いている。触ればパリパリツと音を立てて碎ける枯れた灌木がガサガサと音を立て、細かい土埃が舞う。

少年が一人、ネットのないゴールにボールを蹴り入れている。ボールは枠を切り裂くと転々と大地を転がって行く。少年は走ってボールを止めると、鋭いドリブルでゴールを潜り抜け、元の位置、ゴールから15メートルほど離れ2、30度左側に寄った場所に立つ。洗い晒しが元の色を判別不能にするTシャツ。そして色落ちが激しいパンツ。ゴール横に置かれた毛布を纏っているかのように見える外套。この辺りでは時間は500年以上も動いていないかのようだ（今、24世紀後半ではなく20か21世紀だ、と言われたら正確に違う、と反論出来る自信はないな）

思わずそう思った彼女自身も、最近流行の『ユニセンチュリー』  
と言われる世紀不詳ファッションの代表、黒い革ジャン（もちろん

動物の皮ではない)に、成層圏から地上へダイブする高高度侵入兵が地上で着用するダブダブの降下兵ズボンを履いている。細いレンズのサングラスを掛けた彼女の方こそ2、3世紀時代を遡った様相だった。

この荒野、もう1000年以上も何一つ変わらない不毛の大地、あらゆるものが文明と利便な機器類により変貌を遂げた世界にあって数少ない、見捨てられたような土地だった。

このような場所にも生活があり、人々が暮らしている。彼女がホバーを停めて夕焼けを眺める場所はある町の外れで、この周囲50キロ内外では最も人が住んでいる。ここには雑貨や日用品を扱う昔ながらの商店や、比較的新しい州政府直営の食料品店がある。彼女は買物の帰りだった。

町の子供たちの遊び場となっている、町営競技場とは名ばかりのフィールド。サッカーゴールを両端に、それと直交してバスケットゴールも2つ、どれも錆だらけで壊れ掛けていて網などはない。夕陽は赤土剥き出しのフィールドを更に朱に染め、フリーキックを練習する少年の影が随分と長くなって来た。

サッカーの少年は12、3歳位だろうか、ゴールを間に幾度も往復する少年を眺めるシンディに気付くと、ボールを片手に、仰ぎ見る。逆光で、短い髪にキャップ、革ジャンと彼女のその格好が若い男性に見えたのか、少年はいきなりボールを離すと地面に落ちる直前に左足で蹴り抜き、ボールは放物線を描いて30メートルほど離れた数メートル高い場所にいた彼女の前に落ちる。少年は大きく手を振って、こつちこつち、と声を掛けた。

シンディは腕組みを解くと、ボールを蹴る。これも見事に少年の前に落ちて止まった。

「ねえ、やろつよ！」

相手の実力を見極めた少年が甲高い声で誘う。無表情のシンディは、風に降下兵ズボンを靡かせ、前を開けた革ジャンを膨らませ小走りに少年の前に行く。

「あ……お姉さんだったのか！」

幾分驚いた表情の少年に彼女は少年と同じカステイリーヤ語で、

「町の子？」

「そうだよ。お姉さんは見かけないな」

「この先リオ・フエンテの谷に一ヶ月間だけ滞在している」

「へえ、何もないとこじゃない。なにかの調査？」

「唯の旅行者だよ。調査は多いのか？」

「たまにね。先住民の遺跡があるんだ」

そして痺れを切らしたように、

「ねえ、やつてくれるんでしょ？」

「ああ、いいよ。キーパーをやるっ」

「やった！今度ガジェーゴスで試合があつて、レギュラーになれるかどうか瀬戸際なんだ。コーチにシートの正確さが足りないって言われていてさ……」

少年が蹴りシンデイが受け止める。それは完全に陽が沈み目の前に翳した両手が見えなくなるまで続けられた。

§ヨーロッパ連合・イギリス・ヨークシャー 2374年06月

(現在年月)

「さあ、入った、入った」

ジョーの手招きでスペインドはホバー自走式のトランクを先に走らせ、丸太小屋ログハウスの入り口を潜る。スペインドの足の再生治療は上手く行き、怪我から2週間ほど経った今では微かに引き摺るだけで歩行にも生活にも問題はなく、あと2週間もすれば任務にも支障はない、と医者に太鼓判を捺されていた。

「むさ苦しい所で申し訳ないね」

ジョーはキッチンへ急行し電磁コンロのスイッチを入れ、湯を沸かしに掛かる。

「さあ、その辺に適当に座って休んでくれ」

スペンドは自走ホバーのトランクを部屋の片隅へ追いやると、座り心地の良さそうな革張りのロッキングチェアを試すかのように揺らした。同じチェアが4つ、荒削りな丸太の壁に良く似合う。その壁には鹿の角が6頭分、いずれも立派なもので、場違いな有機EL照明を受けて餽色に輝いている。

入り口から見て部屋の奥、両側にドアがあり、左側手前はジョーが湯を沸かすキッチン、反対の右手前は先に続く廊下となっている。スペンドは正面にあるガラス張りの引き戸から表へ出る。外は庇が張り出した広いバルコニーで、先へ進むと小さな庭と小屋全体を囲む針葉樹の林になっていた。

彼はそのまま庭へ降り、そこにあるバーベキュー用のコンロと岩で出来た水場、丸太を削り出して作ったテーブルと切り株を転がしただけの椅子を見て回る。やがて、林と庭の境界で、そこに転がっていた朽木に座り、そこから改めて小屋を詳細に眺めた。

この丸太小屋自身が建ったのは少なくとも5、60年は前のように見える。しかし、良く手入れされていて、設備も文明から拒絶した一軒家、といった外観からはがっかりするほど近代的だ。屋根は最新の光転換エネルギー蓄積素材で覆われ、小屋の入り口側には2基の風力発電用フィンがゆっくりと回転しているのが見える。照明は有機ELボードで、床は磨かれた松材のように見せかけた温冷床、空調コントロールも小屋全体に満遍なく行なわれている。全く都会の平均的な住宅と同じ設えだった。

「なんだ、そんなところにいたのか？」

ジョーが大きなマグに入った飲み物を持って来る。手渡されて一口、口を付けると、甘く濃く熱い紅茶だった。

「君の部屋は向かって左側のドアだ。ベッドと机、ドレッサーだけが許して欲しい。ここにはあまり客人は来ないんでね。」

ジョーはスペンドを真似て近くの朽木に腰掛け、小屋を眺め、問わず語りに話し続ける。

「奇妙な丸太小屋、だろう？隣の家まで1マイルは離れていて、荒地の果てにあるのに随分と現代的な設備だ。昔ながらの生活をするならこんな設備一切放り出して、火を熾し焚き火を明かりに酒でも飲めばいい。でも、中に入れば普通の生活と変わらない」

そう言ってジョーは自分のマグから飲むと、

「ここは親父から譲り受けた。親父と言っても育ての親だがね。古風なところのある21世紀人、君の生まれた頃にスカウトされたそうだ」

「お父様の家でしたか・・・」

言葉少なにスペンドが呟くと、ジョーは黙って頷く。暫く地面の泥濘に残った足跡を見つめていたが、やがて、

「君はスカウトされてまだ3年だったか、私の話は聞いたことがなかったかな？」

そういうと、首を振りながら笑い、頭を掻く。

「自分で言うのもなんだが、私はちよつとした突然変異なんだ。だから皆が密かに噂する、ほら、あれが『タフィーズ・サン』だよ、ってね」

「ええ、その名前は聞いたことがあるような気がしますが、どうも私は噂話に耳を傾けるって手合いじゃないもんで」

「だろうね。じゃあ、止めておくかな」

「いいえ、そこまで話して頂いたのなら、最後までお願いしますよ」  
ジョーは頷くと西へ傾き始めた日を仰ぎ、脚を組むと話し始めた。

ジョージ・ウォーカーの義父、セシル・ウォーカーはTPが正式に発足した2345年当初から捜査官として活躍した。タイムマシンの第一世代が開発された2330年代に、TPの前身である研究機関により21世紀から『招聘』される。それは何もセシルに限ったことではなく、研究機関を構成する約半数が過去からスカウトされた人々だった。

今に受け継がれるスカウトによる人員補給は、正史である24世紀の人員だけでタイムマシンを扱う機関を運営すれば時代に対し公平さを欠くという考えと、優秀な適格者を獲得することが時代の先端である正史の24世紀よりも数百倍容易であることなどが理由として挙げられる。

せつかく過去へ行けるのだから利用しない手はないだろう、と言う訳だ。

もちろん、闇雲に優れた人員を引っ張って来る訳ではない。そこには手探りで始まり現在も修正が加えられる厳格なルールが存在する。

現在TPでは補給支援部スカウト課が人員獲得を行なっている。

15世紀から先の各時代・各地域から、IQ150以上で独創的若しくは友好的で正義感が鋭く、天涯孤独かそれに近い身、身体的に頑強、致命的な持病を有さない、など30項目に該当する人物を候補にスカウトする。事前に情報調査部が該当人物の周辺や思想を当たっているため、申し込まれた人間は男女を問わずほとんど断る者はいない。万が一断った場合は、その者の思考を操作し、スカウトに会った記憶を喪失させる。旧来、神隠しにあつて帰って来たとされる人物の中にスカウトを拒否した者がいる。

ここで大事なのは、該当人物が歴史上の有名人物やファンクシヨinkerと呼ばれる歴史上のキーパーソンでないことだ。その人物を失っても歴史はその自浄作用により数日で正史に戻る、周囲の人物や警察などもその人物の失踪に対しすぐに関心を失う、そんな人物でなくてはならない。

もう一つ大事なのは、いくら優秀で完璧な人物であっても同一人物を複数獲得しない、というルール。マシンにより過去の有様が正史の航跡のようだ、と判明して以来、因果律は否定されたものの、同じ人物を複数、過去から見て未来である正史（＝現在）に連れて来たらどうなるのか、その矛盾は空恐ろしいものがあり、歴史が自浄作用を持つことから途轍もない事態になるのは目に見えている。

これは犯罪でもあり、幾度かTCたちが仕掛けたこの手の陰謀をTPは事前に防いでいる。

とは言うものの、一つだけ前例がある。マシン開発の最初期に怖いもの知らずの研究者が20歳と40歳の同一人物を現在に連れて来た事があり、この時は40歳の方が数日後心臓発作で死亡する、と言う事態になったが、これが自然死だったのか歴史の自浄作用だったのか、今日では禁止された行為なので未だに論争が絶えないでいる。スカウトされ24世紀で死亡した人間は2度とスカウトしない、というルールもあるほど、これはタブーとなっているのだ。

現在ではTPの要員の内3分2に当る人員が過去人であり、その比率は作戦部や情報部など一線に立つ部署ほど高い傾向にある。

そしてその候補となった過去人誰もが資質を虱潰しに調査され、言わば丸裸にされた状態でTPに集められ、お陰でTPは国際協約機関の中でも最も秀才の揃った機関、と皮肉混じりに言われるのであるが、そのTP所属の過去人でただ一人、スカウトでなく事前調査もされず人員確保ハンティングの候補にもならないまま、TPの捜査官となった男がいる。

「私は、1780年、ロンドンの生まれだそうだ」

ジョーは苦笑交じりに言う。

「赤ん坊の私はTP捜査官であった義父ちちに助けられた。夜の街に捨てられていたそうだ。その時、父は手配犯の再犯を阻止し現行犯逮捕した直後だったそうだが、偶然、捨てられていた私を発見し保護してくれた。君も知つての通り、こいつは内規違反だ。何せ、TCを取り締まるTPの正規執行捜査員が自ら掟を破ってTC同様の歴史介入をしたのだからね。」

しかし、私と義父にとつては幸いなことに、四半世紀前、創成期のTPは義理人情がまだ生きていた世界でね、義父の行為は本人への訓戒で済み、表沙汰にされずに済んだそうだ」

ジョーはマグの茶を飲み干すと、マグを大切そうに両手で包み、

「義父はね、孤児だった。まあ、スカウトされる人間はほとんどそうだが。君もそうだろうか？　しかし、私と違って両親を識ることが出来る歳まで父母が生きていた。私を見つけた義父は見捨てて置けなかったんだろっね」

スペンドはかける言葉が見付からず、黙って聞いていた。ジョーは手の内のマグを弄びながら小屋を眺め、話を続ける。

「私はTPの中で育った。義父は独身だが、独りで私を育ててくれた。もちろんTPには今も昔もシングルのための養育施設があるし、福利厚生面は手厚いからね、義父が任務をこなしながら私を育てるのは世間一般よりも容易だったのかも知れないが」

ジョーはマグを朽木の窪にそっと置くと、両手を頭の後ろに回し、暮れ始めた空を眺める。

「私とは少し違うがTPの施設内で生まれ育った人間も多い。中にはそのままTPで働くことを選び、認められた者もいる。そんなに多くはないがね。しかし、私は何時の頃からか夢を抱いたんだ。父のように捜査官になると」

それは口で言うほど簡単なことではない。確かにジョーの言うようにTPの主要部門で活躍する『TPチルドレン』もいる。整備課のニーなどはその代表例だが、現場の前線で活躍する捜査官は義理やコネ、僥倖でなれるものではない。あくまで能力がものをいい、過去からのスカウト組が多いのもそれを裏付ける。彼らの所属する機動執行には24世紀の人間はたった2人だ。素質と能力。TPは慎重に自分たちの根幹を成す人材を選んで来た。

「最初は相手にされなかったよ。あれは9歳の時だ。私は義父に内緒で作戦部の知り合いに会いに行つて捜査官になりたい、と言つた。その女性は当時、常駐捜査員のオペレーションをしていたが、彼女の知っている限り身内から捜査員に登用された例はないと言われた。無理だ、とね。私はその後も何人かの知り合いに会つて自分の希望を知らせたが誰一人まともに掛け合つてくれなかった。そういうし

ている内に私の行動が義父の耳に入った」

ジョーは思い出し笑いをして、これは失礼、と言うと、

「義父はこう言ったよ。坊主、俺の仕事に就きたいのか？私は叱られるかと思っていたから黙っていた。すると彼は私の肩に手を掛けて、ならば明日からその準備をする、辛いぞ、ってね。それから3年ほど、まるでアスリートと鬼コーチのような日々が続いた」

・・・セシルはジョーを扱しきに扱しいた。日課は早朝4時の起床から朝のランニングとストレッツに始まり、セシルの非番の日には日が暮れるまで、一日中基礎的な軍事教練と格闘技から世紀を超えた様々な銃器武器の取り扱い方、歴史と政治の講義、物理と科学、英語以外の言語の基礎と会話術、基本的な看護医術と心理学、インテリジェンスの基礎まで、セシルの知る全てを養子に注ぎ込んだ。

ジョーもそれに応え、セシルがいない日には独習、身体を苛め抜いた。やがてセシルの勤務日には、非番の仲間がやって来てはジョーの面倒を見てくれるようになる。ある捜査官は銃器の扱い方をみっちり叩き込み、ある情報部の女性士官は、その頃使われ出したTP仕様の攻撃型ピッカーやタイムマシンの事を詳しく教えてくれた。作戦部の体育指導教官は肉體戦闘術を教え、やがてジョーは油断して手加減した教官を投げ飛ばし、教官を感心させるまでになる。

ジョーが13歳になって間もないある日、セシルは何の説明もなくしに彼によそ行きの服を着させると、TP本部へ連れて行った。作戦部のある会議室に2人が入ると、そこには縦に長いテーブルが置かれ、その右側に12、3人の男女が一列に座っていて、向かい合わせに2人は腰掛ける。穴が開くほど見つめられるとはこのことで、ジョーは以前、作戦部のインテリジェンス・エキスパートから教えられたように、虚空の一点を見つめたまま身動きしなかった。

暫く双方無言の緊張状態が続いた。するとその緊迫した空気を破り、居並ぶ人々の一番奥に座っていた男が何の前振りもなく口を開く。

「ジョージ・ウォーカー君。君は何故TPの捜査官になりたいのかな？」

ジョーは質問者の方を見ると、軽く頷き、ほんの一瞬瞑目した後、質問者だけが部屋にいるかのように答えた。

「私の父はTP捜査官です。私はその父に育てられ、また、国際協約時空保安庁、通称TPタフイから多くの援助を得て現在に至っております。私の今日あるのは、この父とTPのお陰です。」

そのTPで捜査官として勤務する父を始めとする皆さんの背中を見て、私は育ちました。そして想ったのです。何時か父のようにTP捜査官として一線に立ちたい、と。その想いはいつ抱いたのか、私にも分からないほど幼い頃だったと思います。その想いはいつの間にか私の内にあり、今日ではそれは信念として私の目標となっております。」

13歳の少年は質問者から視線を外さないまま口を閉じ、静かに注視する。

「TPの意義を君はどう考える？」

今度は中央やや右寄りの白髪の男だった。

「国際協約時空管理法第8条を要約しますと、過去を観察・保全・現在よりの隔離・侵入する者から防衛するためにTPを置く、となつています。私見を加えますと、TPは現在が成立した過程としての過去をありのままの姿で、『時空の壁』の果てへと消滅して行くまで見守り保護することが使命であり、それは歴史的文化財や野生動植物を保護するのと同義であり、また、過去と現在との関係が未だ不明瞭な状態で各研究者の重要課題である以上、何人たりとも触れてはならないサンクチュアリとして守り続けることがTP最大の任務であります。これは現代人にとって大変に意義深い行為であり、崇高な任務であると考えます。」

一瞬、会議室が水を打ったように静まり返る。沈黙を破ったのは質問者の真ん中に座った男。静かに語り掛ける。

「諸君に問う。今のウォーカー君の発言以上にTPの意義を語れる、

という自信のある者がいたら手を挙げたまえ。傾聴しよう」

その年齢不詳の男性は左右を見渡すと、

「いないようだね。私はこれ以上、時間の無駄と考えるのだが、如何だろうか？」

拍手が起こる。一斉に。

「反対は、いるかね？」

「一つだけよろしいでしょうか？」

「なんだね？」

その男の右隣に座った中年女性が、

「直ぐにでも、という雰囲気壊して申し訳ありませんが、被服担当が彼に合う制服を誂えるまで2日欲しい、と申しております。承認辞令を渡す時、女性用で我慢しろとは言えませんから」

笑いが巻き起こり、皆が一斉に立ち上がるとテーブルを回り込んで親子を囲んだ。ジョーやセシルの肩を叩く者あり、撮影する者あり、口々におめでとう、ようこそと声をかける者ありで、2人は揉みくちやにされた。やがて先ほどの真ん中の男が、

「ジョージ・ウォーカー君。正式辞令は2、3日後になりそうだが、君をTP作戦部に迎える。最初は教育係に付いて基礎から学ぶが、その分ではそれもそんなに長いことではないだろう。作戦部長はスカウトの連中が持つて来た資料の中に、なぜか紛れ込んでいた君の資料を見て、直ぐに引っ張って来い、何時の時代だ？と言ったそうだ。彼の第一印象に間違いはなかったようだね」

ジョーは興奮を抑えながら返した。

「ありがとうございます、長官」

・・・回想を語り終わるとジョーは立ち上がり、

「その日から私はファイブ・サンだ。言い得て妙だが私は嫌いだ。私はセシルズ・サンなのだから」

そして小屋を振り返ると、

「ここはね、義父おやじの生まれ育った場所なんだ。2050年頃には環

境破壊が深刻で、この辺りも湿地帯になって人が住むには少し難しい場所だった。ウォーカー家は先祖代々の土地にしがみ付いて暮らしていた。

義父が24世紀に来て、初めてこの土地を訪れた時、ここは森になっていたそうだ。持ち主は『連合（EU）』の規約から不在地主に認定されてしまい、売りがついていた。EUでは不在地主は投機目的と認定され高額納税を押し付けられるからね。義父はTPから承諾を得てここを買い、家を建てた。

義父は当時の家を思い出しながら小屋を再現したが、昔ながらの工法で建てることに固執した建築士が暖炉や煙突を設計に加えると、義父はそんなものはいらぬ、設備は現代の物を、と譲らなかつたそうだ。思い出の中に生きるのではない。義父はそう言っていた。非番の日が2日もあればここへやって来て過ごす。私を伴うこともあれば独りの時も多かつた。何を考えていたのか、今なら分かる気もするよ」

自分は、どうだったろうかと、スペンドはふとそう思う。父母の記憶は残っているが、今では懐かしさだけがある。決して平穏な生活でも時代でもなかつた。貧困に喘ぎながら自分を苦勞して育てたであろう両親は、戦争初日の一斉自爆核攻撃で瓦礫の中に消えた。セシル・ウォーカーはその両親と同じ頃の生まれだ。あの戦争へと世界が滑り落ちて行く直前に24世紀へと迎えられ、TPで順当に昇進した。そして彼の義理の息子も夜霧の中で消えて行く運命から救われた。親子共々運が良い。しかし、本当にそうであつたのかは本人だけが知っている。

スペンドの生。狂気の時代。最後の核戦争。世界人口の半数を失う史上最悪の戦い。その中でゴキブリのように生き残り、生き残るためだけに争い、人を殺し、そしてそのか細い生すら諦めたその時に彼等がやって来た。それは運が良いとは言わないだろうか？

「あなたは、運のいい人ですね」

スペンドの口調に棘はない。だからジョーも素直に頷く。

「あらゆる意味でね。『運』という言葉は抽象以外で使ったとしたら、我々はTP士官として失格者なのかも知れないが、それでも私は運がいいのだろう。偶然という言葉は因果律否定によってますます意味深な現象となったけれど、私はその偶然を多く得て来ているのは間違いないところだからね」

すっかり日は暮れた。小屋には自動で明りが灯り、元から点いていた部屋の明りは夕暮れ時にふさわしい薄いアンバー色に変わる。

ジョーはポン、と手を打つと、

「さあ、飯の支度をしようじゃないか。腹が減った。君、ジビエは大丈夫だろうな？頼んでおいた処理済の野ウサギと鴨が届いている。この時期は秋よりは味が落ちるが、南米ほんぶではまずお目に掛かれない代物さ」

「お忘れですか？私はウエールズの出身です」

「了解した。今夜は大陸の酒ワインなんか飲むもんか。どこかにハイランドの20年ものが眠っているはずさ。それとも『本物の』ビーフィーターズ・ジンがいいかな？」

「あればどちらも」

「よろしい。では、相棒、出陣といこう」

日付も変わり、午前3時。

スペンドは自分に宛がわれた部屋のアンティークなベッドに寝転がり、窓から差し掛かる月光が作る紋様のような影を見ていた。ジョーの料理の腕は大したもので、鴨のローストもウサギのシチューもロンドンの老舗パブでお目に掛かるような代物、ハイランドスコッチの芳醇な香りと共に、彼は久々に寛いだ気分になっていた。

食事も酒もいささか量を超した彼は、夜半に目を覚ましてしまい、そのままベッドでぼんやりとしていたのだ。喉の渴きを覚え、水を飲もうと立ち上がる。ふと、窓の外を見やる、と、そこに・・・ジ

ヨーがいた。

彼は湯気の立つマグを丸太のテーブルに置いて、何か独り言を呟き始めた。

スペンドは急ぎトランクからデジタル式双眼鏡を取り出し、目の前に浮遊させ、マイクログラグへ音声を流す。

「・・・そう。では、彼女はやっぱりあそこにいたんだね？・・・そう、それを疑っていたから出張ったのさ・・・いいや、確認をしたかったただだよ、スキーをやるにはちと・・・いやジョークジョーク、それはないよ。全く疑り深い・・・ああ、そうだね。シンデイの腕は知つての通りだし、他の2名も保証するよ。ああ、それで思い出した。ねえ？これが一段落したらウチの人員にもう一名プラスしてもいいかな？・・・その通り。御明察。・・・ああ、分かっただよ、総務のことはよく知っている。そこを00のご威光つてやつでさ・・・ごめん、それも分かつているけどさ・・・え？彼女が？・・・まあ、そう言いたくなるのも分かるけどね、そんなことはないと思う。彼女は絶対に諦めない。きつと狙ってくる。・・・うん、くれぐれも気を付けるよ。・・・ハハハ、それはいい、今度教えてね。では、又」

スペンドはヨーが立ち上がると素早く双眼鏡を外し、トランクへ入れ、自分はベッドに入る。と、同時に人影が月光を通して床に映る。スペンドはじっとして動かなかつた。やがて影がさつと離れ、消える。後は紋様が不思議な陰影を床に描いているだけだ。

ヨーは生体送受信機マイクログラグを通じて遠距離通話をしていた。長距離通話は思うだけでは感度が落ちる。声を出していたのがその証拠。あの様子では地球の裏側にだって届きそうな通信だった。と言うことは、南米・TP本部というのがまずはやまは妥当な推理だが・・・一体誰と話をしていたのだろうか？

(現在年月)

最早少年は彼専属のキーパーを女と認識していない。

24世紀は男女の差を、DNAそして「付いているか否か」でのみ判断する時代ではあるが、ここは男尊女卑がしぶとく最後まで生き残った過酷な土地柄、少年もその深層に彼の祖先が抱えていた男女性感を持っている。しかもスポーツは未だ男女差を認めざるを得ないものである。

そんな彼が、キーパーの性別を意識しなくなるまで時間は掛からなかった。

初日の僅か30分、彼は夢中で左脚を振り抜いたがゴールを割ることは出来なかった。その動きからキーパーを買って出た異邦人の女が、サッカーに関しては見て知っている程度の知識しかない、と見破ったものの、その身体能力は彼が知る全ての人間を凌駕していて、彼は女に畏怖を感じ始めた。

真の闇にフィールドが陥る前に女はボールを手渡しして、ここまでだ、坊や、と言う。

「お姉さんは明日も来る？」

「いいや。明後日寄るかもしれない」

「それ、夕方？」

「寄るとしたら同じ時間だ」

「じゃあ、ここに来てよ、また30分だけでいいからキーパーしてくれない？」

「約束は出来ない」

「構わないよ。試合は10日後、メンバーはその3日前に発表されるんだ。」

シンディは軽く手を挙げて、歩み去った。少年はドリブルしながら帰路に着いたが、ホバーの音にふと振り返ると、彼女の車のヘッドライトが一瞬暗闇に跳ってからふっと消える。来てくれるといいな。少数民族のカテゴリーに属する彼にはチームに友だちがいなか

った。

2日後。

彼は独りでボールを蹴りながら待っていたが、結局彼女は現れなかった。

所詮旅行者の少し長いだけの滞在、地元の素姓の知れない子供の相手など真剣には考える訳がない。彼はそう考えると肩を落とす。

その翌日。

彼がチーム練習の後で、何時ものように居残って練習していると、甲高い指笛がする。さっと振り返ると、彼は破顔し、思い切りボールを蹴った。

ボールは指笛の人物目掛け飛んで行く。そのボールを胸でトラップして蹴り返した人物は小走りに彼に近付き、バイオマスボトルのミネラルウォーターを投げる。少年はそれをキャッチすると、「ありがとう。昨日来なかったからもう会えないと思ったよ」

シンディもボトルのキャップを外すと一口飲んで、

「済まなかった。用事があったね」

「やってくれるんでしょう?」

「ああ。いいよ」

シンディはゴールポストの下へ行き、少年は架空のフリーキックの位置からボールを蹴る。この日も辺りが暗闇に閉ざされるまで練習は続いた。

その日から毎日、シンディは夕暮れ時にやって来て30分ほど彼の練習を手伝い、ボールが見えなくなると、今日はここまで、と去って行った。

5日後。

15歳以下のこの地区代表チームのメンバーに少年の名前があった。補欠として州都へ行くことになった少年は、先発メンバーからは外れたものの、コーチに練習の成果が出ていると言われ満足だった。

た。

何時ものようにボールを蹴りながら待っていると、彼女がやって来た。結果を彼女に伝えると、彼女は感情の籠もらない声で言葉少なく祝福する。それが彼女のスタイルなのだ、と既に少年も了解していた。

少しボールをやり取りした後で少年は、

「お姉さんは、見に来れる？試合」

「申し訳ないが、明後日には出発しなくちゃならない」

「国へ？」

「そのようなものだ」

「残念だな・・・でも、本当にありがとう、練習に付き合ってくれて」

すると少年が少し驚いたことに、彼女の顔に微笑が浮かぶ。笑顔を見せたことがなかった彼女の笑みは浮かぶと直ぐに消えてしまったが、少年の脳裏に焼き付いた。

「人に見せるためでなく自分のためにする努力は・・・」

彼女の声はこの時間、常に吹いている西風の音に負けず力強い。

「いつか必ず見返りがあるものさ。今の気持ちを忘れないことだ」

彼女は少年の肩をぽん、と叩くと去って行く。これでさよならだと少年は気付く。

「ありがとう、お姉さん。最後に、お願い!!」

彼女が振り向くと少年は西風に向かって大声で、

「僕、セルヒオって言うんだ！お姉さん、名前を覚えてよ!」

「シンディ、だ」

「ありがとう、シンディ!」

大きく手を振る少年に彼女は手を上げ、後は土手の陰に入って見えなくなるまで振り返らなかった。

少年のチームは3日間の大会で10チーム中4位の成績を上げた。少年は5試合の内、2試合途中から出場して、3回シュートを放つ

たが得点はならなかった。

チームはコーチの運転するホバーバスで4日振りに町へ帰って来た。すると、町の競技場の脇に停まったバスの中から、驚きの声がかかる。

「おい、みんな、見ろよ！」

「すげえ、ネットだ、ネットが張ってある！」

少年たちは転げるように走り出すと、片方のゴールを囲む。錆びていたゴールは白くペンキが塗られ、真新しいネットが張ってあった。もちろん反対側のゴールも白く輝いている。すると少年の一人がその文字を発見した。

「『己を信じて精進するものは次の段階への扉を開く』・・・？」

それはゴールの裏側、クロスバーにカステイリーリヤ語で書かれた何かの警句だった。

事情は簡単な打ち上げの時、コーチから知らされた。ある篤志家が少年たちが帰る前に直して欲しいと町に寄付をし、町は大急ぎでネットを購入し塗装を施したという。これでボール拾いを置かなくてもシユート練習出来る、とレギュラーのフォワードが叫ぶと、全員が歓声を上げた。その篤志家は名乗ることも素姓を明かすことも拒否したそうだとコーチは告げ、その人に感謝を捧げよう、と手を組むと、皆、神妙に手を組んで、感謝の祈りを呟く。

そんな中、ある少年だけは皆と違う言葉を呟いていた。

「ありがとう、シンディ。あなたは本当に最高の人だ」

## Episode 06：再起動（前）

STP本部・マシン発着場 2374年08月（現在年月）

「82便発進まで30s」  
「509便到着。ラグブース125にて待機。予定35m」  
「94便整備班、時間がないぞ、急げ！」  
「次着は592便。3着は601便、何れも予定通り」  
「82便発進まで20s。変更なし」  
「306便実体化まで3m30s。整備班はラグブース111前へ  
集合せよ」

発進管制と到着管制の声が入り乱れる。全てをコンピュータプログラミングされたエアプレーンや宇宙往還機スペースプレーンの発着管制と違い、タイムマシンの発着管制は旧時代的な人為管制だった。理由は簡単、あまりにも複雑過ぎるのだ。

もちろん、コンピュータしても管制は無理なく行なわれるだろう。割り込みや不測の事態にすら完璧に機能する。この手の管制用プログラミングとマシンの信頼度は9が2つ並んだ後の小数点以下9が9つ並ぶ代物。けちの付けようはない。

問題はその指示を行なう人間側にあった。こちらも高性能のピッカーや単純作業用のロボットに任せれば人間など不要だろう。しかし、作業は行なえても判断が追いつかない。余りにもフアジーな要素だらけのタイムマシンの発着は、指示を出した瞬間に現場判断で指示を歪曲させる必要が生じることなど日常風景であり、そうしたものに優先順位などない。

機械たちはプログラミング通りこなし、例え不測の事態でも優先順位で解決を図ろうとするが、たとえば同じ条件が2つ重なった場

合はどうなるのか？プログラムではコードナンバーの末尾奇数を優先するとか乱数を参照し指示を出し直すなどの抽選機能があるが、その結果大事故に繋がる危険も高い。結局人間の経験と咄嗟の第6感がものを言う。

今しも大混乱にしか見えない発着場の光景は、指示を出す側出される側の阿吽の呼吸と現場で培われた経験とで、実は整然とした光景なのだ。

「94便整備！用意はよろしいか！後2mだぞ！」

「りよ、う、か、い！」

整備班のトレードマークである草色のキャップを、庇を後ろに被る少女は悪態を付く。

「1m10s前に終わるから黙ってる、っの」

もちろん生体マイクはオフになっている。長い金髪をポニーテールにして、更にキャップに押し込んでいる彼女は、点検ルーチン項目の最後のページに素早くチェックを付けると、ホログラム架空の細いフレキシブルワイヤーをコンセントから抜き、浮かぶ点検表の擬似窓を閉じる。素早く点検口を閉めると、その『マシン』の肩を叩いて、

「はい、終了。ランスロット、いい？バズほどじゃないにしても、あんたも身体の54%が新品なんだからね、いくらチェックしても初期不良の可能性はあるんだから、今回は無茶禁物、いいね？」  
「承知しておりますとも、ニー様。では行って参ります、ごきげんよう」

目の前の銀色のロボットが瞬時に中世の騎士へと変わる。さっと帽子を取ると、お辞儀をし、瞬く間に消えた。

それを見送ったニーは思わず十字を切る。先代のクイーンがバラバラのメタル片と化して戻って来た時に号泣した彼女。ニーにとってピッカーは自分の子供のようなものだった。

「棟梁、終わったよ！」

「はいよ、ニー、ご苦労さん」

巨漢の整備班長、ラバットは野太い声で、

「管制、94便整備だ。コンプリート」

「了解94便整備。スタンバイ」

「了解。94便整備、さがるぞ！」

マシンの前に並んでいた整備班員たちは、敬礼すると口々にグッドラックやら成果を期待しますやら、それぞれの決まり文句を進発する機動執行班員に手向け、ホバーに乗り込む。ニーが投げキッスをしてホバーによじ登り、お決まりの位置、屋根上に陣取ると、最後にラバットがきちんと敬礼し、

「隊長。お気を付けて」

「ありがとう、ラバット。行って来る」

シンデイもきちんと敬礼し、振り返ると、

「行こう」

3人の班員も整備班に向けて敬礼し、マシンに乗り込んだ。

全くの日常風景。しかしマシンを後に待機所に向かうホバーでは、ニーが心配顔でそのマシンを目で追っていた。

「棟梁」

「なんだ、ニー」

マイクログの秘話モードでニーはラバットに声を掛ける。

「スペンドたち、大丈夫だと思う？」

「心配か」

「うん。あんなことがあったし。それに作戦部は何だか彼らを厄介者にしてる、って噂もあるし」

屋根上でニーは片手で身体を支え、発着場の大天井を仰ぎ見る。

その下、ホバーの運転台横に座ったラバットは、

「心配しても始まらない。俺たちキカイヤ風情にはお上のことなど分からんからな。きつと大丈夫だ、あの人たちはベテランの精鋭、危険は回避するよ」

ラバットは密かに溜息を吐くと秘話にも拘らず声を潜め、

「それに『タフィーズ・サン』が加わってるんだ、何とかするよ。」

その危険が内側にあるうがなんだろうが、な」

ニーは浮かぬ顔で、隣の発着ゲートに停まったホバーから滑り降りる。と、降り立った時にはそんな懸念を微塵にも感じさせずにホバーの整備班員におどけて敬礼する。

「まったねー！」

走り去るホバーを後に、彼女は次の発進前ピッカーのチェックへ向かう。ピッカーの権威である彼女。このラッシュ時間帯は休む間がない。

「無事に帰って来てよ、みんな」

300メートル先、既にマシンが旅立ったゲートを見つめた彼女の独り言は、様々な騒音が消し去った。

§時空走路ルート7 2374年08月（現在年月）

AD機動執行4班のいつもの光景が変化していた。

マシンの乗員室を4分割、そしてその3つ分を3人が占め、残りが空いていたところに新メンバーが座る。

ジョーはリラックスしていて、これが4人になって初の出勤だと言うのに気負いは全く見られない。逆にスペンドは、彼を憚ってか何時もの軽口が少ない。ウインは今回の『ゲームブック』を熱心に繰っていて、シンディは何時ものシンディ、腕を組み目を瞑っている。

「スペンド」

ジョーが気さくに声をかけると、

「何ですか？」

「君らは何時もこんな調子なのかい？」

「まあ、こんなもんです。ブリーフティングはほとんどやらないし、話すことも雑談、これはもっぱら私とウインの2人ですがね」

「ほとんどスペンドが私をからかう、って言うのが真相ですが」  
ウインが割って入り訂正する。

「なるほど」

「ジョーは笑うと、」

「では聞くが、戦闘態勢フォーメーションはどうしたらいい？」

「何も。特に決まってるませんよ。その時に応じて隊長が決めます。

まあ、ボスが真ん中、って言うのはどこもそうでしょうが、ウチでも大体そうです」

「大体、ね」

再びジョーは苦笑する。

「では、好き勝手にやれ、そう言う訳か」

「臨機応変に、ってことで。私が知る限りそれで200回ほどやって来ましたから」

「ではせいぜい足を引つ張らないようにやらせてもらおうよ」

ジョーはそう言うのと目を閉じ、シンディとそっくり同じ格好で眠る。ウインはその姿を横目に、スペンドへ秘話を送る。

「旧連合王国ユークで何を話したんだい？」

「特に何も。丸太小屋で鴨食いながら身の上話や世間話、休暇の一齣いちぶってやつ」

「ログハウスか・・・牧歌的だね」

「まあね」

「どうした？何時もの君らしくないぞ」

「人間は成長するんですよ、旦那」

「ほざいたね。毒気に当てられたって顔だがね」

「それも正解。この兄貴の生き様はちよっと出来過ぎですよ。自分が惨めになってくる」

「TPではシンディと並ぶ有名人だからね。お父さんの件もある。

だが、親の七光りと言わせないだけの実績や実力もある・・・今回の異動、彼が説明した以上の裏があるね」

「やっぱりそういうことになるか・・・」

「その点、何か言つてなかつたのかい？」

「ぜんぜん。身の上話はしたものの現在の状況に関する話は全く。それでいて嫌味も格好付けもないからね。事情を知らなきゃすつかり騙されるところだ。喰えない人ですよ」

「機動執行一喰えない君がそれを言うんだ、相当なものだね」

スペンドはシートに預けた身体を起こすと90度左に転寝をする。ジヨーを見る。呆れたように肩を竦めるが、その目は鋭い。

「その喰えない兄さんが一体俺たちとどんな『ワルツ』を踊るのか・  
・ 実際楽しみだと言つたら不謹慎かな？」

§ パンノニア（ハンガリー）・アクインクム近郊ドナウ河付近  
451年06月（到達年月） 2374年08月（現在年月）

TP5世紀駐在隊の情報部常駐指揮官、マスケレイド中佐はすっかり諦め切っていた。

ゲルマン民族の大移動へ繋がるフン族の東ヨーロッパ侵入、ローマ帝国の東西分裂という世界史の一大イベントのあるこの前の世紀、4世紀と違ってこの5世紀は1にも2にもアッティラだった。

西ローマを滅ぼしたとされる傭兵隊長オドアケルやローマを荒らし回ったヴァンダルの王ガイセリック、フランク族や東西ゴート族にも目立つ指導者が登場するのだが、ヨーロッパ地区ではアッティラに及ぶ者はいない。いや、世界を見回しても、だ。

それでもAD担当部署としてはTCに狙われる回数が多い世紀であり、花形であるはずだった。

中佐も前任地、10世紀という神聖ローマやフランス、宋が成立するといイベントがあるもののTCには余り人気の無い世紀担当よりは充実した時を過ごせるもの、と考えていたのだが。

「随分と長い間、こいつらのことは謎だった。今ではモンゴリアからやって来た騎馬民族がおよそ1世紀の時間を経て、中央アジア平原の原住民と融合した複合騎馬民族集団だと判明している」

中佐は歴史の教師然とした話し振りで全般の状況を語る。情報部の駐在員を長くやっている者に多いタイプだった。

「君らも知っているだろうが、ADの初期は、まあなんとというか、ダイナミックだね。度重なるイベントにゲームブックや年記は真っ黒だ。歴史はここで大きく方向付けされたのだから、TCにとって目標に事欠かない、『お客』は一杯いるよ。ただし、こんなところで商売は出来ないからマニアックなTCばかりだね。歴史改変マニア、観光ついでが悪戯、アッティラを殺して世界の英雄になるという幻想・・・」

彼は話しながら自分の持ち場を思っただ次第にネガティブになっただけ。立ったまま傾聴していたシンディはそこで脚を僅かに踏み変えると、

「それで、今回の予兆とは何ですか？」

「そうだったな。まあ、これを見てくれ」

マスクレイド中佐は話の腰を折られても別段気分を害することなく、今回4班が送られるきっかけとなった出来事を話す。

「最初は些細なことだったんだ」

中佐は居並ぶ4班全員に見えるよう、擬似窓を最大サイズに拡大し自分の背後に映し出す。それは常時監視用のモニターで、巨大な天幕とその下に展開される光景の静止画だった。

「アッティラのゲームブックを参照したまえ。これが記録された46年、奴は東ローマの首都コンスタンチノープルを包囲して皇帝を脅し、およそ金700キロやらなにやら大量の戦利品を得ている王になって2年間でフンの勢力は最大となり、東西ローマの命運は風前の灯だった。ゲルマンのほぼ半分を押さえ従えた奴らは、得意の弓射と巧みな騎馬運用でローマ配下のゲルマンやガリヤの諸民族ばかりでなく、ローマ本隊の重装歩兵をも圧倒した訳だ。まあ、歴

史はこのくらいにして・・・」

中佐が擬似窓に向かって何やら呟くと、3次元の荒い画像が動き出す。

「これは奴らの本営、いわば首都の王宮だ。伝統的に移動で成り立つ民族なので建物をほとんど造らない。アジアの平原地帯に暮らす遊牧民族たちはこうした天幕を上手に使って、かなり大規模な住居も仮設する。いいかな？あと10sほどである事件が起こる。見たまえ」

それは食事の風景のようで、一段高く設えた真ん中、正に玉座に座り折り畳み式のテーブルに並べられた様々な肉類や荒削りの木の器に盛られた料理を頬張るのがアツティラだろ。陽に焼けた丸い顔に髭を蓄えた眼光鋭い男で、その伝聞からの想像を裏切る意外と華奢な体付きだ。周りには大勢の男女がかし使えたり食事をしたりしていて、その雑然とした感じは込み合ったビアホールといった感じだった。

すると、その中の一人の男が隣の男と口論を始める。ローマ風の皮の甲冑を纏った若い男と上半身裸で腰布姿の中年。騒ぎは次第に大きくなり周りの者が止めに入る。するとアツティラが立ち上がり、無言で人々が空ける隙間を縫って2人の所へ行くと、腰に下げた蛮刀を抜きざま甲冑の男を切り捨て、返す刃で中年の首を刎ねる。そして何事も無かったかのように自分の席に戻り、食事を再開した。静まり返った周囲も直ぐに活気を取り戻し、遺体はすぐさま数人の奴隷が片付けた。映像はそこで停止する。

「全く何時もの情景だ」

中佐はやれやれとばかりに吐息を吐く。

「野蠻も見慣れると喜劇に思えてしまうな。そろそろ私もメンタルチェックを受けるべきか・・・」

しかし動じた様子もないシンディたちを見ると咳払いを一つして、

「ご覧頂いたものは2週間ほど前に記録された。次は同じ年紀同日同時刻を5日前に記録したもの、続けて3日前に記録したものと連続して見て貰いたい」

同じ食事の光景、口論、殺害と続く。そして再び・・・。  
「如何かな？」

中佐はシンデイに問い掛ける。

「シンクロしていませんね。目立つラグが生じている。それに最後のものには別要素が加わった。予兆ですね」

「全く持つてその通り。そこで君らと呼んだ訳だ」

過去の歴史は航跡のようなもの、と説明されることが多い。本物の航跡が次第に広がり薄くなって行くように、歴史の記憶も緩やかになり、実際に起きた事象が僅かに変形して行く。それはおよそ3000年を掛けて変化し消えて行くが、通常は数日、数ヶ月の変化ではその『歪み』や『変形』は僅かで、気付くほどのものではない。それは時間の変化として良く現れる。分かり易く例えば10分ちようどである事象が完結したとすると、100年後は10分5秒で、2000年後は11分40秒で完結する、というようなことである。これも決まった経過時間の変化が起きるのではなく、2000年経つても全く時間の変化が現れない事象もあれば半日ほどずれてしまう事象もある。

また、『別要素』といわれるものも生じる。そこにいるべき人間がいなかったり新たな人物が現れたり、些細な点から大きな点まで実に様々だ。そしてこれらの状況を観察することで、異常に早い変化や別要素の添加からTCの介入が近い、という予兆が示される。

TPやTC、僅かに認められているツーリストや研究者たちが時空を移動し、目的の年紀に到達するとそこに歪みが生じる。それは航跡の例えで言えば、ある船の航跡に近づく別の小船の波であり、その結果はかなりはつきりとした予兆から細かいものまであらゆる場合が想定され観察されて来た。最近ではその研究成果として、か

なりピンポイントで、時空を越えやって来る対象の目的地や目標が分かるようになった。結果、それが許可された時空間移動か否かスケジュールを最初に確かめておけば、それ以外の『予兆』は全て許可されないもの、つまりTCによるものだと判断されるのだ。

「検証課の計算では95%の確率でTCの事前偵察だそうだ。可能性の高いシナリオはアッティラの謀殺、最後にご覧頂いた記録に見える女を使って刺殺する方法が考えられる。自ら手を下さない知能犯だね」

中佐は擬似窓を変化させ、そこにこの時代のヨーロッパ全土の地図を示すと、

「フン族は『神の鞭』と恐れられる王を失い、結果、51年のカタラウヌムの戦いは発生せず、フン族は内部分裂と隙を見て立ち上がるゲルマン諸民族によって歴史から消える。また、その余波は東西ローマやゲルマン民族の行く末に微妙に影響し、歴史の回復力では到底修復しきれない傷を残すことになるだろう。結果、歴史は分岐しました一つパラレルを生むことになる。これが予測課のシナリオだ」  
「では、待機はこの年紀で？」

「それがいいだろう、という結論だ。最終的には侵入警報と共に命令が下る。君らにとっては何時ものことだろう？」

その何時ものことが結構大変だ、ということだ。スペンドはそう考えると軽いマナー違反で素早くタブレットを口に放り込んだ。

#### § 同地・同年紀同日40分後

4班に与えられた部屋は縦に8メートル間口が3・5メートルほどの細長い部屋で、2段ベッドを両側に間は一人が擦り抜けるのが精一杯、他に小さなロッカーが2つずつベッドの際に並んでいる

ただだ。椅子やテーブルはなく、座るにもベッドに腰掛けるしかない。トイレや水場、シャワールームは付属せず、通路を隔てて別にある。

と言っても、それは4班が冷遇されている訳ではない。それぞれの世紀に常駐する駐在員のための施設は、亜空間に構築されたまるで月面コロニーのような施設で、窓もなく狭かった。ぶどうの房状に並んだポッドが十幾つ並んでいるだけで、ここにおよそ30名が常駐している。これはまだ良い方で、TCに人気のない世紀ではポッドが数部屋、常駐僅か10名の拠点もある。

「さあ、穴居人の暮らしは何日続くかな」

ジョーが誰ともなく言うと、スペンドが、

「俺は最長5日間だったけど、皆さんは？」

「10日だな」

と、これはウイン。彼は部屋に入るなり制服を脱ぎ腕を捲くり、さっさと右側下段のベッドに身体を投げている。

「チンギス・ハーンをなんとかしようとした連中だったが・・・例のジンクスのせいか現れなかった」

「なるほどね。私は2週間待ったよ」

ジョーは左側の上から見下ろしている。

「エカテリーナ1世を不倶戴天の敵と言って憚らない、少しぶっ飛んだTCだったが・・・」

「皆さん、中々楽しい毎日を送ってらっしゃるんですね」

皮肉とも冗談とも取れる言い方でスペンドが呟くように言う。彼はジョーの下、ウインの方を向いて座っている。

「それで、スケジュール通りですか、シンディ」

「ああ」

スペンドの問いに答えたシンディはウインの上、スペンドからは姿が見えなかった。

「そのスケジュールとやらを、私にも教えてくれるかな？」

ジョーが尋ねるとウインが多少自嘲気味に、

「スケジュールと言っても、別段何がある訳でもないですよ。合同トレーニングの時にも話しましたが、訓練も自分のペース、作戦もスタンドプレー中心、プライベートに干渉しない、これが4班の基準ですからね。ま、各自自由で、召集には遅れず、といったところで」

「了解した。では、ジムにでも行って少し汗をかいてくるか」

ジヨ―はまるで宇宙空間であるかのように2段ベッドの上段から飛び降りたが、タンツと乾いた音一つしただけだった。そこでスペンドの顔を見たが、スペンドが表情を殺して無表情に努めていることを知ると肩を竦め、後はさっさとドアの外へ消えた。

「じゃあ、俺は一つ風呂浴びて来ます」

スペンドはゆっくり立ち上がると上着を脱ぎ、廊下に出る。肩にタオルを引つ掛けて歩く姿は正しくシャワーを浴びに行く姿ではない。しかし、彼は20メートルほど先にあるシャワールームを通り過ぎてしまう。そのまま20メートル先の枝分かれする通路まで来ると、素早く左右を見渡し、壁に身体を押し付けると、先ずは左側へ分岐する通路を覗き見る。続けて右側。

( B I N G O )

ジヨ―の後姿があるドアに吸い込まれるようにして消える瞬間を目撃したのだ。ジムは左側の通路の先にあった。スペンドはゆつくりと右側の通路に入り、今しがたジヨ―が入ったドアに描かれた文字を通りすかりに読む。『通信室』。

スペンドはそのまま通り過ぎ、通路の末端にある休憩スペースのソファに腰掛ける。深々と沈み込むと制服のポケットから手品のようにタブレットを取り出し、口へ放り込む。目を閉じ、何とも言えない苦味が口中一杯に広がって行くと深々と息を吐き出した。

( やっぱりあんた、喰えない人だな。ジヨ― )

ビツ・ビツ・ビー！

「機動執行4班、召集！発着ブースへ集合せよ」

マイクロタグが震えんばかりの警告音と共に召集が掛かったその時、スペンドは食堂にいて、遅い昼食を採っているところだった。食が進まず突<sup>つ</sup>いていただけの昼食のプレートにフォークを投げ出すと食堂を走り出る。食堂には3名ほどいたが誰も見やるものはいなかった。全く何時もの光景だったからだ。

発着ブースに飛び込むと、5世紀担当の整備班と補給担当たちが彼らのマシンを取り囲んでおり、ウインが既に自分の追隨カーゴを点検している。すると、補給担当の一人がスペンドに近付くなり疑似窓を滑らせてよこす。スペンドは並ぶリストに目を走らせ、慣れた仕草で次々にチエックを入れた。個人装備の追隨カーゴにスペンドが望む追加物品が自動的に搬入されて行く。

「ステイックの自動装填式予備バッテリーをあと2つ、だって？あんたもかい？」

投げ返されたりリストに目を走らせた補給担当が思わず口に出す。

「それに拡散防壁アタッチメント・・・予備のステイック・・・あんたら、ローマにでも攻め上るつもりか？」

そうか、ウインの旦那も用心したのか。スペンドの顔に笑みが浮かぶ。

「だめか？5世紀のストックが尽きるかい？」

「そんなヤワじゃないが、2000人は相手出来るぜ？そんなにぶっ放してどうするのか、と思っつてね。」

と、彼はそこで秘話に変えて、

「そんなに大勢やって来るのかよ？TCは<sup>やっくら</sup>」

「安心しな。俺たちは用心深いんだ。最低4つは余らせて返すよ」

「まあ、持ってきたな。俺が戦う訳じゃない、文句は言わんよ」

そう、あんたは戦う訳じゃない、余ることを俺も祈ってるよ。ス

ペンドは生体マイクをオフにすると心でそう呟いた。

「・・・3m過ぎた。そろそろ到着した頃だ。24世紀から直行したならラグは1h前後、但し一旦どこかに寄っている可能性は捨て切れない」

マスキレイド中佐がシンディに話している。ジムで身体を苛めた後、シャワーを浴びている最中に警報を受けた彼女は下着姿のまま中佐の話を聞いていた。鍛えたスリムな体型が露になっているが、そこにいる全員がプロ、見とれる人間はいない。ようやく女性士官が駆け寄ってバトルスーツを渡す。彼女は時間を無駄にせず、その場で手際よくその光学迷彩スーツを身に付けながら中佐に相槌を打った。

「ウチの解析班トレーサーは優秀だね。24世紀から直行したと確信している、と言っているがね」

「参考にします」

そっけなくシンディは返す。中佐は肩を竦めると、

「確認するが予測通りだと現世紀時間1750から1830の間が危険域、例の事象は1808から09に掛けて発生する。注意人物はフランク族の女。いいかね？」

「確認しました」

「王宮はウチの者が見張っている。君たちは危険域30m前まで前進ポイントで待機、その後監視を含めて引き渡す。変更はないね？」

「結構です。緊急の場合は中佐のお考えでどうぞ」

「了解した。幸運を」

中佐は敬礼すると離れる。その頃にはジョーもやって来ていて整備を受領し、追隨カーゴの機能チェックを終えるところだった。一足先にチェックを終えたスペンドは、いち早く列線に立って待っていたウインの横に並ぶ。

シンディは自分の装備を素早くチェックすると追隨カーゴのボディを数箇所叩く。彼女の叩いた場所は次々と穴が開き、彼女が思考

した物品が飛び出して来る。側面のある場所を2回叩くと穴から出て来た物品が収納され、素早く閉じた。チェックに満足した彼女が頷くと、隣に立っていた整備班長が擬似窓を操作、シンディの追隨カーゴは消える。

見るとピツカー4体もマシンの自分たちの収納区画へ入るところで、最後に入る『宇宙飛行士』が敬礼し、ハッチが閉じる。準備は完了した。

4班の全員が敬礼すると、列線に並んだ整備や常駐捜査員たちが敬礼する。4人は駆け足でハッチを潜り、予めセットされたマシンは速やかに発進し、消え去った。

世紀常駐者たちのベースは、ほぼその世紀の中期に『漂流』している。時空走路でもある虚数域の亜空間に構築され、まるで静止衛星のようにその場所に居続ける。『静止』衛星が静止していないのと同じく、時間の経過に反比例して逆行し、同じ年紀に居続けるのだった。

「さて、どうします？」

マシンが走路に乗ると、ジョーがシンディに声を掛ける。彼はシートに凭れたまま、環境映像が流れる目の前のスクリーンの右端に、3人の表情が映る。

ジョーは期待に胸を膨らませる少年と言った風。シンディは相変わらず無表情に目を瞑ったまま、

「とりあえずはマシン内待機、現地時間1750時に保護対象の近くまで接近し、直接警護とする」

シンディはそこでじろりとスクリーンを見つめ、

「TCがどんな手で対象を害するのか分からない。ひとまず集団で行動する。ミッションの優先順位はブリーフティング通り、スペインド？」

「第一、アツティラの防衛、第二、TCの逮捕、第三、年紀の最大限の保護維持」

スペンドはさらりとブリーフィングで達せられた優先順位を言う。

「ありがとう。何かあるか？」

「いいかな？」

と、これはジョー。

「どうぞ。」

「万が一別行動になった場合、再集合ポイントはマシンと言うことだが、それまでは臨機応変、独断専行で構わない、それに変更はないね？」

ジョーの言葉の端々に浮かれた何かが感じられる。

「それはそれでいい、が、ジョー。無理やり離脱は、なしだ、いいね？」

「分かった、隊長」

黙って聞いていたウインは微かに胸騒ぎを感じるが、何も言わなかった。

今回の目標は447年7月。5世紀のベースはTCの介入が多い西ローマとフンの決戦、カタラウヌムの戦いが発生する451年の6月に作られていた。

4年の『逆航』はおよそ3分間。タイムラグ修正に30秒ほど。殆ど乗ったと思ったら着いていた、という状態だ。

「時間を確認する。AD447、JULY、08、1529、・・・38・・・39・・・40」

タイムラグ調整終了を知らせる警告音と共にシンデイが時刻合わせを指示する。それぞれ自分の擬似窓を確認していた全員が「確認」と声を出す。

「虚数域係数・・・一致。船内外均衡。それではみんな、暫く待機だ」

## Episode 06：再起動（後）

§ 同地・447年7月・2時間後

山海の珍味を並べた食卓。警護と側近たち、周辺国から人質として差し出され保護されている人々の吐く息で咽るような空気の中、乾いた銅鑼の音が3回響く。張り詰めたように立ち尽くす人々、その姿は実に様々だ。

緋色のギリシャ風民族衣装を纏う者、ローマの皮甲を身に付ける者、ペルシャ風のチェニツクを着る者、スキタイ系の皮兜を被る者、ブングルドの、東ゴートの、フランクの、ゲピートの、ゲルマン諸民族の女たち・・・征服し従順させた人々がひれ伏す中、神の鞭アツティラが登場する。

「クイーン。ミッション・カウント・スタート」  
シンデイがタグを通して囁く。

「現年紀時間1738。警戒域まで12m。待機続行」

5世紀巡回警備班が監視を引き継ぎ、現場を離れると4班は王宮とされる巨大天幕の『天井』に陣取り、間もなく現れたアツティラを迎えていた。

360度全方向、全面に擬似窓を広げ眺める中、まるでシネマのように歴史が展開して行く。見つめるスペンドは思う、こいつは何度経験しても緊張する、と。それは神の目線、擬似窓のせいで宙に浮く感覚、しかも見ている相手は彼らを見ることも感じることも出来ないのだ。

アツティラは巨木を削って作られた呆れるほど重厚な玉座に座ると、辺りを睥睨する。そこに畏まる誰もがその視線を避け、目を合わせないように伏せている。アツティラは口の端に皮肉な笑みを浮かべると、横に傳かすいたブロンドの髪が輝く青年に何事か囁く。する

とその青年は立ち上がり、美しいテノールで平伏す人々に向かって謳うように何事かを伝える。それを聞いた人々は深々と身を伏せ、王への忠誠を唱えた。

その時。

「シンディ、外の様子がおかしい！」

シンディの耳元に女性の声。スウェーデンの一件で喪失した前任に代わり受領した彼女にとって6番目のピッカー、その名前は変わらずクイーンだった。シンディは素早く擬似窓を開き、外の映像を流すと・・・

人・人・人。

彼方に見えるドナウの流れから手前、埋め尽くすように人が・・・

「これは！」

スペンドが呻いた瞬間。

人の壁が崩れる。何かの合図でもあったのか一斉に雪崩を打つように王の天幕めがけ殺到する。外に配置されていたはずの衛兵の姿は見えない。手に様々な得物を持った人々は閉じた四方の入り口だけでなく天幕の合わせ目から中へと・・・その顔は一様に紅潮し目が異様に光り輝く。

「TCだ！先に行くぞ！」

先に動いたのはジョー。誰もが、シンディですら突発事態に一瞬、思考停止する中での独断専行。緊急開扉用のコードを素早く打ち込むと、光彩を放ち開き始めたゲートへ思い切りよく飛び込む。続けて彼のピッカー、『アン』が続く。

「アン、APCだ！先にピッカーを抑えろ」

「了解」

ジョーは実体化すると目前に現れた天幕を支える丸太組に下がる麻縄に跳びつき、その縄が切れる寸前まで垂直降下、残りの3メートルほどで切れた縄と一緒に飛び降りる。ちょうど玉座の左側、侍

女たちが恐れおののいて潜んでいるテーブルの裏だった。

アンの姿は見えない。亜空間で相手のピツカーと戦っているはずだった。

ジョーは光学迷彩で己の姿が見えず、誰も彼の存在に気付いていないことを確認すると、素早くアツティラの後ろへ回る。立ち上がり辺りを睥睨するその男の周りでは、血生臭い光景が展開されて行く。誰彼構わず振り下ろす棍棒を血に染め、力尽くで人々をなぎ倒すゲピート族の男。刀剣を抜いて相手の腕を狙い、まるで剣舞を踊るかのようなフランクの男。白刃と棍棒、蛮刀と短剣、短槍と投槍。武器を持たぬ者はそこにあるものを投げ返し、折り畳みのテーブルを盾に突破する者もいる。己の生死を賭けて正に死闘が始まった。

ジョーがアツティラの脇に降りた時には既に彼の近衛兵が周りを囲み、押し寄せる群衆に情け容赦なく太刀を振るっていた。常にアツティラの脇に傳くローマ出身の美青年2名も短弓を取り、辺り構わず連射している。それにも関わらず暴漢たちは次から次へと押し寄せ、広い部屋の中は敵も味方も入り乱れて、お互い刀剣や棍棒を振るう余裕がなくなりつつあった。悠然と迫り来る暴漢を睥睨していたアツティラも遂に自ら長槍を取り、押され気味の近衛兵越しに暴漢を射し貫いては抜き、血潮の海を深いものにして行く。

(まずいぞ、これは)

ジョーは押され始めた近衛の兵を見て舌を打つ。

善良そうな人々がどうやって操られたのかは分からない。しかし、この暴徒の数、半端ではない。1000、いや、2000は下らないのではないだろうか？

この本営の周りにはアツティラ直卒のフン族兵士やその家族もいるはずだが、今のところ王宮の異変に気付き馳せ参じる者は少ないようだ。それとも、動きを封じられているのだろうか？

食事中王を護衛していた近衛の兵は50人、近従の者を含めても100人はいない。後は傅き女や奴隷、友好と従属の印にと送られた高貴な者の子息など人質たちと、友好部族の将士などおよそ30

0。今やそれぞれが自分の身を守るのに精一杯で、王の周りを囲む30人ほどが奮迅の戦いをしているだけだ。それも外から玉ねぎの皮を剥がされるように一人、また一人と暴徒の波に吞まれ、浚われて行く。王も冷静に槍を振るってはいるが、それもいつまで持つものか。

ジョーの見ている前で近従の青年が喉に投槍を受ける。ごぼごぼと嫌な音を立て血飛沫が王の袖を染めた。ローマ人の美青年は槍を喉に刺したまま、信じられないといった驚愕の表情を浮かべ、王の方へ手を差し伸べたがそこで力尽き、白目を剥いて崩折れる。アツティラは野獣のように一声吼えたと、手にした槍を迫る暴徒の一人に投げ、その男が顔を射抜かれ叫んでのた打ち回ると、蛮刀を抜き去り、近衛の兵を押しつけて寄せる人の波へ飛び込んだ。

(仕方ない、不磨の大典とやらを破るしかないな)

ジョーは腹を括る。腰に下げたスティックを引き抜くとマシンガンモードにして、前に立っていた近衛の兵を突き飛ばすと暴徒に向けて放つ。ビーム状の高電磁波が人を焼き、跳ね飛ばす。

一瞬、時間が止まるかのように人々の動きが止まる。前列がなぎ倒され焼かれ、その後ろの列も次々に焼かれると、パニックが広がり始める。再び怒声と悲鳴が溢れ出し、恐怖が人々を突き動かす。

アツティラが何か叫んでいる。その顔は喜悦に歪み、叫びは野太い高笑いになる。ジョーの放つビームを、彼の信じる鬼神か何かの奇跡とでも思っているのだろう。王の周りは倒れた人々が山をなし、逃げ始めた暴徒を押し始めた近衛の兵と共に蛮刀を振るう王の様子は、鬼そのものに見えた。

しかし。

ジョーのビームが途切れる。バッテリーがアップしたのだ。彼は予め追隨カーゴから取り出しておいたバッテリーカートリッジをズボンのマップポケットから取り出すと素早く交換する。そして再び放射を始めたが、その隙に新たな暴徒が天幕の中に入り始め、今まで以上に強引に、急速に押し寄せた。それは僅か数名になった近衛

の兵を取り囲み袋叩きにし、近習と2名の将士に守られたアッティラも包囲される。ジョーの周りには死体の他は何もなかった。彼はそれまで、ただ威嚇に近い状態で電磁ビームのパワーを抑えて使っていたが、諦め、スティックをマックスゲインにして火炎放射器のように人々を倒した。しかし数が多過ぎる。ビームをもともせず、姿の見えない彼に迫り始めた人々を見て、最早、アッティラを救うことより自分の心配をしなくてはならない、と感じたその瞬間。

宙から『炎の壁』が降りる。それは劇場のオペラカーテンのように天幕の両端に現れると、幕が閉じるように中央に向け走り、それに触れたものは人だろつが物だろつが瞬時に跳ね飛ばされ、引火した。その『炎の壁』はアッティラを囲んだ暴徒を分断し、怯んだ暴徒に我に返つたアッティラたちが刀を振るつと、暴徒は夢から醒めたかのように目を白黒させ、打ち倒されるか逃げ去るかして散り散りとなつて行く。

「ジョー、大丈夫ですか？」

マイクロタグを通してスペンドの声。

「天幕の梁にいます。ボスとウインは外で『デモ隊』の侵入を防いでますよ。俺はボスの応援に行きます。拡散防壁を付けたスティックを置いてきますから、それで大丈夫ですか？」

「どの位持つ？」

「自動装填バッテリーを2個付けましたから5mは」

するとジョーの目の前に擬似窓が開き、拡散防壁のコントロールパネルが表示された。バッテリー残5分、となっている。

「了解した。行ってくれ。こっちは大丈夫だ」

「では、後で」

「スペンド」

「何でしょう？」

「恩に着る」

「スウェーデンのお返しですよ」

スペンドは外へ出て行った。

ジョーは拡散防壁の出力を少し絞ると、防壁沿いに逃げ惑う人々を追いつながら殺戮を繰り返すアッティラと近衛の兵を見つめながら、吐息を吐く。やがて、彼の視線を感じたのか、アッティラがふとこちらを見やると、ジョーはゆっくりと天幕の影に入り、身を隠した。光学迷彩が効いているとはいえ、勘の鋭い者は気配で分かる。もうアッティラは安全と見たジョーは、面倒なことになる前に天幕の合わせ目から外に出た。

外の光景を見た途端、ジョーは思わず立ち止る。このドナウ河畔に住むあらゆる人々が集まった、と言われても信じてしまいそうな数の人間。男だけでなく女も手に武器を携えて、緩やかに波を打つように蠢いている。

きつと先ほどまでこの天幕を目指し押し寄せて来ていたのだろう。今はシンディとウインが手を変え品を変え行なった遅延工作によって倒され、のたうち蹲る人の山を前にして、呆けたように立ち止り、手にした棍棒や蛮刀を地に打ち付けたりしながら口々に何かを呟いている。シンディたちの姿は見えない。何処か丘の影にでもいるのだろう。すると・・・

「ウインなら騎兵隊のお出まし、というところだな・・・」

思わずジョーが独り言を呟くほど、それは見事な急襲だった。皮の兜を被り、短弓と短槍だけを手に足捌きだけで馬を駆る兵士の集団が降って湧いたように現れ、群衆に向けて雪崩れ込んで来た。彼らはおよそ300騎ほどだったが、数千にも及ぶ群衆をいとも簡単に蹴散らして行く。それまでに自分が何故この天幕に押し寄せたのか分からなくなり、混乱して立ち往生していた人々は、自分目掛けてフン族最高の騎馬隊、東西ローマの重装歩兵を散々に打ち破った。この世界最強の精鋭が押し寄せたのを見て目が覚めた。砂の城塞が波に崩れるように、群衆は碎け散り、あらゆる方角へ逃げて行く。見やるジョーには、それもまた一種爽快な光景に映った。

ジョーは擬似窓を開けるとコマンドをタッチ、目の前に追隨カー

ゴが現れる。無論、彼以外見ることは出来ない。彼がスティックの交換バッテリーを取り出すと、天から声が掛かる。

「ジョー」

「アン、終わったのか？」

「ええ。敵のピッカーは3体。拘束してクイーンたちに任せたわ。

それはそれとして、ジョー、気付いた？」

バッテリーカートリッジを装填するとジョーは一言、

「TCか？」

「そう。ピッカーの数から3人と考えられるけど、何処にもいない。気配すらないわ。ピッカーに群衆の管理を任せるのは分かるけれど、実体化しないでこれだけの大仕掛けなんて出来るのかしら？」

「出来るんだろうな。慎重に少しずつ、時間を掛けて根気良く因子を埋め込んで行く。原因の種が芽吹くまで気付かれないように」

ジョーはそう言うものの、自分でもそれを信じていない口調だ。

「そんなことしたら、いくらお金があっても足りないじゃないの・  
」

アンが何かに気付き、沈黙する、と。

「ジョー！」

アンが叫ぶと同時に火柱が天幕を囲む群衆の向こうに立ち上った。スティックに接続された拡散防壁アタッチメントの電磁バリアー。

触れた人影が何人か吹き飛ばされるのが見える。それはフンの騎兵が刈り取って行く暴徒の壁の向こう側、フンの兵士たちもその光景を唾然と見やるのが見えた。

「シンディたちか！」

彼女たちが発見され囲まれたのか？

「行く？」

ジョーは即決する。

「いや、TCを捕える。これで分かった。実体化していなくとも近くで操作している。それが元凶」

「でも、」

「シンディたちには少しの間踏ん張ってもらおう。じきにマスクレイドの部下が駆け付ける。さ、付いておいで」

## § 同地・同年紀同時刻

「ウイン、6時へ！」

彼の相棒<sup>ピック</sup>、ランスロットが叫ぶ。右・左ではなく北を12時とする古来の方向指示で間違いない指示を与えたのだ。6時、南方。突然彼らに気付いたのか襲って来た敵に向かつて右。ウインは考えるより先に身体を投げた。追うように矢と短槍が彼の消えた地面に突き刺さる。ほっとしたのも束の間、短槍が伏せるウインの左脇を掠める。直後彼を狙って矢が2本。それも転がりつつ避けた彼はそのまま手近の岩陰に飛び込み、タグを通して拡散防壁を構築しようとする。彼の右手、たった今槍と矢が放たれた方向へ展開しようとして、彼が意識を逸らした瞬間。

「ウイン！避ける！」

左右両側から矢と短槍が放たれる。その数10。さすがの彼も避ける間はなかった。

当る！無意識下で出来る限り岩に身体を寄せ、背を向ける。それをまともに受けたのなら彼もただでは済まなかったのだが・・・

カッーン、カッ、ガキツ。矢は金属が弾かれる硬い音を残し装甲<sup>アイ</sup>合金に阻まれる。彼に覆い被さるようにランスロットが現れ矢襖<sup>マ</sup>を防いだのだ。

ウインは下からランスロットをちらり見上げる。擬似映像が一瞬ブレて中世の優雅な騎士姿からメタルの身体が透かし見えた。ウインはその下から這い出し、次の矢が到達する前にそこを飛び退る。

「私はいい、行け！排除しろ！」

「承知！」

ランスロットは消え、そこに暴徒が押し寄せた。すると、人々が見えない手になぎ倒され、太刀や弓矢をはぎ取られて行く。ウインはその隙に拡散防壁の準備を終え、右手に電磁波の壁を築いた。

拡散防壁が右側の暴徒を防ぎ怯ませた事に満足したウインは左手を見渡し、暴徒に向けスティックをバーストさせる。すると彼の向かい側20メートルほど先にもう一つ、拡散防壁の火壁が立ち上がった。その手前には、まるで戦場を見晴るかす古代の將軍を思わせる堂々とした立ち姿でシンデイがバーストを群衆に浴びせている。

「シンデイ！」

タグを通し声を掛けると、彼女に迫った数十人を排除したシンデイが軽く手を上げる。

「無事か？」

「大丈夫だ、ランスロットに防戦を命じたが、これはすっかり介入してしまつたな・・・」

シンデイがスティックを素早くバーストさせ、自分の前60度ほどを掃射する。ウインは彼に向け投げられた槍をスティックで叩き落とすと、持ち替えてマシンガンモードで暴徒に向けて掃射した。次に会話出来るまで数十秒が経過する。シンデイは軽く息を吐くと不敵な笑いを滲ませた声で、

「こつなつたら構いやしない。出来るだけ踏ん張って撤収する。ジョーやスペンドはまだ中か？」

「だろうね。声は掛けたのかい？」

「ああ。だが、返事はない」

「彼ら、平気か？」

するとシンデイは更に苦笑の気配を窺わせる。

「放つて置いても大丈夫さ。スペンドはともかくジョーは前にもこんなことがあつた」

「前にも？」

「いいから集中しな、来るよー！」

シンデイが再びバースト。ウインは飛んで来た矢を瞬時にバース

トで弾き飛ばす。群衆は外側をフンの騎兵に押されるせいか、彼らに向かう数を次第に増して行く。その暴徒が何もしていないのに倒れたり、武器を奪われたりしているのは、2体のピッカーが踏ん張っている証拠。2人は少しづつ後退しながら、2つの防壁の間に自然と背中合わせになる。そこが最後の砦、寄せる暴徒を前後にステイクで受け止め続けた。

長い2分が経過する。漸く伝説の屍鬼のような魂のない人々の群れに、僅かな躊躇が表れる。操られているのは確かだが、その呪縛に裂け目が出来たのだろうか、それとも、時間経過による意識の回復だろうか。電磁波に焼かれるというのに次々と寄せる人の波は変わらないが、その勢いが少しずつ弱まって行く。飛んで来る矢や槍の数も目に見えて減って行く。それは光学迷彩で完全に姿を隠し亜空間を蛙飛びに移動しつつ暴徒を排除するピッカーたちや、目標が4班へ移ったことで自然、外側から狩り立てるようになったフン族騎兵の活躍が理由でもある。しかし、暴徒の熱が醒めつつあることは次第に肌で感じられるほどになった。

「シンディ、こちら側の連中は動きが鈍った」

「予備カートリッジは？」

「あと1個ある。そっちは？」

「私も1個持っている、こちらも収まりそうだ」

彼女は今一度プラズマを発射すると一瞬だけ振り返り片手を振る。暴徒の波が弱まって来たことを感じてからは、節約のためバーストを止めていたのだ。

「制限時間まであと2m30sだ、天幕はどうだ？」

「もう人は疎らだ。騎兵が100騎ほど周りを走り回って残りを排除している。対象はもう大丈夫じゃないかな？」

「よし、ぎりぎりまで残ってから退避する。もう少しだけ、」

「シンディ、通信」

クイーンが割って入り、タキオン通信をリンクした。

「こちら5世紀常駐巡回警備12班、あと1mでこちらへ実体化する。損害はないか？」

「こちら機動執行4班。応援を感謝する、今のところ損害はない。保護対象は健在、先にそちらの様子を確認してもらえないか？班員2名との通信が途絶しているので、我々はそちらを確認したい。あと、天幕内で拡散防壁を使用した。回収もお願いしたい」

「了解した、任せろ」

通信が切れると、ウィンが秘話でばやく。

「何であいつらは何時でも終わった頃にやって来るんだ？」

「どうしてだろうね。逮捕執行への不介入っていう不文律もあるからな」

「こつという手柄なら横取りされても文句は言うまいよ」

ウインのぼやきにシンディは密かに笑う。もう暴徒はただの烏合の衆、彼女たちに害を及ぼす者は皆無となり、騎兵に追われ群衆は細切れになり次第に広く散って行く。と、片側の拡散防壁がすつと薄くなり、幾度か瞬くと消える。もう一基も追うように消えた。バッテリーが尽きたのだ。あと3分も押されていたら危ないところだった。

「際どかった・・・バッテリーを余計に持って来て正解だったな」  
すると彼らの耳に明るい声が響く。

「手伝えなくて済みません、こつちもそれなりに忙しかったんで」

「スペンドか、ちよつと心配になって来たところだったぞ！大丈夫か？」

ウィンが驚いて声を掛ける。

「大丈夫だよ、そちらは？ウィン」

ウインは傍らに戻って来て帽子を取り挨拶する『騎士』を見やりながら、

「無事だ。ジョーは一緒かい？」

「さあ？中にいるんじゃないんですか？」

「君は何処にいる？ジョーも君も識別子<sup>マイカー</sup>を切ってるじゃないか」

しかしスペンドはそれには答えず、

「先にマシンへ帰っていてもらえますか？ジヨーの様子を見て、一緒に帰ります」

「スペンド？」

シンデイが訝しげに聞く。

「では、あとで」

「待て、スペンド」

しかし彼は通信を切ってしまった。防壁用に地面に刺したステイツクを回収してクイーンが戻る。シンデイは彼女にだけ見える女神に微笑んだ。ウインは天幕の周りを駆け回る騎兵と、既に数十人の単位で逃げて行く人々を見やりながら、

「スペンドの奴、何か隠しているな」

シンデイは彼に近付きながら、ウインが驚くほど楽天的に、

「任せるさ」

そしてこちらに気を割く余裕の出来た騎兵数騎が駆けて来るのを見て、肩を竦める。

「さあ、時間切れだ、ずらかるよ。あとは防衛チームと2人に任せよう」

## § 同地・同年紀同時刻

スペンドは亜空間にいた。時間経過のないマイナスエネルギーで満たされた、『存在』を得られない空間。全てのものは形状のない、分子電子すら一定の形状を保てない『ガス』のようなものとなって漂う。間近にバズもいるはずだが、彼もバズも識別子を断っているためお互いを視認し会話をすることは出来ない。しかし、すぐそこにバズがいることを彼は研ぎ澄まされた感性で感じていた。

どのような環境下、超光速下でも質量を変化させない木星由来の元素<sup>μ</sup>Muの発見、それによる光速超送手段の完成と虚数域（亜空間）への侵入方法の解明、元の形状を記憶・再生する実体化因子の発見と改良など、様々な研究・開発により時空超越、いわゆるタイムトラベルは可能になったが、その技術の中でもこの亜空間での生存は未だに解明されていない、偶然の発見による賜物だった。スペンドは何千回とこの虚数域の『亡霊』となっているのに、何かの拍子、未だに気味の悪い思いをする。

全ての光景を擬似映像化<sup>ビジュアル</sup>するマイクロタグのお陰で、ガス状になった自分を意識することはない。本来は上下左右という方向性もなく、遠近長短もなく、時間もない、そんな不気味で何も見えない真の闇の世界である亜空間も、一定の視点から見た世界として認識されている。擬似映像なくしては五感が働かず、生の実感を得ることは難しい。徳を積んだ修道僧や僧侶でもない限り己を捉えることは出来ず、狂気に陥るのは時間の問題となるだろう。

その、今は藍色に塗り込められた、少年の想像する宇宙空間を実体化したような広大な空間を前に、スペンドは遠く霞んで見える光の粒を見ていた。粒は1つだけでなく、2つ3つと付いては離れ、また付くといったことを繰り返している。

良く見ると、その粒は至るところに浮遊して、異次元を飛び回る蛍と言ったところ。それは一つ一つが亜空間に存在する識別子を持つ異物、マシンやカーゴ、そしてピッカーや人間だった。通常の状態なら、スペンドを見るものがいればあの蛍火のように見えるはずだ。しかし、今彼はあの蛍火を発していない。

亜空間の中で共有するスペースを仕切り、その中にいる者だけがお互いを認識し合う。同じスペースの外や、別のスペースにいる存在は、あの芥子粒ほどの光点でしか表示されない。

共有するスペースのことを『オリジナル』と呼び、光点を『識別子<sup>カ</sup>』と呼ぶ。オリジナルは時空走路や常駐ベース、年紀に侵入する

際の待機所などのために作られ、識別子は虚数域の中で衝突したり行方不明にならないようにレスポンドとしても使用される。今、スペンドはその識別子を切っている。長時間続ければ再実体化不可能になることもある危険な行為、重大な服務規程違反だった。

スペンドは虚数域を『泳ぎ』ながら、ある識別子を捜していた。とはいえ、あの蛍火は時間も距離も存在しない虚数域に浮かんでいる。近くと見えて実は数百年前後して存在していたりもするので、星図で調べないまま肉眼で、夜空に瞬く暗い一個の星を探すより難しい。普通なら徒労に終わる行為であり、大海で針を探すに等しい行為だった。彼には勝算があった。直前にその対象の識別子、正確には対象に『付随』するものが放つ識別子に『異物』を加えたのだ。

この技は整備班のニーが教えてくれた。半年ほど前、暇を持て余していた彼がピッカーの整備場でぼんやりと整備の様子を眺めていた時のことだ。

数体のピッカーを同時並列にして定時点検をしているニーが、ふと整備場のキャットウォークで彼女を見下ろしているスペンドに気づき、手を振り、手招きした。

「ご苦労様。器用なもんだな」

近寄りながらスペンドが褒めると、キャップをぐいっと上げて笑顔を輝かせた少女が、

「こいつが私の仕事だからね」

2人はニーが休憩と称して用意したマテ茶の入った古風なカップをアルミのストローで啜りながら色々な話をした。ふと、スペンドが亜空間でTCの存在を確認出来たら仕事もつと楽なのに、などと話したら、ニーはタグの秘話に切り替えて、悪戯っぽく言った。

「もしも事前に相手に仕掛けることが出来るのなら、その方法、あるよ」

そしてニーは整備班でオカルトとされたある方法をスペンドに教えたのだった。

先ほど、スペンドはその方法を試した。天幕を出て以来、ずっと監視していた対象が拡散防壁の立ち上がるのに驚いた際に、ステイツクに装着したある物質をミニマムゲインでライフル射撃、見事それは対象の『相棒』の背中に吸着し、同化した。それは普通目に見えない電磁波に『着色』するために用いる因子の一つで、その目的から『曳光弾』と呼ばれる。普段はバッテリーと並列化して使うのだが、スペンドはニーの教えで弾丸状に改造し、何時か試そうと装備に忍び込ませていたのだった。

対象が亜空間に消えると、スペンドも後を追った。虚数域に入ると何時ものように軽い眩暈と全身総毛立つような身震いと嫌悪感が訪れるが、それも耐える間もなく直ぐに消える。既に相手をロストしている。それは当然のことだったので、じっくり焦らずニー語るところの『赤い一等星』を探した。

識別子は様々な色をしているが、普通は紫から黄色にかけてのグラデーション、赤は珍しいのだ。やがて・・・

(いた！赤く輝く一等星。感謝するぜ、ニー)

スペンドはゆっくりとその赤い星に近づく。赤い星は付かず離れず1つの光点に寄り添っている。彼は相手に悟られないぎりぎりの距離と判断した位置で停まり、タグを意識で調整し、相手のオリジナルが発する座標を読み取る。聴覚を同期させ、音声を確認すると視覚も同期させる。いわば目と耳だけを相手のオリジナルへ滑り込ませた。

まるで暗幕が振り落とされたように光景が飛び込んでくる。真っ白な部屋、窓はなく、床も壁も天井も全てが白い。その白に光学迷彩の何ともいえぬ黒灰色がぼつねんと見える。その横にはメタルシルバーの鈍い輝き。バトルスーツの光学迷彩もピッカーの擬似映像も効かないのは、スペンドが視覚・聴覚ただ2つの感覚だけを使っ

て情報を得ているからだ。そしてもう一つの黒い影。これも光学迷彩スーツを着た人物。顔はフェイスマスクに覆われ窺い知れない。スペンドは見たこともない女だった。

その時、スペンドは背筋に鳥肌が立つような感覚に襲われる。聴覚と視覚しか侵入させていないのにも拘らず、これは……  
(……何が『外』にいる……オリジナルがこの外にも……?)

「あの人……」

白い部屋を模した擬似空間オリジナルの中ではジョーのピッカー、アンが呟いた。アンの偽装は絵本から抜け出した19世紀の英国少女風だというが今はメタルの身体が剥き出した。

「すまないな、お前は2年前に私の下へ来たし、『外』での付き合いを知らないから」

ジョーが苦笑する。寛いだ様子で、ここが騒動の渦中にあることを感じさせる緊張感は微塵もない。

「紹介しよう、スウェーデンではちらりとしか拝見出来なかつたろう？彼女はマリア、私の元同僚だ。」

「……どうも、マリア某さんなにかし」

アンは挨拶にも無反応の女に皮肉を込めて、

「どう見てもTCの方にしか見えないけれど」

ジョーは笑って、

「そうさ、今では彼女は正真正銘のTCなのだから」

「どうしてそんなにのんびりと、」

「まあ、今は黙っておいで」

アンは渋々引き下がる。それを横目にジョーは、TCの女に向き合った。

「やあ、暫くだ、マリア。随分と探したよ。しかしまあ、よく一人であれだけのことを……恐れ入ったよ」

すると女は一步下がり、彼らと間合いを取った。その顔はフェイ

スマスクでよく見えない。

「初めに言っておくが、どうして君をこの空間へ誘い込めたのか、なんて聞かないで貰いたいね。これは開発班の最新の『おもちゃ』さ、まだ評価が終わってない、と渋るところを借りて来た。君はA PCまで手に入れたしね。あの後も我々が進化しているところを自慢したくてね」

ジョーは無言の MARIA に追い討ちを掛ける。

「こいつは君の知っているTPのオリジナルではない。TPの識別子を持たない者が一旦入ってしまえば、内側からは一定時間出ることが出来ない。解除コードはないよ。それに識別子をオンオフしての打鍵<sup>モルス</sup>交信も出来ない。外から見えるのはいわば残像。そういう風に作ってあるんだ」

女はその言葉に微かな反応を示した。肩の力を抜くように両手を一旦だらりと下げる。すると唐突に両手を顔へ持つて行くとフェイスタガードを巻き上げる。そして縁のないサラダボウル型のヘルメットを脱いだ。

黒く長い髪が背中へ流れ、ヘルメットを左小脇に抱えた彼女は右手で顔に掛かる髪を掻き上げた。東洋系の細面、美形だが少しきつい顔立ちの30女、その黒い瞳は力強くジョーを睨み付けている。

「やあ、変わらないな、君は相変わらず美しい」

「あなたも変わらず嫌味なほどの男振りね」

ジョーはにこやかだったが、MARIAは冷たく言い返す。その声は小柄な身体に似合わず低く大きい。

「それはお褒めの言葉と取っておこう。私のやり方は君もよく知っている」

「よく知っている？そう、よく知っているわ」

MARIAの瞳は漆黒で虹彩も見えず底がない。その目がジョーを射抜く。

「さあ、逮捕しに来たのでしょうか？さっさと執行しなさいな」

「ほう、随分と諦めがいいね」

「あなたはチェスが得意なもの。どうせ私がどんな手で来るのか読んでいるのでしょう」

「チェスね、最近のご無沙汰だな。私のはへボなチェスだよ。義父おやじに勝ちたいがばっかりに過去の棋譜から奇手ばかり集めて試したもののさ。お陰でピッカー相手には連戦連勝だが義父とは4回に1回くらいしか勝てない」

ジョーは両掌を仰向けにお手上げの仕草をすると、

「ま、私の話などどうでもいい。まずは追随カーゴを離して貰おうか」

するとマリアの右側に巨大なメタルの繭といった風のカーゴが現れる。繭は現れるなり外に向かつて皮が剥けるように外郭を倒し、中身が崩れ小山になった。スティック、バッテリー、口糧、緊急医療キット、工具……

「ありがとう」

「何時から私を追い駆けていたの？私はスウェーデンの一件であなたから逃げるまで気付かなかった」

「君を探しに現場に出たのはあの時が初めてだよ。その1ヶ月前のサラトガの一件で君の痕跡を見付けて調べて見る気になった。君がウチに浸透していないか、それも気になってね」

「で、どうだったの？」

彼女は不敵な笑いを浮かべ腕を組む。ジョーは肩を竦め、

「その兆候はなかったね。私はてっきり君が昔のコネを利用して誰かを籠絡し情報や技術を手に入れていたとばかり思っていたが……さすがだね、ウチの外からここまでやるとはね」

「本当に浸透していない、と言えるの？」

ジョーは笑い出す。

「その手は、なしだよマリア。ウチもまだまだマニュアル遵守のボクラのもと、保身に長けた官僚主義者に毒されてはいるが、あの時のようなことはない」

その言葉にマリアの瞳は更に鋭く、更に冷えた。

「あなたは本当にそう言い切れるの？それほど組織に自信を持てるの？」

搾り出されたかのような声は、呪詛のように聞こえ、傍で見ているアンが思わず身構え半歩前に動くほどだった。

「あのご都合主義。時空を守るよりも自分たちの組織を守ることに熱心な上層部。優秀な捜査員が何人も傷付いたり死んだりしたのに、一向に変わらない体質。今の状況があ頃と違つとあなたは言い切れるの？」

ジョーは再び笑顔を深くしたが、目はもう笑っていない。

「痛いトコを突くね。確かに変わっていないのかもしれない。しかし、時空犯罪の摘発と防止、という本来の目的はあの時以上の達成率だ。もちろんこんなことで、私や義父は満足していない。満足していないから、私や仲間は何とかしようとしてやっている」

笑顔と裏腹に声は真剣そのものにジョーは続ける。

「こういうのは一朝一夕にはいかない。言い訳に聞こえるだろうが、巨大化した組織という集団の意識は、内側からゆっくりと変えないと却つて墮落に向かう。損得勘定にばかり長けた人間に対して性急に物事を押し進めれば、そこにあるのは精神的な職務放棄だ。現長官に代わつてからゆっくりとではあるけれど、この組織は本来の誇りと厳しさを取り戻しつつある、と思う。君の企画を2度までも潰したこの4班がいい例さ」

「あなたはいつでもそういう理想ばかりね」

マリアは視線を外さずに一歩下がる。

「私がどんな目に遭つて来たのか、あなたは知っているでしょう。私には彼しかいなかった。ジョシュが死んだ時、あなたが何を言ったのか、あなたのお父さんがなんと言ったのか思い出すがいいわ。尊い犠牲は無駄にしない式的美辞麗句。それがこの様？全く吐き気がする」

きつと顎を上げ、長い髪を振る彼女は怒りに打ち震えた。

「みんな潰れてしまえばいいのよ！」

「それは間違いだ！」

「ジョーは珍しく声を荒げる。」

「君は個人的な感情で歴史を、無垢の人々を翻弄し傷つけているんだぞ！それが分かっているのか？」

「誰にもものを言ってるの？あなたのご立派な組織の一員だった私がそんな事が分らないと思う？」

「確かにジョシユは可哀そうだった。助けられなかったのは我々のせいだ、それは認める。しかし君が行なっているのは私怨を世界にぶつけている八つ当たり過ぎないんだぞ！君に関係のない過去人が犠牲になった。それはテロと変わらない、そんなことが何故分らない？」

「ええ。確かに私怨よ。その責任は取るつもり。でもその前に、TPにも償って貰うわ。あなたのお父さんやシンデイ、もちろん、あなたにも」

その途端、アンのセンサーに多数の熱源が察知される。それは何の予兆もなく突然降って湧いたように現れた。近い！・・・この擬似空間リシナルが見た目より広いとしても・・・2メートル後！

「ジョー！」

「ああ、気付いている」

白い壁はもちろん虚構だが、その壁をぬつと抜けて来るものがあるれば、分かっているはずでも余り気味のよいものではない。増してやそれが艶やかに輝く無骨なロボットだとすれば・・・

最初の一体は出現するや彼らの背後に立った。続けて前、左右。蛹から殻を破って抜け出す蝶のように、それは壁から生まれ出て来るようにも見えた。次から次へと出現し湧き出したロボットは総勢30体にもなりきちんと整列し円形に彼らを囲む。

「私の、この行動は、読んでいた？ジョー」

メタルの身体の向こうから声がする。

「いいや。一本取られた。どうやったんだ、と聞いたら答えてくれ

るかな？」

マリアは嗤う。

「どうやったか、なんて聞かないで貰いたいわ。こちらも進歩しているのよ、あなたたちばかりでなく」

彼女は後ろに流した髪を片手で弄る。優位に立った者の余裕だ。

「ひとつだけヒントをあげる。ここは今までのTP仕様とは違うオリジナルよね」

「・・・なるほどな。君は私のオリジナルを包括するように巨大なオリジナルを作ったのか。既存のTP仕様は実体化因子が合わないからそんなことは出来ないが、コイツなら・・・なるほど。それにしてもアンのセンサーに引つかからなかったのは、」

「ジョー。時間切れよ。そうやって時間を引き延ばして何か考えようなんて見え透いたことをしないで」

「戦闘もやむをえない、か」

「この状態で勝てると思って？ 言っておくけれどAPCはこの子たちに効かないわよ。私がジャンク品から育て上げたから。この子たちには元より錯乱する感情などないの・・・」

そこでマリアは抑え切れない笑いを漏らす。空気が張り詰めた中、ガラスに輝<sup>ひび</sup>が入るような細く甲高い冷笑。

「味会わせて上げる。ジョシュが最期にどんな想いを浮かべたか、思い知るがいい・・・行け・・・」

マリアが呟くように命じた瞬間、一斉にロボットたちが襲って来た。

「嘘でしょー！」

「やるだけやるさー！ アン、『死ぬ』なよ！」

アンの悲鳴にジョーが叫ぶと、最初に右手から迫ったロボットに何時の間に取り出したのかスティックのプラズマを放つ。ピッカー型だが装甲を外され、所々部品が欠けているように見える銀色の口

ポット、『レイドロイド』はプラズマをもろに受けてもんどり打つ。しかし、それをぼんやり眺めている間などない。2体のレイドロイドが競うように迫る。どうやらスティックのような飛び道具は装備していない様子だが、本来民生品でも50万ワットを持っているロボットだ。この軍用と思われるレイドロイドは100万ワットに近いパワーを持つはずである。そんなものにメタルの拳で思い切り殴られれば、ジョーの頭など千切れて数メートル転がるはずだ。ジョーはそちらにもスティックを向け弾き飛ばす。

「アン！もつと寄って後ろを守れ！」  
「やっつてるって！やっつてるけど」

レイドロイドの攻撃には何の秩序も指揮系統も見られない。ただ普段の動きの延長で襲ってくる。倒しても、倒しても、崩れ倒れた味方の上を跨いで踏み砕いて寄せて来る。

連射していたアンのスティックのバッテリーが切れる。TP仕様  
のピッカーが両腕に仕込むスティックは、体内電力からの供給では  
ピッカーの性能をフルに発揮出来ないため、人間が使うようにバッ  
テリー給電で使う。今もカートリッジを交換するほんの2秒が致命  
的だった。

アンがスティックを剥き出しにした右手を構えた時、その腕を掴  
まれる。それをなぎ払い、透かさず一発打ち込んで相手を破壊した  
瞬間、後ろから抱き付かれた。それも振り払おうとすると右側から  
もう一体に腰を掴まれ、更にもう一体反対側から抑えられ、身動き  
がままならなくなった。前からは一体のレイドロイドが思い切り殴  
りかかり、左手一本でそれを防いでいたアンだったが、やがて強烈  
な右のカウンターを喰らってしまう。

メタルとメタルが激しくぶつかり合い、細かい火花が飛ぶ。アン  
の視野は数秒の間ノイズで閉ざされた。が、機能が回復すると同時  
に反撃に出て、ゼロ距離でスティックを連射、殴った相手を炎上さ  
せて打ち倒す。

しかし後ろから抱き付く味方越しに殴り付けるものがいて、それ

は執拗に頭を狙った。レイドロイドの頭部に実はAIはないのだが、視覚と聴覚のセンサー、それに音声発振器官は人型故に頭部に集中する。アンは振り払おうともがくが、腰と背後を抑えたレイドロイドは全く動じない。次第に視覚処理機能が損傷し、ノイズ交じりの白黒映像でしか周囲を認識出来なくなってきた。もちろんアンは痛みなど感じはしない身体だ。しかし、機能不全と損傷を知らせるアラームはしつこく鳴り響き、その数が増すに付け、動作が緩慢になって行くのを感じる。するとレイドロイドは折り重なるように殺到し、過熱して歪み始めたスティックを振り翳すアンは、ゼロ距離の掃射で2体を倒した後、遂に右腕をもぎ取られ、左脚部を弾かれてバランスを崩し、大きな音を立てて床に倒れた。

ジヨールはアンの背後でスティックをバースト、暫くはレイドロイドを寄せ付けなかった。しかし、こちらもバッテリーを交換する間に距離を詰められ、一体に腕を取られる。そのまま引き倒されたジヨールは強か背中を打ち、一瞬息が止まるが、隠し持っていた可塑性焼夷爆薬を相手の腕に貼り付け、自分の腕が炙られるのも構わず起爆させた。

レイドロイドの腕は一瞬にして焼け焦げ、離れ、彼は燃える左腕を叩いて火を消しに掛かる。その隙にもう一体に覆い被され、床に倒されると、装甲を外しているとはいえ未だ150キロ近い身体が押し掛かる。そこへ次々と寄せるレイドロイドが見えた。

（まいったな、あいつらが押し掛かったらピザ生地みたいになっちゃうぞ）

視野の隅では倒れてあがいているアンの姿が見え、次第に意識が遠ざかる中、それでもスティックを近付く相手に叩き込んだ。

その時。白い部屋が黄金色に輝いて染まる。

すると覆い被さっていたレイドロイドが突然加熱し、吹き飛ぶ。

反動でジヨールも床を転がって壁の近くまで飛ばされ、被さるうと近

付いていた2体のレイドロイドも前のめりに転倒した。ジョーは歯を食いしばって意識が遠退くのを堪え、横から踏み付けようとした一体をゼロ距離射撃で吹き飛ばし、よろよると立ち上がるうと腕を突いたが、目の前に現れた人物にさつと手で制され、動きを止めた。「そこで寝ていて下さい、後は引き受けた！」

「・・・すまない」

スペンドはスティックを2本束にして抱え、フルバーストの抗力に両足を踏ん張って辺り構わずビームをばら撒いた。その後方。

冷笑を顔に張り付かせてジョーの苦闘を見ていたマリアは突然背後から羽交い絞めにされ、そのまま腕を取られてねじ上げられる。鋭い痛みを声上げると、耳元で男の声がする。

「直ぐにこいつらへの命令を解除しろ！」

「無理よ！もう停まらない」

「Merde！」

男は突然マリアを振り向かせると平手を顔に見舞い、彼女が怯んだ隙に電子錠を両手首に掛け、押し倒す。

部屋の中では形勢が逆転した。現れたバトルスーツの3人と3体のピッカーはスティックをフルスペックでバースト、レイドロイドを片端から打ち倒し、容赦なく破壊する。

ものの1分で30体のレイドロイドはメタルのスクラップと化して床に転がっていた。

「離せ、このブタ野郎！」

マリアの叫びは既に狂気を予感させた。

「この下衆、この・・・」

叫びは拘束具と自殺防止のボールギャグでもごもごと呻き声に変わる。

「済まない。あなたの様な素敵なご婦人の罵声は聞くに堪えない」  
電子錠の後に拘束具を手際よく付けるウインが呟く。その顔はひ

たすら悲しげだった。

「で、一件落着かい？」

まだ白い床に座ったままのジョーをシンデイが見下ろす。両手を組んで、その褐色の顔に浮かぶ表情は相変わらず何の感情も窺わせない。ジョーは一度日本に行った時、NOUという舞謡芸能を鑑賞したが、あの時に見た仮面のようだ。そこにあるのは一見、ニュートラルな顔だが見る者によって様々な感情が覗く。今、シンデイが浮かべているのは、まるで姉がやんちゃな弟を見やるような、そんな親愛の情だ。

「ああ、とりあえずは、ね」

ジョーはそのまま痛む背中を無視して肩を竦め、

「よくここが分かったな」

「スペンドに礼を言いな。彼があんたを尾行して外の様子に気が付き、私らを呼んだんだ」

「申し訳なかった。君たちまで巻き込んでしまった。こいつは私の言わば落とし前だったか・・・」

「あんた、忘れてるよ」

「え？」

シンデイが笑うのを見てジョーは目を見張る。ほとんど彼女の満面の笑みなど見た記憶がなかったからだ。

「マリアが恨んでいたのはあんただけじゃない、当然私も、いや、TPの人間全てを恨んでいたんだ。」

確かにその理由が、たとえ恋人の死を、指を啜えて見ていた我々に対する復讐だったにせよ、歴史に介入し、我々の邪魔をする理由とはならないよ。でもね、ジョー」

シンデイは笑顔を吹き消すと、何か疲れたように首を振り組んだ腕を解き、右手を差し出す。

「我々は、そんな個人の恨みに左右されるほど柔になっているのかい？」

暫くジョーはシンディの瞳を見やるばかりだった。その強い眼差しに何か正解が示されているかのようにじっと見つめた。しかし、その目は語っていた。そいつはあんたの仕事だよ、と。

「そうだな。そいつを何とかしなくちゃならないね」

ジョーは彼女の手を取ると、シンディは力強くその手を握り、彼を引き起こす。

「済まない。少しばかり時間をくれ。私は君たちの期待を裏切らないようにやって見るから・・・」

立ち上がったジョーはシンディの手を離す前に今一度力を込めて握り返し、力強く頷く。シンディも頷くと軽く首を仰向けた。

その背後ではランスロットに抱えられたマリアが拘束具を引き千切らんばかりに呻き暴れている。そこへウィンが素早く上着越しにスピンドルを打ち込み、その薬室から強力な精神安定剤を注入した。マリアは打たれた瞬間、全身を痙攣させ拘束具を軋らせ何か叫んだが、すぐにぐったりと脱力しランスロットの腕の中へ崩れた。ウィンは悲しげに首を振り、シンディを見やる。

シンディはウィンに深く頷く。ふと、この白い空間の惨状に目をやった。

白い床は滑油や冷却液などで黒く汚れていた。そこに様々な形状に細分され焼け焦げて撒き散らされた元ピッカーたちの残骸が折り重なっている。マリアが少しずつ各地から集めたお払い箱の中古ピッカーたち。完全に破壊され沈黙するものもあれば、動力源が未だ生きていて、片手だけ、片足だけになってもまだ動こうとあがいているものもいる。彼女はその姿に過去の『クイーン』たちを想い、瞑目した。

壁に寄り掛かりながらずっとその様子を眺めていたスペンドが、手品のようにタブレットを取り出すと口に放り込む。そして穏やかに声を掛ける。

「さあ、そろそろお開きにしましょうや、皆さん方」

何か達観したような言い方にジョーは苦笑する。

「スペンド。私は君にありがとう、と言ったかな？」

「何か最初に聞いたような気がしましたね」

「では正式に。本当にありがとう。君らが応援に駆け付けなかったら今頃は本当に死んでいたところだったよ」

「帰ったら本物のアイラのボトル1本で手を打ちましょう」

「いや、6本にしておこう。その代わり相伴させてくれ」

「ありがたくお受けしましょう」

ウィンがまだマリアを見つめながら言う。

「ここはどうする？」

ジョーはさつと辺りを見廻すと、足元に落ちていたレイドロイドの部品を拾い上げ、

「位置特定因子をくっ付けて放っておくしかないね。後で誰かをやる。証拠はコイツだけで十分さ」

部品をひよいとアンに投げる。片腕と顔を半分潰され全身打痕だらけ、AIの言語域も潰されて声を失い喋ることも出来ない、見るも無残な姿のアンは片手でそれを受けると自分の腰に触れ、そこに開いたポケットに収納した。ジョーは部屋の真ん中にウズラの卵ほどの大きさの発信機を置く。

「さあ、帰ろうか」

シンディはそう言うのとクイーンを手招く。すると部屋の真ん中に金色の扉が現れた。シンディが潜り、クイーンが続く。その後をスペンドがバズと並んで抜けて行く。悲しげに振り返りつつウィンはマリアを抱えるランスロットに続いて入った。最後に足を引き摺るアンを先に、と促してジョーが扉を閉じた。忽ちその白い部屋は亜空間の闇に沈んで消えた。

## Episode 07・帰還

§ 時空走路ルート5 2374年08月（現在年月）

誰もが無言だった。

鎮静剤を投与され強制的に睡眠状態に置かれたマリアを護送車コンテナに入れたウインは、シンディの許可を貰ってランスロットを容疑者マリアに貼り付けた。現行犯逮捕の宣言は拘束具を付けながら耳元で囁くように行なったが、果たして彼女は理解していたのかどうか。詳しくは専門医務官に診せなければ判断出来ないが、情報部時代に犯罪者の心理的傾向を知ろうと精神医学の基礎を学んだウインには、マリアの精神崩壊の兆候が痛いほどに見えていた。塞ぎの蟲に取り憑かれたウインは、帰還のマシンに乗り込んで以来シャツを捲くった腕を組んだまま身動きしない。

本部への帰還時、何時もならシンディは報告書の下書きをする。しかしウイン同様彼女も腕を組んだまま目を瞑っていた。感情を窺い知ることが出来ないその顔は、さすがに疲労の色が隠せない。行き掛かり上やむをえなかったとは思っていたが、TPで最も避けなくてはならない罪、歴史介入を大胆にやってしまった。

彼女は出発前に事の経緯を第一報にして本部へ送ったが、上司のガーバー少佐は不在、副官がシンディに負けず劣らずの無表情で受領した。続けて5世紀駐在隊指揮官マスクレイド中佐にも簡単な報告をしたが彼も口が重く、虚数域あくうかんに放置したマリアの空間オリジナルは本部側が責任を持って回収すると伝えても、ただ頷いて「もういいから早く帰りなさい」とにべもなかった。彼としては情報部からシンディたちの行状をコントロール出来なかったと咎められるのを恐れていたのだろう、それではこれで、と敬礼するシンディにスクリーンの中佐は叩きつけるような答礼をして自らアクセスを切ってしまった。彼女は胸の内でも言えぬ倦怠感を感じながら物思いに沈んでい

た。

スペインも何時もならシネマを見るか、何か過去の面白いエピソードをライブラリーから取り出してワインと戯れるのだが、今日はぼんやりとデフォルトの環境映像を眺めていて大人しい。彼は今日の結果については、精一杯やった拳句の歴史介入でありとやかく言っても、とさばさばしていた。それより、ジョーの二面性に今一つ納得のいかないものを覚えつつも、この大胆な男に魅了され始めている自分を感じ戸惑っていたのだ。

そのジョーは、と言うと、音楽ライブラリーから引き出してタグ経由で聞いているのか、目を閉じて指が想像上の鍵盤を叩いている。その掴み所のない涼しげな顔は、シンディの無表情とはまた違って人を煙に巻く力があつた。それを横目で見ながらスペインは何度目かの大きな吐息を漏らすのだった。

ふと、シンディのスクリーンが明滅し、シンディたちの上司、ガーバー少佐が現われる。敬礼するシンディに、先ほどのマスクレイドそっくりの怒りを滲ませた答礼をすると言、

「君たちには何時も驚かされてばかりだ」

「申し訳ありません、ご報告を」

「それは明日以降、報告書で貰おう。事情は聞いた。情報部から早くも苦情がウエに出たそうだ」

「重ね重ね申し訳ありません」

「全く君たちには驚くばかりだ、え？」

シンディが何か言う前にガーバー少佐はスクリーンから消えてしまった。

容疑者を逮捕したとは言え歴史に介入し、現地の過去人に多数の死傷者を出した結果に怒り心頭、といったところなのだろう。横で聞いていたワインは、無茶をしたとは言え保護対象は守つたのだ、多少は褒めてもよかるうに、と思つたが顔には出さなかつた。

何れにせよ、これは難しい事例になる。TCがこれからも姿を隠して騒動を起こすことが出来るのなら、TPは人員・装備とも益々

増強せねばならなくなるだろう。

インターポリス

事件後の捜査は作戦部刑事課が国際警察機構の時空犯罪取締局に協力する形で執り行われるが、これは警察権力の縄張り意識が働いた妥協の産物だ。現在、逮捕後の捜査は殆どが時空犯罪取締局で行なわれTP刑事課はオブザーバーに過ぎない。しかし以前より効率化のためにTP主導で、という声もある。今後、その声が大きくなることも考えられるだろう。TCの犯罪を実行犯で抑えることが難しくなれば、TPはただ事件を記録しその後の捜査を眺めるだけの存在に成り下がる危険があるからだ。

「マリア・ウエハラは情報部の優秀な分析官アナリストだった」

唐突にジョーが話し始める。まだ音楽は掛けたままだ。

「もちろんシンディは知っている。ウインモスペンダも聞いたことがあるね、『エリザベス事件』。マリアも私もそいつにどっぷり浸かっていたんだ」

5年前。22世紀人であるエリザベスという女性が引き起こした時空犯罪史上稀に見る広域かつ凶悪な事件。エリザベスは父の莫大な遺産を使つて、過去を滅茶苦茶にしようと計った。その影に現代人の協力者を感じたジョーはプロジェクトチームを率いて対決したが、犠牲も少なくなかった。5人の捜査官エージェントが殉職。その中にジョーユア・マーチンがいた。

「ジョーとマリアは似合いのカップルだった。誰もが羨むほどの仲の良さでね。しかし、あの時、彼はTCのアジトを発見すると我々の到着を待たずに独行してしまった・・・」

何故マリアがスクラップの、魂がないピッカーを私にけしかけたか。その理由がジョーの死に方だ。あの頃はAPC（対ピッカー電腦支配システム）なんてなかった。ジョーは自分のピッカー諸共、感情を司るチップを抜かれて殺人鬼と化したピッカーの集団に八つ裂きにされたんだ」

ジョーは擬似ボードを掌で叩いて乱暴に音楽を切る。そして宙を

睨みながら、

「マリアはTPから消えた。その後一味は逮捕され事件は解決したが、我々には苦い教訓が残った。APCが開発されたのも常駐隊が強化されたのもそれが原因だ。未だに解決していない部分もある。それを何とかしようとして来たんだが・・・」

「何事も立場と捉え方ですよ」

静かにスペンドが言う。

「恨みは簡単に消えない。それは自己暗示みたいなものですからね。犠牲があつて、それが2度と起きないように対策があつて、それでも犠牲があつた事實は消えない。TCどもが過去をどんなに変えても現在がびくともしないように。マリアを慰めるものはもう、復讐しか残されていなかったんでしょうね」

誰もそれ以上、付け加えることはなかった。苦い現実には彼らの奥深くに刻まれてしまったのだ。後はそれが教訓として生かされるかどうか、それだけが問題だった。

物思いに沈む4人を乗せ、マシンが5世紀を出て1時間ほど、8世紀近辺を進行している時にそれは起きた。

4人の前に展開するスクリーンが一斉に切り替わり、男の姿が現れる。

「AD機動執行4班の諸君。こちら法務部警務課だ。諸君らに拘束命令が出ている。容疑は『年紀改変罪』及び『職権乱用罪』だ」

「何？」

スペンドはきつとスクリーンを睨む。ウインは肩を竦め、シンデイは目を開くが表情は変わらない。ジョーは微笑んだ。

「済みませんが大佐殿、容疑の内容を教えてくださいますか？」

スペンドが謙<sup>へりくだ</sup>つて言うと、大佐はタイムラグを経て口角を上げ、皮肉交じりに、

「保護対象を護るためとは言え必要以上の武力介入を行い、歴史に大きな損傷を与えたこと。たとえTCに操られたとは言え、現地住

民と交戦、数十名の死者も確認されたこと。任務執行権限を越え、退避せずに歴史介入を続けたこと。まだあるが、大きなものはこの3点だ」

スペンドは何か言い掛けたが、その前にシンデイが、「承知致しました。このまま待機でよろしいですか？」

大佐は数秒遅れて頷くと、「全員そのまま待機だ。ピッカーと火器類は即没収する・・・と、まあ、本来ならこのような手順で君らを厳罰が待っているのだが・・・私は個人的には君らの行動を許せない。いいか、2度と無茶はするなよ、私は釘を刺したからな！」

大佐は謎のようなことを言うと、最後にこちらを睨んで画像から消えた。シンデイが眉根を寄せ、ウィンとスペンドが顔を見合わせると画像が切り替わり、制服姿も凛々しい本部の女性秘書官が登場する。その右肩には白く00の数字。

「AD機動執行4班の皆さん、お揃いですか？」

シンデイはちらつとジョーの横顔を振り返る。その顔に謎めいた笑みを認めると、

「ええ、全員待機しています」

秘書はにつこり微笑むと、

「暫くお待ち下さい」

画像が消えると、珍しくシンデイは苛立った声音で、

「ジョー。あんたまさか、」

「そう。仕組ませて貰ったよ。君ら4班は誰が何と言おうが執行班ナンバーワンだ。あの7班の気障野郎がどんなに上へ媚を売ろうとその事実は変わらない」

ジョーは思い出し笑いをすると、

「マリアは色々な場所にTPの先鋭を誘い込む罠を仕掛けて回っていた。7班のサラトガ戦もそう、君らのゲーリングの一件もそうだ。彼女が情報を仕入れていたルートは3ヶ月前に解明していた。」

私は確実に彼女が狙うよう、エサの比重を増やしたのさ。スウエ

ーデンで潰し損ねた執行班のトップ4班。しかも憎むべきジョージ・ウォーカーが参加する。彼女が仕掛けない訳はない、と思ってる。だから君らが休暇開けとなる日程も、5世紀に派遣されることも彼女に筒抜けになるよう手を尽くしたのさ。」

「この下司！」

「まあ、シンデイ、そう怒るな、君らにだけ危ない目に遭わせた訳じゃないだろ？結果は上手く行ったじゃないか？」

「よく言うな、行き当たりばったりだったくせに」

「参った。その通りだよ。お？お偉いさんが出る。一つ傾聴しようじゃないか？」

尚もジョーを睨みながらシンデイは密かに吐息を吐き、一瞬ノイズに点滅したスクリーンに目を向ける。画面が切り替わると、そこに初老の男が現れる。

「4班の諸君、おはよう」

全員、画面に向けて敬礼する。画面の男も答礼した。

「ジョージのピッカーがやられたようだが、諸君に怪我はないようなので、一安心しているよ。まずは所期の目標を達成したようだね？ジョージ」

「ああ、多少てこずったけどね」

「それはなによりだ。君らに出ていた総務部と法務部からの拘束命令は私が取り消した。私からの直接命令による執行権限の拡大解釈だ、とね。だから彼らを黙らせるために約束したことを先ずはしなくてはならん。シンデイ・クロックフィールド大尉」

「はい」

「君は部下が執行権限を越えて行動した時に黙認し、追隨した。所属長による戒告処分とし、一ヶ月の職務停止を達する」

「申し訳ありませんでした」

「次に、ピエール・ド・ウィンスラブ中尉とマイクル・スペンサー少尉」

「はい」「はい」

「君らは上司の行動が規律を逸していると判断出来る立場にいたにも拘らず、行動を共にし、少尉に至っては独断専行した。同じく所属長による訓告処分とし、一ヶ月の職務停止を達する」

「遺憾に存じます」「済みませんでした」

初老の男はそこで一息吐くと、

「そして、ジョージ・ウオーカー大尉。君は正規業務外に別途、特別執行命令を受け、保護対象を護るため行動したとは言え、TCが仕掛けた歴史介入を拡大し結果的に対象年紀に深い損害を与えた。従って長官による戒告処分とする」

「承ります」

神妙な顔をして返すジョーを暫し見つめていた男は、シグナルラグ通信遅延の  
数秒後深い溜息を吐くと、

「昔なら尻を出せ、と言つて2、3発平手で叩いてやったところだが・・・彼女を追い詰めるためとはいえ、随分危ない橋を渡つたものだ。全くお前にはいつもヒヤヒヤさせられる」

「済まない、これも性分だから。でもね、マリアは抑えたが、彼女がTCどもに流したテクニカルやウチの情報は、今後第2、第3のマリアを産みかねないよ。覚悟しといたほうがいいね」

「もちろん分かっている。味方は少なく、やらねばならないことはただでさえ多い。ジョージ、もう無茶をするなよ、今、お前に死なれたら私はちょっと困つたことになるからな」

「了解しました、長官殿」

画面の男、TP長官はそこで表情を緩めると、

「シンディ。ウチのじゃじゃ馬の世話を押し付けて済まなかった。謹慎1ヶ月を有効に使いたまえ」

「この前1ヶ月休んだばかりですが」

「まあ、いいじゃないか。君たちは有給休暇をきちんと消化していないそうだからね。謹慎は休みではないが軟禁されるわけじゃない。滅多にない機会だ、しっかり休め。その後はますますきついことになりそうだからね」

「了解致しました」

そこで長官は笑みを浮かべると、

「ウィンスラブ君」

「はい。長官」

「前に何かの懇親会でワインの話をしたね」

「覚えておいででしたか」

「ああ。中々本物のフランス貴族と話す機会がなくてね。現代のヨーロッパ連合で貴族称号を持っているやんごとなき方々は単なる飾りだからね。よく覚えているよ。それで、ボルドーの逸品が手元にあるんだが、君に一本贈呈しよう。2323年。いい出来だよ」

「そんな・・・勿体ない」

慌てるウィンに長官は、

「ちゃんと味の分かる人間が飲むべきなんだ、銘酒というのはね。

明日、長官室で渡そう」

「ありがとうございます」

「スペンサー君」

「はい」

「スペンド君、と呼んだ方がいいのかな？」

「ご、ご随意に」

珍しくどもったスペンドに長官は満面の笑みで、

「ジョージは君を弟か何かのように言っとったよ。この男は食わせ物だから、これから君も苦労するだろうがね。どうかジョージのことをよろしく頼む」

「・・・了解しました」

そこで長官は表情を引き締めると、

「それでは諸君。明日、帰還後に長官室で会おう。ご苦労様でした」

皆が一斉に敬礼し、長官は頷くと画面が消えた。一瞬の後、あの女性秘書官が現れ、明日の長官とのアポイントメントを確認する。

彼女も消え、スクリーンが環境映像に変わると、誰ともなく吐息が

漏れた。

「長官と話したのは初めてだ」

スペンドがぼつりと言う。

「いい人だろう？ワインを買ってしまったよ。何をお返しすればいいんだ？」

ウィンもまだ呆けたようになってる。

「仕事で返せばいい」

シンディは頭の後ろに腕を組んで天井を仰ぎ見ている。何時になく穏やかな表情を浮かべていた。

「皆、申し訳なかつたね」

ジョーは神妙に、

「だが、全ては始まったばかりだ。これからもよろしく頼む」

そしてシンディに、

「それと、折角育て上げた部下を連れて行く私の我侭も許して貰いたい」

シンディはちらつとジョーを見やり、

「全く、本当に酷い話だ。2人も抜けてまたウィンと2人きり。一ヶ月後、4班はどうすればいいんだい？」

「その辺は考えている。スカウト課とニツクおじさん（作戦部長）から逸材を推薦して貰った。1人は19世紀江戸末期の日本人、もう1人は22世紀のアフリカ連合人だそうだ。適応訓練と初期課程は修了している、2人とも抜群の成績らしいよ。帰ったら面接してくれ」

「全く、何時そんな段取りを。手回しのいい・・・」

「一体、何の話をしてるんです？」

スペンドが割って入る。シンディは吐息を吐き、ジョーは思わず笑い出す。

「多分君の転属の話だろう・・・長官が匂わせていたからね、スペンド」

ウィンがつまらなそうに教える。しかし、スペンドはまだきよと

んとしていた。

「転属？」

「やれやれ、このお兄さんは一体何を聞いていたのかな？」

ウインは肩を竦めると、突然立ち上がり、すたすたとスペンドのシートの前に来る。そして、クイクイツと手招きする。何か、とスペンドが立ち上がると・・・

びっくりするスペンドをよそにウインは激しい勢いでスペンドの肩を抱き、引き寄せた。

「この跳ね馬野郎め、寂しくなるなあ！」

棒立ちのスペンドを、ウインはがっちり抱きしめている。何か気の効いたことを言おうとしたスペンドは、自分の首筋に当たるウインの頬につと流れるものを感じて、はっとした。

「そうか、俺は・・・」

スペンドはそう言い掛けて絶句する。目頭が熱くなったのに驚いたからだ。

「いずれにしても一ヶ月は休暇だ。三ヶ月で二週間しか働かないで済む、なんてこの先考えられないからね、スペンド。長官直属のマスターキングを付けた奴は長期休暇なんて気の効いたものはないから、覚悟して置けよ。私は君をそう滅多やたらに休ませないぞ」

ジョーは穏やかに言うと、何かを思い出して、一人笑い出す。

「それにしてもだ、今日の長官殿は最近になく機嫌が良かったじゃないか？そうは思わないか？」

ウインは涙目を制服の袖で擦る。

「さあ、分かりませんね。私は数回しかお会いしたことがないもので・・・シンディなら何度も一緒にいるはずですがね」

しかしシンディは右手を振って話を振るな、と伝える。ウインは肩を竦めて、

「私ら前線の者は、お偉いさんを見慣れている訳ではないですから」「オヤジは何時だって君らのこと、現場を忘れていないよ」

ジョーはスクリーンを見つめていたが、その目は遙か彼方を見遣

るように細められていた。

「セシル・ウォーカーが長官でいる限り、彼と私はTPを、君らを護ると約束する」

## Episode 07：帰還（後書き）

本作に登場した歴史上の重要人物『ファンクションキー』たち

ウィリアム・ピット（小ピット） 1759～1806

イギリス首相・政治家。チャタム伯爵ウィリアム・ピット（イギリス首相）の次男。同名で、しかも父子とも首相のため、父を大ピット、子を小ピットと通称する。幼少より病弱だったがいわゆる神童で、14歳でケンブリッジ大学に入学。これは未だに同大の最年少入学記録。

1780年下院選挙に出馬するも落選、翌年の欠員補充選挙で初当選する。表舞台に登場するや国王ジョージ3世の好意を獲得、アメリカ独立戦争による政治の混乱と一般民衆の熱烈な支持もあり、1783年僅か24歳でイギリス首相となる。

その後17年間の長期に渡り保守政権を維持、イギリスを牽引する。この間、フランス革命を受け、ナポレオンの台頭まで3回に渡り対仏大同盟を組織したので、人民の敵と呼ばれ、フランス最大の敵対者となる。

政治ではイギリスの保守勢力を糾合して2大政党政治の礎をなす。また、アメリカを失った大英帝国の混乱を收拾しアイルランドを併合、連合王国を成立させる。

国王との意見相違（アイルランドのカトリック教徒問題・01年）により首相を辞任するが、対ナポレオン戦争の激化により04年首相として復活。しかし翌1805年12月、対ナポレオン戦争の天王山、オーステルリッツの戦いにおいての対仏同盟側大敗の報を聞いた直後、病に倒れ、翌年1月ほとんど敗戦のショック死といえる最期を遂げた。

ジョージ・ワシントン 1732～1799

アメリカ合衆国初代大統領・軍人（中将）・政治家。バージニア州の中流家庭に生まれ、農園主となる。兄ローレンスの死により地区民兵隊長となり、フレンチ・インディアン戦争に従軍する。

その後裕福な未亡人マーサと結婚し社会的地位が向上すると、本国イギリスと植民地13州との軋轢で頭角を現し、1775年レキシントンの戦いの後、大陸軍を組織、総司令官として独立戦争を戦う。1777年、当時の首都フィラデルフィア陥落後の危機に際し、ヴァリーフォージにおける冬営で部隊を再建、翌年から次第にイギリス軍を圧倒、遂に勝利を得る。

1783年には総司令官を退き、農園主に戻ったが、1787年請われて政界に復帰、憲法制定会議議長となる。1789年第一回大統領選挙で圧倒的支持を受け初代大統領に就任。イギリスとの関係修復やフランス革命後悪化していたヨーロッパでの戦乱におけるアメリカの中立に尽力した。

1797年大統領職を辞任、1799年暮、寒波の中での馬による外出後に発熱、肺炎を起こして死去した。

ヘルマン・ゲーリング 1893～1946

ドイツの軍人・政治家。バイエルンにて高級官吏の子として出生するが、その後の人生から見ると皮肉なことに実父は母の愛人だった裕福なユダヤ人貴族と推定されている。1901年に陸軍士官学校入学、以降第一次大戦終了まで軍人として生きる。

第一次大戦直前では陸軍歩兵少尉だったが開戦後に航空隊を志願、1915年偵察飛行士を経て戦闘機パイロットとなる。大戦中敵機22機を撃墜、また、戦死するまで撃墜王リヒトフォークヘンが率い、最高の戦闘機大隊と謳われた第一戦闘機大隊長にもなり、最高武勲

章プール・ル・メリット勲章戦功章を受ける。

終戦後、ドイツ革命に嫌気が差し、軍を辞め、曲芸飛行士や輸送旅客機パイロットとしてヨーロッパを放浪、スウェーデンで将来の夫人カリンと出会う。

1922年ミュンヘンでヒトラーと出会い、意気投合、翌23年ヒトラー一派のミュンヘン一揆で主要メンバーとなり妻カリンと共にドイツから逃亡する。

27年恩赦により帰国するとナチス党に復帰、28年国会議員、32年国会議長、33年ヒトラーのドイツ首相就任に従いプロイセン州内相となり、事実上ドイツの国家権力を掌握する。この間、最愛の妻カリンを病気で失っている。

35年ドイツ再軍備の際誕生した空軍を掌握、以後第2次大戦終了直前までドイツ空軍総司令官。第二次大戦勃発後の40年、国家元帥の称号を得て、ナチスドイツナンバー2の権力者として君臨する。また、悪名高いユダヤ人の最終的解決（拘束・収容し虐殺）などの決定に際し主要な立場にあり、ゲシュタポ（国家秘密警察）の元となる組織を作ったのもゲーリングである。

終戦後、連合国に戦犯として逮捕、ニュルンベルク裁判にて有罪・死刑を宣告されるが獄中、密かに手に入れた青酸カリのカプセルを啜り自殺して果てた。

アッティラ 406?~453

ゲルマン民族大移動の原因のひとつとなった、モンゴル系と思われるものの未だに正確な正体不明の騎馬民族、フン族の王。『神の鞭』『神の災い』と恐れられた。

フン族王ルーラの甥として生まれ、兄弟ブレラと共に王の下で成長する。幼少の頃、西ローマ帝国より人質として送られていた貴族の子アエティウスと知り合い友人となるが、その後ローマに帰還したアエティウスはカタラウヌムの戦いで総大将となりアッティラの軍

を散々に打ち破ることになる。

434年ルーラの死後ブレラと2分割の形でフン族とゲルマン、スラブの従属民族を従えたが、445年、ブレラを狩の最中に事故と見せかけ謀殺しその所領を加え単独の王となった。その後東ローマに攻め込み大勝、アッティラの帝国はローマ世界を崩壊寸前に追い込む。

451年、フン族とゲルマン諸民族連合軍で西ローマ支配下のガリア（フランス）に攻め込むも現パリ東方のカタラウヌムで西ローマや西ゴート族らと対戦、大敗を喫する。翌年、進軍方向を南方に変えローマ近くにまで進軍するが兵が疾病などで疲弊したため賠償金を手に入れただけで撤退する。

453年、自らの婚礼の酒席で泥酔、寝ている最中に鼻血を喉に詰まらせ窒息死する、という疑惑の死を遂げる。

翌年従属民族が蜂起、アッティラの長男エラクが敗死し、フン族の帝国は崩壊に至る。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8939h/>

---

TP - TC

2010年10月8日14時05分発行